

多利遺跡群

発掘調査報告

近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書(VI)

1987.3

兵庫県教育委員会



兵庫縣埋藏文化財調查報告書第46冊

多利遺跡群

発掘調査報告

近畿自動車道舞鶴線関係
埋藏文化財調査報告書(Ⅷ)



1987.3

兵庫縣教育委員会



SX-1 出土瑞花鸞鏡

例 言

- 1 今回報告する調査結果は、日本道路公園の委託により近畿自動車道舞鶴線の建設に先がけて、昭和58（1983）年に兵庫県教育委員会が実施した多利遺跡群の発掘調査に関する報告書である。但し、確認調査は昭和57年に行った。
- 2 多利遺跡群は、兵庫県氷上郡春日町多利字前田・岡中・小向・寺ノ下の4箇所に所在する。このため、それぞれの字名を取って各遺跡名とする。ただ、前田遺跡のみは遺跡自体が字奥の谷にも広がっている。
- 3 昭和57年の確認調査は加古千恵子・岸本一宏が行い、翌昭和58年の全面調査は加古と平田博幸が実施した。
- 4 現地での遺構・遺物の写真は調査員が撮影し、整理後の遺物の写真撮影は森 昭氏の手を煩わせた。
- 5 遺物の復原・図面の作成に際しては、広戸紀子・密谷美音・密谷美和・藤重あけみ・前田陽子・平井美鈴・早川龍紀子・中澤貴美子・本窪田英子の助力があった。
- 6 金属製品の保存処理は加古が兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行い、X線写真の撮影・化学分析については、奈良国立文化財研究所の沢田正昭・肥塚隆保氏の御指導の下に加古が行った。
- 7 本書の編集は主に加古と平田が行い、岸本の援助を得た。

本文目次

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経過……………1
2. 調査の体制……………1
3. 遺跡の立地と調査の概要……………3
4. 調査日誌……………5

第2章 遺跡の調査

1. 遺跡の歴史的環境……………7
2. 確認調査……………9
3. 全面調査……………11

多利・前田遺跡

- A. 掘立柱建物址・溝とその遺物…11
- B. 土城とその遺物……………33
- C. 土城墓とその遺物……………34
- D. 包含層出土の遺物……………42
- E. 東調査区出土の遺物……………43
- F. 小結……………44

多利・岡中遺跡

- A. 柱穴・ピット……………45
- B. 包含層出土の遺物……………45
- C. 小結……………46

多利・小向遺跡

- A. 調査の概要……………48
- B. 遺構……………48
- C. 遺物……………48

- D. 小結……………52

多利・寺ノ下遺跡

- A. 各調査区の概要……………53
- B. 調査の結果……………53
- C. 包含層出土の遺物……………57
- D. トレンチ調査について……………58
- E. 小結……………60

第3章 まとめ

1. 多利・前田遺跡の掘立柱建物址について……………61
2. 多利遺跡群出土の瓦器について……………64
3. SX-1 出土双鳥鏡について……………69
4. 結語……………73

付 載 多利・前田遺跡SX-1 出土遺物の保存処理と材質分析

1. はじめに……………81
2. 漆箱の保存処理……………81
3. 鉄製品の保存処理と材質分析……………81
4. 和鏡の保存処理と材質分析……………84

挿 図 目 次

第1図	各遺跡の位置図	4
第2図	周辺の遺跡	8
第3図	確認調査グリッド配置図	10

多利・前田遺跡

第4図	掘立柱建物址(SB)-1と溝(SD)-2	12
第5図	多利・前田遺跡遺構配置図	13, 14
第6図	SB-1柱穴内礎石設置の状況	15
第7図	SD-2出土の土器	16
第8図	掘立柱建物址(SB)-2	16
第9図	掘立柱建物址(SB)-3と溝(SD)-3	17
第10図	SB-3礎石設置の状況	18
第11図	SD-3遺物出土の状況	18, 19
第12図	SD-3出土の皿	20
第13図	SD-3出土の土器	21
第14図	SD-3出土の土鏝	21
第15図	掘立柱建物址(SB)-4	22
第16図	掘立柱建物址(SB)-5	22
第17図	掘立柱建物址(SB)-6	23
第18図	掘立柱建物址(SB)-7と溝(SD)-4	24
第19図	SB-7柱穴断面図	25
第20図	SB-7柱穴内出土の土器	25
第21図	SB-7柱穴内瓦器出土の状況	26
第22図	掘立柱建物址(SB)-8	26
第23図	SB-8柱穴内礎石設置の状況	27
第24図	SB-8柱穴内瓦器出土の状況	27
第25図	SB-8柱穴内出土の瓦器	27
第26図	掘立柱建物址(SB)-9	28
第27図	掘立柱建物址(SB)-10	29
第28図	掘立柱建物址(SB)-11	30
第29図	SB-11柱穴内出土の土師器	30
第30図	溝(SD)-1	31
第31図	SD-5出土の土器	32
第32図	溝(SD)-5	32
第33図	SD-6断面図	32
第34図	SX-1とSD-6関係図	33
第35図	SD-6出土の瓦器	33
第36図	SK-1出土の瓦器	33

第37図	SX-1遺物出土の状況	34
第38図	SX-1	35
第39図	SX-1出土の土師器	36
第40図	SX-1出土の輸入磁器	37
第41図	和鏡拓影	38
第42図	SX-1出土の鉄製品	39
第43図	SX-2出土の土器	39
第44図	SX-2	40
第45図	包含層出土の土器	41
第46図	ピット内出土の土器	43
第47図	東調査区包含層出土の土器	43

多利・岡中遺跡

第48図	多利・岡中遺跡遺構配置図	46
第49図	包含層出土の須恵器	47

多利・小向遺跡

第50図	多利・小向遺跡遺構配置図	49
第51図	包含層出土の皿・小皿	50
第52図	包含層出土の柄・変等	51
第53図	包含層出土の鉄斧	52
第54図	確認調査№32グリッド出土縄文土器	52

多利・寺ノ下遺跡

第55図	多利・寺ノ下遺跡地区割図	53
第56図	第3区遺構図	54
第57図	集石土壌	55
第58図	第6区遺構図	56
第59図	集石土壌内出土の播鉢	57
第60図	包含層出土の土器	58
第61図	第1トレンチ出土の土器	59
第62図	第1トレンチ遺構図	59
第63図	第2トレンチ出土の土器	60
第64図	確認調査№39グリッド出土瓦質製品	60
第65図	12世紀末～13世紀初頭の遺構	61
第66図	13世紀前半の遺構	62

第67図	12世紀後半の遺構……………63	定箇所(鏡面部)……………85	
第68図	瓦器編年試案……………65	第72図	和鏡の蛍光X線分析による錫/鉛の 相対含有量の比較……………85
第69図	玉状不明鉄製品の玉の内面サンプル のX線回折チャート……………82	第73図	和鏡の蛍光X線定性分析チャート図86
第70図	玉状不明鉄製品の玉の外表面サンプル のX線回折チャート……………83	第74図	和鏡と比較標準試料の蛍光X線定量 分析チャート図……………87
第71図	和鏡の蛍光X線による非破壊分析測	第75図	標準試料より作成した錫の検量線…88

図 版 目 次

巻頭図版	全	SX-1出土双鳥鏡	
カラー図版1	上	SX-1完掘の状況	
	下	SX-1内副葬遺物出土の状況	
カラー図版2	全	SX-1出土輸入磁器	
多利・前田遺跡			
図版1	多利・前田遺跡発掘調査区全景	図版8	上右下 SB-7柱穴6の断割断面 下左上 SB-7柱穴11内瓦器柄 出土の状況
図版2	上 多利遺跡群全景(南より) 下 SD-1.2・SB-7.8検出の状況 (西より)		下左下 SB-7柱穴11の断割断面 下右上 SB-7柱穴9の断割断面 下右下 SB-7柱穴15の断割断面
図版3	上 調査区中央部から南東部 (西上方より) 下 遺跡中央部の各遺構(北より)	図版9	上左上 SB-8柱穴12内瓦器柄 出土の状況 上左下 SB-8柱穴12の断割断面 上右上 SB-8柱穴15の断割断面 上右下 SB-8柱穴18の断割断面 下 SB-9
図版4	上 SB-1とSD-1.2 下 SB-2 SK-1(北より)	図版10	上 SB-10.11(北より) 下 SD-1.2.4(北より)
図版5	上 SB-3 SD-3 下左上 SB-3柱穴3の断割断面 下左下 SB-3柱穴3の断割断面 下右上 SB-3柱穴18の礎石 下右下 SB-3柱穴18の断割断面	図版11	上 SX-2(東より) 下 SX-1完掘の状況(西より)
図版6	全 SB-3柱穴	図版12	上 SX-1完掘の状況(北より) 下 SX-1とSD-6
図版7	上 SB-4.5.6.9(北より) 下 SB-7.8・SD-3.4(北より)	図版13	上 SX-1内北東部遺物出土の状況 下 SX-1内和鏡・握り鉄出土の状況
図版8	上左上 SB-7柱穴5内瓦器柄 出土の状況 上左下 SB-7柱穴5の断割断面 上右上 SB-7柱穴6内瓦器柄 出土の状況	図版14	上 SX-1内白磁皿・鉄製品・漆模 出土の状況 下 SX-1遺物取り上げ後の状況

多利・岡中遺跡		図版24	全	SX-1 出土白磁の小皿		
図版15	上	多利・岡中遺跡から多利・小向・寺ノ下の各遺跡を見る	図版25	全	SX-1 出土青白磁の合子(身部)	
	下	調査区中央部(北より)	図版26	全	土師器小皿	
多利・小向遺跡		図版27	上	土師器小皿		
図版16	上	多利・小向遺跡調査区全景(南より)	下	瓦器小皿		
	下	包含層内出土蔵骨器片	図版28	全	瓦器小皿	
多利・寺ノ下遺跡		図版29	全	瓦器小皿		
図版17	上	多利・寺ノ下遺跡(松ノ本古墳群より)	図版30	上	瓦器小皿	
	下	第2区全景(西より)	下	瓦器椀		
図版18	上	第3区検出の土壌(東より)	図版31	上	瓦器椀	
	下	第6区全景(西より)	下	瓦質土器椀・黒色土器椀		
図版19	上	第6区集石土壌	図版32	上	須恵器	
	下	壙底部内探鉢出土の状況	中	須恵器甕・土師器短頸壺		
図版20	上	第1トレンチ検出遺構状況(東より)	下	石器		
	下	第2トレンチ・土師器小皿出土状況	図版33	上	SX-1 内出土鉄製品	
多利・前田遺跡			下	SD-3 内出土土錘		
図版21	上	SX-1 出土瑠花鶯鶯鏡(裏面)	多利・岡中遺跡			
	下	SX-1 出土瑠花鶯鶯鏡(表面)	図版34	上	須恵器・紡錘車・磁器	
図版22	上	SX-1 出土双鳥鏡X線写真	下	確認調査№32グリッド出土 縄文土器		
	中	SX-1 出土和鏡X線写真	多利・小向遺跡			
	下	SX-1 出土鉄製品X線写真(2点)	図版35	全	多利・小向遺跡出土土器	
図版23	全	SX-1 出土青白磁の蓋付き小壺	図版36	上	包含層内出土鉄斧	
			下	確認調査№39グリッド出土 瓦質製品		
多利・寺ノ下遺跡		多利・寺ノ下遺跡		図版37	全	多利・寺ノ下遺跡出土土器

表 目 次

表1	各掘立柱建物址一覧表	44
表2	瓦器椀器高指数表	68
表3	多利・前田遺跡出土土器一覧表	75
表4	多利・岡中遺跡出土土器一覧表	78
表5	多利・小向遺跡出土土器一覧表	79
表6	多利・寺ノ下遺跡出土土器一覧表	80

第 1 章 調査の概要

1. 調査に至る経過

阪神地域と日本海側の舞鶴市とを直結しようと計画された近畿自動車道・舞鶴線は、中国縦貫道の吉川から分岐し、兵庫県水上郡市島町から京都府の福知山市を抜けて、舞鶴へと連絡する自動車道路である。

多利遺跡群の所在する春日町は市島町の南にある。多紀郡から多紀連山を抜けてきた自動車道は、春日町の平野部分へと下り、東側の山裾に沿いながら市島町へとつながる。

こうして春日町の中を通過する近畿自動車道・舞鶴線の工事着工に先立って、路線用地内における埋蔵文化財の有無を確認するために、昭和57年に分布調査によって多くの遺物を採集することのできた多利地区に2×2mのグリッドによる確認調査を実施した。春日町内での兵庫県教育委員会による近畿自動車道・舞鶴線に関連した埋蔵文化財の発掘調査は、この年から本格的に着手され始めた。

多利地区での昭和57年の確認調査の結果、多利・向山古墳群の北下手の水田、そのさらに北側に一箇所、さらに蓮華寺への参道の北側に二箇所の遺物散布および遺構の存在する地区を限定することができた。この調査結果にもとづいて、さきの4箇所を全面調査を実施することにした。全面調査は、翌昭和58年の9月より行った。

2. 調査の体制

発掘調査は、兵庫県教育委員会が昭和58年9月12日～昭和59年3月24日にかけて行った。本書の制作に関する整理作業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において昭和61年度に実施した。

一確認調査（昭和57年）一

社会教育・文化財課	課長	藤本 繁
	参事	吉村 芳郎
	副課長	道畑 實
	課長補佐	池田 義雄

文化 財係 主任	大村敬通 西口和彦 小川良太 水口富夫 福永慶造 堀永洋 杉本恵子 加古千恵子 岸本一宏
技術職員 課長補佐兼 管理係長	
課長補佐	
事務職員	
調査員	
◇	

— 本調査 (昭和58年) —

社会教育・文化財課

課長	西沢良之
参事	大西章夫
副課長	森崎里一
課長補佐	池田義雄
文化 財係 主任	榎本誠一
技術職員	大平茂
課長補佐兼 管理係長	福永慶造
主任	八家均
事務職員	杉本恵子
調査員	加古千恵子
◇	平田博幸

調査補助員 西尾知恵子・畑敏幸・谷川茂喜・荻野享明・荒木俊雄・和田卓也・泉重喜

地元参加者 荒木俊雄・上田洋子・岡西あやの・荻野喜代蔵・荻野みさえ・高見和夫・高見さわ子・高見章造・高見千代野・高見つや子・畑三之助・畑たか子・畑道雄・三浦美津恵・三井信子・柳田茂・山本和子・岸富美雄・前田行雄・中野武夫・三枝康男・高見永之助・上見高史・田村さわえ・柴原あさの・山田茂・義積久二郎・上山七左エ門・岡田福治・尾松勝次・谷垣輝治・畑久吉・秋山寿栄・舟川政子

—整理作業（昭和61年度）—

社会教育・文化財課	課長	北村幸久
	参事	森崎里一
	副課長	黒田賢一郎
	課長補佐	福田至宏
	課長補佐兼埋蔵文化財係長	大村敬通
	主査	山本三郎・小川良太
	〃	井守徳男
	主任	加古千恵子
	技術職員	渡辺昇
	管理係長	小西清
	主任	八家均
	事務職員	松本豊彦
	〃	足立彰久
	調査員	加古千恵子
	〃	岸本一宏・平田博幸
	整理補助員	広戸紀子・宍谷美音・前田陽子・平井美鈴・宍谷美和・中澤貴美子・早川亜紀子・藤重あけみ

発掘調査及び整理作業の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所に数々の御協力と御便宜を賜り、また春日町及び水上郡教育委員会をはじめ地元の関係者の方々にも惜しめない御協力をいただき、発掘調査を無事に終了出来たことを深く感謝する。さらに、遺物整理にあたり奈良国立文化財研究所の沢田・肥塚の両氏には多くの御指導を頂いたことを記しておく。

3. 遺跡の立地と調査の概要

確認調査の結果、調査地区は4箇所に限定できた。それぞれの地区の遺跡名は、その字名をとって北より多利・寺ノ下遺跡、多利・小向遺跡、多利・岡中遺跡、多利・前田遺跡と称することとした。

この遺跡群は、山塊から北もしくは北東の方向に伸びた扇状地上に立地しているが、それぞ

れにその立地条件は微妙に異なっている。

多利・前田遺跡は、約2,700㎡を調査対象区とした。遺跡は南に入り込んだ谷の口部に位置しており、そのすぐ北側は大きく角度を変えて平野部へと続いているため遺跡は南から北に緩やかに傾斜する。遺跡の中心は谷部の中であり、今回調査した箇所は遺跡のちょうど北の端にあたる。検出できた遺構は、11棟の掘立柱建物址とそれに伴う雨落ち溝、それに土壌墓である。この土壌墓には、和鏡と輸入磁器などが副葬されていた。掘立柱建物址には、2もしくは3度の重複がみられる。平安時代後半から鎌倉時代前半の遺跡である。

多利・岡中遺跡は、多利・前田遺跡とは小さな谷を挟んで北側にある。蓮華寺の方向から伸びてきた扇状地の、斜面の南の端に位置している。斜面は緩やかであるが、遺跡の南と西は谷と平野部に向かって大きく落ち込んでいく。ただ遺跡自体は、さらに山側へ広がっているものと思われる。現在この一帯は、緩やかな階段状の水田となっているため、遺跡も山側はかなり削平されており、遺構の残存状況は決して良い状況ではなかった。辛うじて検出出来た遺構は、非常に浅いピット・柱穴ばかりであり、それらの遺構も掘立柱建物址などになるものは全くみあたらない。包含層から出土する遺物は、ほとんどが奈良時代後半～平安時代のものであり、これらの遺構もこの時期のものと思われる。約850㎡を調査地区とする。

多利・小向遺跡は、多利・岡中遺跡のある扇状地の稜線上に位置している。遺跡は水田一筆分の約220㎡のみであり、東は山に向かってのぼっていき、北と西は谷に落ち込んでいくような位置にある。遺構は、多利・岡中遺跡とよく似た状況にあり、その性格を判断することの出来ない柱穴・ピットばかりであった。包含層の遺物からみて13世紀の遺跡と思われる。

多利・寺ノ下遺跡は遺構の検出状況がおもわしくないため、途中でトレンチ状の調査に切り替えて調査した。遺跡は扇状地の北側斜面にあり、多利・小向遺跡のすぐ北東に位置している。東側は山へとつながり、北と西側は谷へと落ちていく。遺構は13世紀と江戸時代の墓塚を一基ずつ確認した以外は、明確な遺構は検出できなかった。また、松ノ本古墳群との間にもトレンチを2本入れたが、うち西側のトレンチで柱穴・ピットを検出した。



第1図 各遺跡の位置図

4. 調査日誌

1983年

- 9月12日 現場用プレハブの建設予定地の確認調査。寺ノ下遺跡の草刈り。
9月19日 機材類の搬入。テントの設置。
9月20日 ベルトコンベアの搬入。多利・岡中遺跡の草刈り。
9月21～23・26日 多利・前田遺跡の草刈り。
9月27～30日 多利・前田遺跡重機掘削。
10月3・4日 *
10月5日 ベルトコンベアの設置。
10月6・7・10～12日 多利・前田遺跡東調査区の表土掘削。
10月13・14日 多利・前田遺跡の周溝の掘削。
10月19日 雨。
10月20日 多利・前田遺跡 中段を遺構面まで下げる。
10月21日 * SD-1、2、4 SB-7、8を検出。
10月24日 * SD-3 SB-3を検出。
10月25日 * SB-7、8の柱穴の掘り下げ。
10月26日 * SB-3の柱穴の掘り下げ。礎石を検出。
10月27日 * SB-4、5、6を検出し柱穴を掘り下げる。
10月31日 * SB-1を検出、柱穴を掘り下げる。SX-2を検出。
11月1日 * 上段南東隅を若干拡張。
11月2日 * 下段を遺構面まで下げる。
11月3日 * SB-10、11、SD-6を検出。
11月4日 * SB-9 SX-1を検出。遺構の掘り下げ。
* SX-1より青白磁出土。
11月7日 * 午前は雨。中段セクションの取りはずし。
11月8日 * 東調査区のセクション取りはずす。SD-1、6の掘削。
11月9日 * SD-2とSD-3の一部を掘り上げる。
11月10日 * SD-3を完掘。多利・岡中遺跡の草刈り。
11月11日 多利・岡中遺跡に周溝を掘る。東側より第七の掘削。
11月14日 多利・岡中遺跡の表土掘削。多利・前田遺跡の実測用割付け開始。
11月15～18・21日 多利・岡中遺跡の包含層をはずして遺構面まで下げる。
雨。
11月22日 雨。
11月23日 多利・前田遺跡の遺構平面実測。多利・岡中遺跡の表土掘削。
11月24・25日 多利・岡中遺跡のセクションの取りはずし。遺構面の清掃。北・東に拡張の必要が生じる。
11月28日 多利・前田遺跡の遺構平面実測。
11月29日 多利・寺ノ下遺跡に排水のための溝を掘る。
11月30日 多利・岡中遺跡の柱穴を掘る。
12月1日 多利・岡中遺跡重機により北と東側を拡張。多利・小向遺跡の表土掘削を行う。
12月2・5日 多利・岡中遺跡の拡張区の掘削。多利・小向遺跡の表土掘削。
12月6日 多利・岡中遺跡の拡張区の遺構検出。多利・前田遺跡は気球撮影に備えて上段の清掃。
12月7・8日 多利・前田遺跡の中・下段の清掃。
12月9日 多利・前田遺跡の主要遺構を写真撮影。

- 12月12日 雨。
 12月13日 気球による多利・前田遺跡の空中撮影。
 12月14～16日 多利・前田遺跡の建物址とSX-1の断ち割り。
 12月19～23日 *
 12月26～28日 多利・前田遺跡建物址の柱穴断面の実測。年末につき本年の作業は本日に終了。

1984年

- 1月9日 多利・岡中遺跡の写真撮影。 多利・小向遺跡の重機掘削。
 1月10・11日 多利・小向遺跡の掘削。 多利・寺ノ下遺跡の重機掘削。
 1月12日 多利・小向遺跡は遺構検出。 多利・寺ノ下遺跡の重機掘削。
 1月13日 多利・小向遺跡は遺構を掘り上げ、写真撮影。 多利・寺ノ下遺跡は1区の包含層の掘り下げ。
 1月16日 多利・寺ノ下遺跡1区の包含層の掘削終了。重機掘削も終了。
 1月17・18日 * 2区の包含層の掘削。遺構検出。
 1月20日 * 3区の包含層掘削。SK-1を検出。4区の包含層の掘削(南半分のみ)。
 1月23日 * 5・6区の包含層の掘削(6区は南側のみ)。5区で集石土壌を検出。
 1月24日 * 7・8区の包含層の掘削。8区で土壌を検出。
 1月25・26日 * 9区の南側の包含層を掘削。第1トレンチを掘削。
 1月27日 * 第2トレンチを掘削。
 1月30日～ 積雪のため屋外作業中止。
 2月3日
 2月6日 多利・小向遺跡の平敷測量。
 2月7～10日 積雪のため屋外作業中止。
 2月13～17日 降雪がおさまったため、降雪を開始する。
 2月20日 多利・寺ノ下遺跡第1・2区の土層南壁の実測。
 2月21日 * 第1・2区の遺構平面実測。
 2月22日 * 第4・5・6区の写真撮影。
 2月23日 雨。
 2月24～25日 多利・寺ノ下遺跡第4・5区の遺構平面実測。
 2月27・28日 * 第4・5・7・8区の平敷実測。
 2月29日 多利・岡中遺跡の平敷実測。
 3月1日 多利・前田遺跡のSB-8柱穴断ち割りを実測。多利・岡中遺跡は平面実測。
 3月2日 多利・前田遺跡のSB-1柱穴断ち割りを実測。多利・岡中遺跡は平面実測。
 3月5日 多利・前田遺跡のSB-2・3柱穴断ち割りを実測。多利・岡中遺跡は平面実測。
 3月6・7日 多利・前田遺跡のSB-5・6・9・10・11柱穴断ち割りを実測。
 3月9・12日 多利・小向遺跡の遺構平面実測。
 3月13日 雨。
 3月14日 多利・寺ノ下遺跡6・7区の遺構平面実測。
 3月15日 多利・寺ノ下遺跡8・9区の写真撮影。遺構平面実測。
 3月16日 雨。 国領散布地掘削。立会。
 3月17日 多利・小向遺跡調査区の断面実測。
 3月19・20日 多利・寺ノ下遺跡、多利・小向遺跡の遺構の断ち割り。
 3月21日 多利・寺ノ下遺跡遺構の断ち割り。第6区集石土壌の掘り上げ。
 3月22日 * 第1・2トレンチの掘り上げ、写真撮影。第6区集石土壌の実測。
 3月23日 * 第1トレンチの遺構平面実測。第6区集石土壌の最終写真撮影。
 3月24日 道具類の撤去。ベルトコンベアの撤出。

第2章 遺跡の調査

1. 遺跡の歴史的環境

春日町内における埋蔵文化財については、國場整備やこの近畿自動車道・舞鶴線などに伴う発掘調査によって、近年ようやくその実態が明らかとなりつつある。

以前には棚原所在の野村遺跡より、長さ32cmの完形の磨製石剣が偶然に発見されていた。地上から確認のできる古墳は、平野部を取り巻く山裾に約50基前後が確認されているが、特に稲塚には王塚なる前方後円墳があり、多くの馬具や玉類を出土したと記されている。現在確認できる唯一の前方後円墳は野上野に所在している二間塚古墳である。この古墳は全長約37mと小規模なものであるが墳丘は良く残り、かつての発掘により内部主体は石室であったと伝えられている。時期ははっきりとしないが、古墳時代中頃から後半にかけてのものと思われる。

昭和56年(1981年)に野村遺跡東側の山裾の野々間において、二口の銅鐸(外縁付鈕式銅鐸)が発掘調査によって出土した。加えて、昭和57年から本格的に始まった近畿自動車道・舞鶴線の建設に伴う発掘調査によって、その状況はまさに大きく変化しつつある。

野々間遺跡の東、野村の石剣出土地の北にあたる棚原字山垣では、甲長関係の木簡を出土した山垣遺跡(奈良時代前半)が発見され、そのすぐ北西の七日市では、周溝墓・住居址を伴う県下でも屈指の規模を持つ弥生時代中期から古墳時代初頭の集落址と平安時代前半の氷上郡衙址と思われる掘立柱建物址群などの遺構群の下層で、始良火山灰を伴った後期旧石器群が出土している。この二遺跡が、それぞれ今後の研究に与える影響は多大なものと思われる。

また、多利遺跡群の東側の山塊にある、松ノ本古墳群(5世紀～6世紀)・多利古墳群(5世紀～7世紀)などの発掘調査は、二間塚古墳からつながる多利地区の古墳群の状況をほぼ明らかにした。

このように、弥生時代から平安時代にかけての資料は豊富となり、その実態をかなり具体的に推測することも可能となってきたが、それ以降の時代については野村城址・河津館跡・黒井城址などの地上調査が若干あるものの、考古学的資料は非常に乏しいものであった。しかし、この多利遺跡群の調査事実、翌昭和59年度における氷上郡教育委員会の宇奥の谷地区の調査結果とあわせて、中世丹波におけるこの地の重要性を語るに、重要な資料を提示したことになるとと思われる。さらには、県教育委員会による國領所在の國領遺跡(弥生時代後期と中世前半)の調査も加えて、しだいに中世に関する考古学的資料も増加しつつあり、春日町におけるこの時代の実態も徐々に明らかになりつつある。



第2図 周辺の遺跡

- | | | | |
|-----------|-----------|--------------|------------|
| 1. 多利遺跡群 | 2. 柏野古墳群 | 3. カナツキ遺跡 | 4. カナツキ古墳 |
| 5. 松ノ本古墳群 | 6. 多利古墳群 | 7. 柴ヶ西古墳 | 8. 二間塚古墳 |
| 9. 野上野塚跡 | 10. 野上野城跡 | 11. 野々間遺跡 | 12. 塩ヶ谷古墳群 |
| 13. 野村遺跡 | 14. 山垣遺跡 | 15. 春日・七日市遺跡 | 16. 野村城跡 |
| 17. 多田散布地 | 18. くど山古墳 | 19. 黒井城跡 | |

2. 確認調査

確認調査は、昭和57年11月1日より11月25日まで実施した。調査対象地区は多利集落西方の約36,000m²であった。

確認調査の実施にあたっては、近畿自動車道舞鶴線建設に先立つ分布調査の結果をもとに、遺構・遺物の有無を確認するために、調査対象地区内にグリッド(2×2m)を39箇所を設定し、土層の堆積状況もあわせて観察した。

その結果、第3図に示すグリッドNo.9・11・21・32・37において遺構および遺物を検出したため、各状況に応じてそれぞれのグリッドを拡張して遺構の性格の把握につとめた。また、遺構・遺物が検出されなかったグリッドにおいては、砂礫層など無遺物層まで掘り下げるようにした。山裾という地形であるため、表土から無遺物層までは比較的浅く、30~50cmが殆んどであり、発掘総土量は102.3m³であった。

遺構を検出したグリッドは分布調査時においても多数の遺物が採集されていた場所でもある。確認調査の結果、遺構・遺物を検出したグリッドの存在する箇所は大きく4つの地区に分かれており、いずれも耕土直下ないし床土直下に遺物包含層・遺構が存在した。以下、各地区について確認調査の結果を述べることにする。

第1地区(前田地区)

第3図のグリッドNo.3~13の範囲であり、特にグリッドNo.3・9・11において遺構を検出し、グリッドNo.13において遺物包含層を認めた。グリッドNo.3においては床土直下の灰褐色土を掘り込んだ柱穴らしきものを検出した。しかし、断面が「U」字形を呈しており、深さも浅く、柱穴とするにはやや不安を残した。グリッドNo.9においては、西側壁の断面に柱穴が認められたため、西へ2m拡張したが、他に柱穴は認められなかった。そこで、さらに西へ2m、北へ2m拡張して柱穴の並びを追求した。その結果、床土下に遺物包含層が認められ、包含層下に幅約1m、深さ約20cmのほぼ東西方向の溝と、周辺に柱穴を検出した。柱穴は4個が四角形に並んでおり、建物跡である可能性は非常に高いと考えられた。溝については、西側半分のみを発掘したが、埋土中より、瓦器・土師器・須恵器・白磁が多量に出土した。また他に、土釜・鉄器も認められた。グリッドNo.11においては南半分の床土下にグリッドNo.9の遺構と同じ暗褐色土の埋土をもつ土塊状の遺構を検出した。そのため、南へ2m拡張して精査を行った。その結果、土塊の他に柱穴らしきもの2個と浅い溝状の遺構を検出した。土塊はさらに東側に続いていたが、調査の性格上拡張は行わず、検出した部分の南半分のみを掘り込んだ。土塊の深さは26cmで、底は平坦で、20~30cm大の礫5個が底に密着していた。また、埋土最上層より土師器蓋完形品、埋土中より瓦器・土師器・須恵器が多量に出土した。第1地区で遺構が検出されたグリッドの遺構ベース土が、グリッドNo.4~8においても同様の黄褐色の粘質土であるため、

遺構は検出されなかったものの、遺構の存在する可能性は十分推察できた。

第2地区 (岡中地区)

グリッドNo.21において、床土下の灰褐色粘質土中に遺物を多量に含んでおり、その下に柱穴を検出することができた。そこで、柱穴のつながりを確認するために北へ2m拡張したところもう1個の柱穴が検出され、建物跡である可能性が大きいことが判明した。

第3地区 (小向地区)

この地区については、グリッドNo.32において縄文時代後期の粗製深鉢が出土したため、遺構の存在を想定し精査したが、発掘範囲が狭いことなどに重ねて湧水があったため調査は困難をきわめ、二次的な調査に委ねざるを得なかった。

第4地区 (寺ノ下地区)

グリッドNo.35・37・38において遺構を検出した。遺構はピット・土壌であり、いずれも黄褐色土をベースとしており、埋土は黒灰色土である。なお、グリッドNo.39より瓦器片が出土した。

確認調査を行った範囲内で遺構・遺物を検出したのは上述の4地区である。第1地区は鎌倉時代の建物と溝・土壌、第2地区は奈良時代の建物跡であろうと推定された。第3地区は縄文後期の遺物が出土し、第4地区は古代末～中世の土壌・ピットであろうと考えられた。

以上の4地区については全面調査を行う必要性が認められた。



第3図 確認調査グリッド配置図

3. 全面調査

—多利・前田遺跡—

A. 掘立柱建物址(SB)・溝(SD)とその遺物

11棟の掘立柱建物址(以後SB)とそれに伴う雨落ち溝を含む6本の溝(以後SD)を検出した。SB-3・10を除いて他は全て総柱の建物址となる。それぞれの建物址はその柱通りの方向の違いと、後に述べる建物配置の規則性さらにはSB-7と8・SB-4と5・SB-1と11のように重複したものがあるため、これらの建物址にも三時期の配置パターンを考えなくてはならない。

この建物群の時期は、その柱穴もしくは建物に伴う雨落ち溝から出土する土器によって、ほぼ12世紀の後半から13世紀の前半におさまるものである。ただ、若干古い時期の遺物の混入もあるが、その時期の遺構はごくわずかし確認されていない。

SB-1

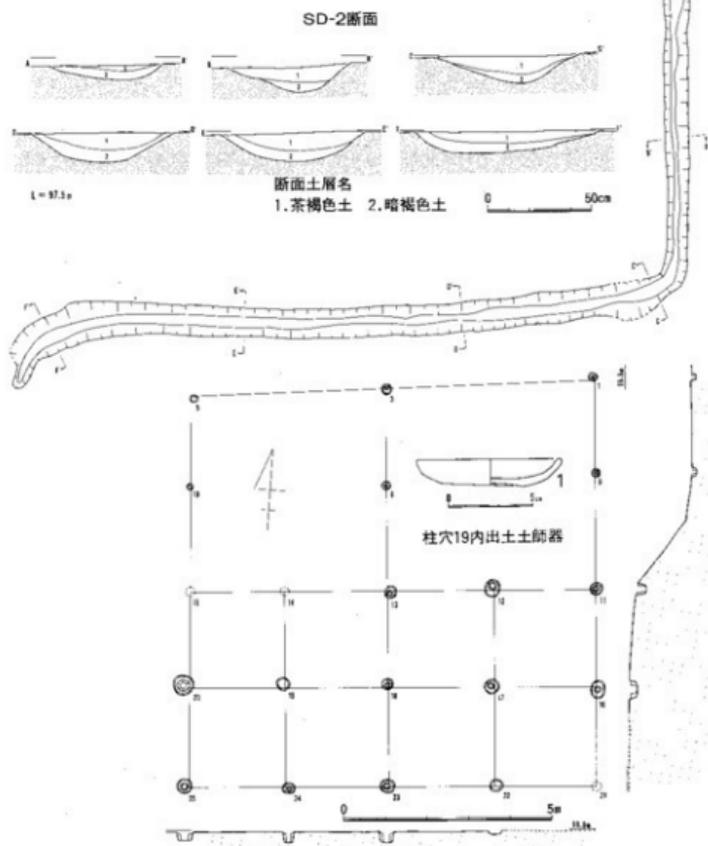
4×4間の方形の建物址である。ただ、南側2間分は総柱でありながら、北側は中央に間仕切る柱列はあるが、その内側の柱は北桁行までなく2×2間の側柱の空間が二つ並ぶこととなる。北の2間分は後世の削平があるとはいうものの地面が南側より1m以上も低くなっているため、北の2間分が高床の様に突き出ている建物を想像しなくてはならなくなる。柱間は約240cm(8尺)の等間となっている。柱穴の17・23には、柱当の下部に刺り石が敷かれている(第8図)。柱穴17の刺り石の在り方は不自然であるが、掘り方にまで及んでいるため柱穴20の様に柱を抜き取った後に入り込んだものではない。柱穴18のものは柱当が石まで及んでおらず、その用をなしていない。北桁行にあたる箇所にも雨落ち溝と思われるSD-2を伴っている。

—その遺物— (第4図)

土師器

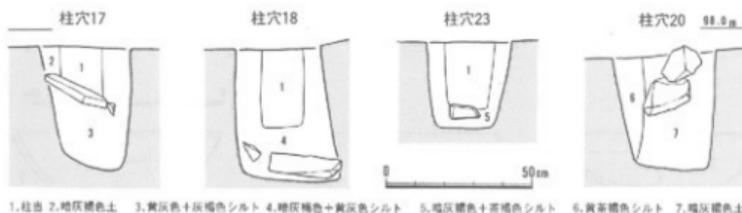
小皿(1)：底部は若干上がっており、緩やかに内湾した体部は大きく開き、口縁を丸くおさめる。図化出来なかったが、しっかりとした高さのある糸切り高台を持つ須恵器碗とわずかに高台を残す糸切り底部の土師器碗も出土している。ただ、12~13世紀にはいる白磁碗の底部

と口縁部外面に屈曲をまったく持たない瓦器碗口縁部の破片が出土しているため、この時期の遺構であると思われる。



第4図 掘立柱建物址(SB)-1と溝(SD)-2





第6図 SB-1 柱穴内礎石設置の状況

SD-2

SB-1の北底を受ける雨落ち溝である。西端は、SB-7を避けるかのように南に曲がりかけて消失している。東は直角に曲がり北流する。埋土は二層に分かれるが20cmあまりと浅く、遺物の出土もわずかである。SD-1と交差し、これに切られている。

一その遺物一

瓦器

小皿(2)：器高が深く、ヘラケズリと思われる底部から直線的に伸びた体部はヨコナデされ、口縁部は丸くおさまる。

椀(5~7)：口縁部外面にヨコナデによる二段の屈曲を持ち、口縁部を丸くおさまる。5は口径が小さく、口縁部外面の屈曲も一段となる。高台はいずれも断面三角形のしっかりとしたものがつく。破片ではあるが、口縁部を面取りしたものもみられる。

瓦質土器

椀(8)：底部は糸切りによると思われ、内面には粘土紐巻き上げの痕跡がみられる。内外面とも剝離が著しい。底部はほとんど高台がなくなるが、体部へ移る部分がわずかに膨らむ。

土師器

小皿(3)：口縁部外面にヨコナデによる段をもつ。底部から体部へと緩やかに開き、器高もかなり高い。

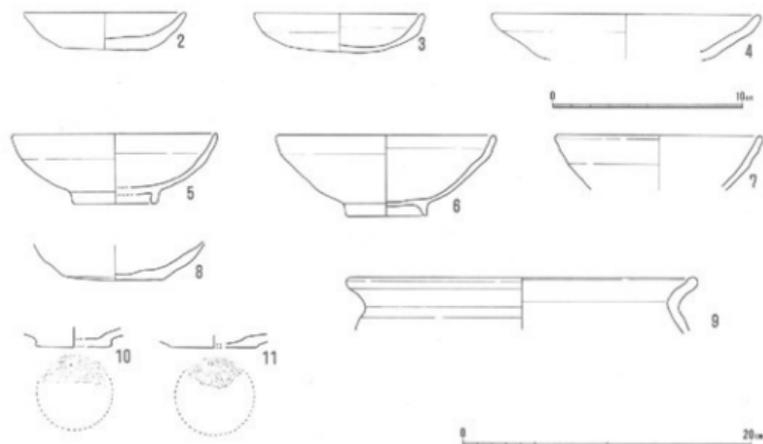
皿(4)：体部が直線状に大きく開く。口縁部はヨコナデし丸くおさまる。

甕(9)：肩部は口縁部径ほどにしか張らず、頸部はヨコナデによって段をもつ。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部が若干内側に肥厚する。

須恵器

椀(10・11)：まだ高台を残す糸切りの底部であるが、二型式みられる。

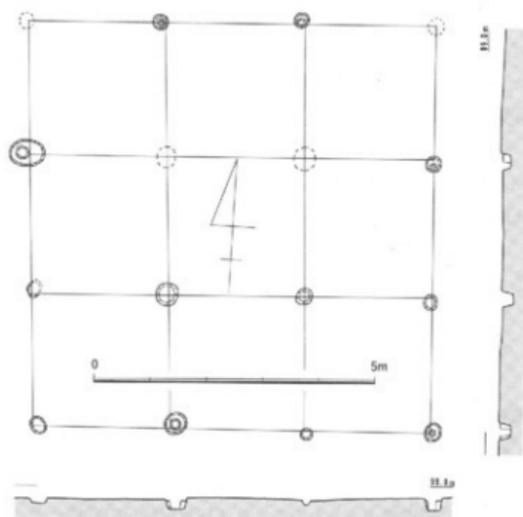
遺物には時期幅があるものの、ほぼ13世紀前半の遺構と考えられる。



第7図 SD-2出土の土器

SB-2

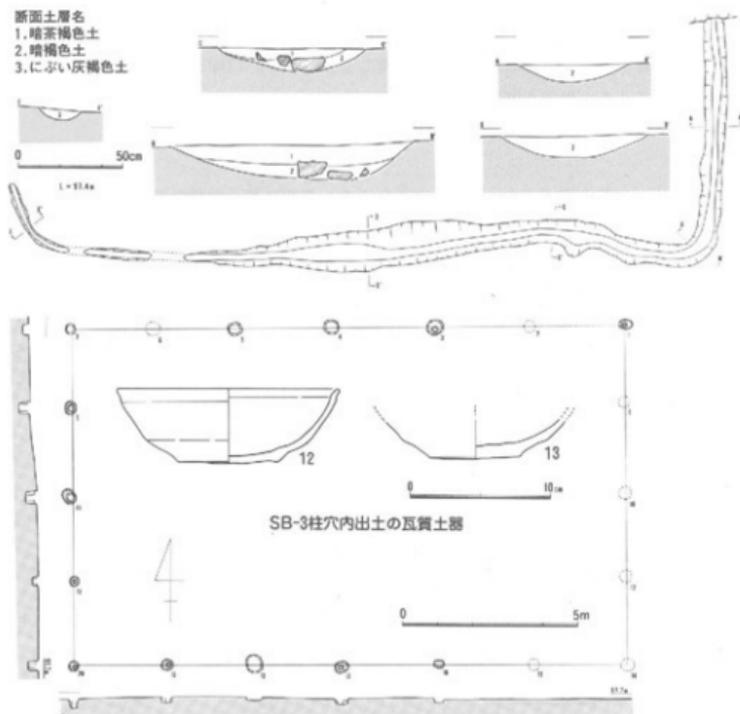
3×3間の総柱の建物址である。SK-1と重複しているが、SK-1を掘り上げたのちに柱穴が検出できる。北東・北西両隅と北第二桁行の中央の二柱穴を消失する。柱間は約240cm(8尺)の等間となっている。柱穴内から時期の分かる遺物がほとんど出土していないため、建物址のはっきりとした時期は不明である。



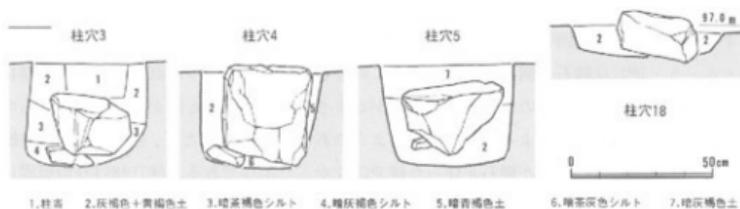
第8図 掘立柱建物址(SB)-2

SB-3

4×6間の側柱の東西棟であり、今回調査したなかでは、最大規模の建物址である。柱穴の3・4・5・18には礎石が据えられている。この礎石は柱穴18のように直接掘り方上に据付けられたものもあるが、他のものは裏込めの小石がかまされてしっかりと置かれている。礎石の大きさは一定せず、柱の高さによって桁を揃えたようである（第10図）。ただ、他の柱穴には柱根の残存したものがあり、全てが礎石を伴った柱ではなかったようである。柱穴18以外の堅固に据付けられた礎石は北桁行の中央にあり、この部分に扉などの特別な施設があったものと思われる。南東部分は、後世の削平のため柱穴も消失している。柱間は約240cm（8尺）の等間になっている。この建物の雨落ち溝と思われるSD-3を北側の方に伴っている。



第9図 掘立柱建物址(SB)-3と溝(SD)-3



第10図 SB-3 礎石設置の状況

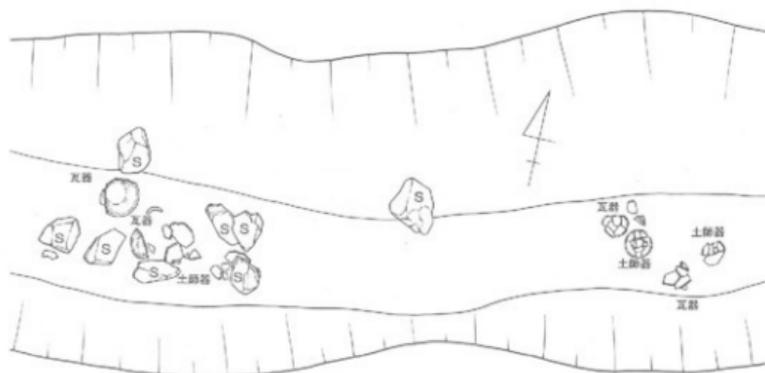
—その遺物— (第9図)

瓦質土器

椀(12・13)：いずれも剥離が著しいものの、底部に高まりがある。12は高台かと思われる高まりのある底部をもつ。体部はわずかに内弯しながら開き、口縁部はヨコナデにより小さく外反する。おそらく、黒色土器になるものと思われる。

SD-3

SB-3に伴う雨落ち溝である。SB-3の桁行よりも東西に若干のびたところで北に直角にまがっているため、建物の北の庇を受けて雨水を北に流していたのであろう。ただ、西半分は削平のためほとんど消失している。また東西方向の溝の中には、小皿・椀などの瓦器をはじめとして、かなり多くの遺物が包含されていた。



第11図 SD-3遺物出土の状況

(右頁へ続く)

—その遺物—

土師器

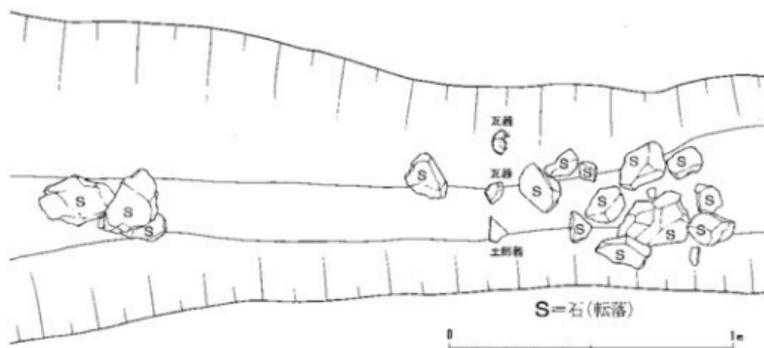
小皿 (14~19) : 14は底部から体部へと緩やかに続く。体部にヨコナデによる段をもち、さらに口縁端部をつまんでいる。15は体部の立ち上がりもしっかりし、器高が深い。体部にはヨコナデによる段をもち口縁端部が肥厚する。16・17は体部をヨコナデして、口縁端部を丸くおさめている。18はヨコナデの後口縁部を摘み上げ、外面に段をつくる。19は底部が少し上がり口縁は丸くおさまる。

皿 (20) : 体部はヨコナデし、口縁は一段強くナデで丸くおさめている。内外面とも剝離が著しいため調整は不明確である。

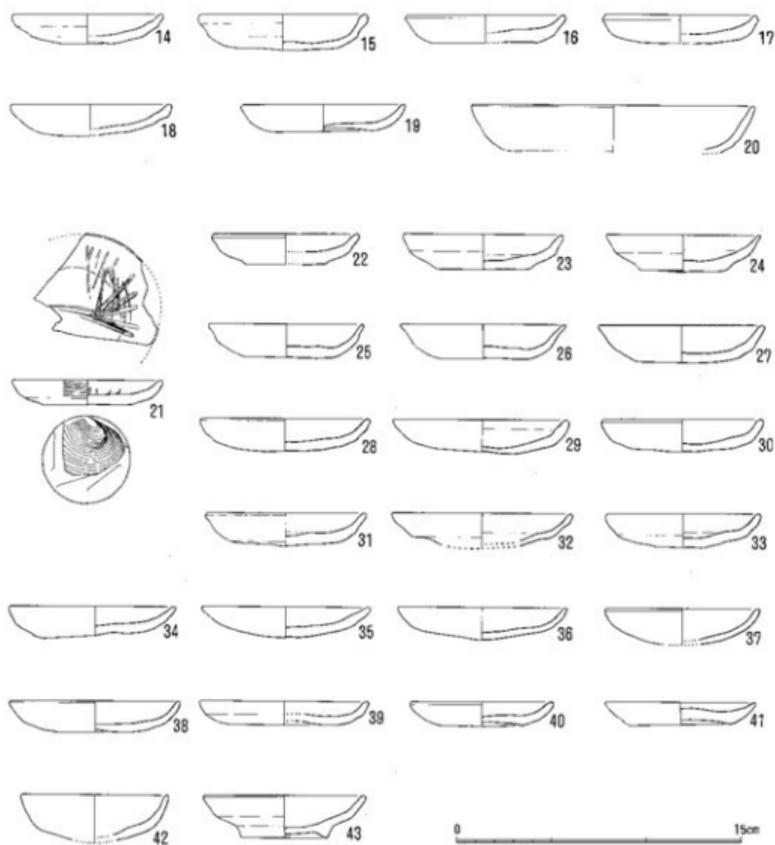
瓦器

小皿 (21~43) : 21~24はしっかりとした底部をもち、糸切りの後窠で削り取っている。21の内面には、かなり乱れた放射状の暗文が施されている。いずれも口縁部はヨコナデし、体部外面には段をもつ。25~42は底部をナデ、口縁部をヨコナデするが、そのナデ方によっておさまる具合に若干の差がある。25~28は体部のヨコナデによって底部との間に大きな段をつくる。29~37は底部をナデ、口縁部をヨコナデするが明瞭な段をもたない。38~41は底部の上がるものであるが、40・41は体部との区別を明瞭にしている。42は器高が著しく高い。43は29~33の型式に高台のついたものである。

椀 (44~49) : 44・45は比較的浅く、体部はわずかに内弯しながら開く。44には内外面に横方向のヘラミガキが施されている。46・47は器高が深くなり、口縁部が若干内側へ返る。48・49も深い器高をもつが、前者よりも体部が直線的に開く。口縁部はヨコナデによる段をもつ。



(左頁より続く)



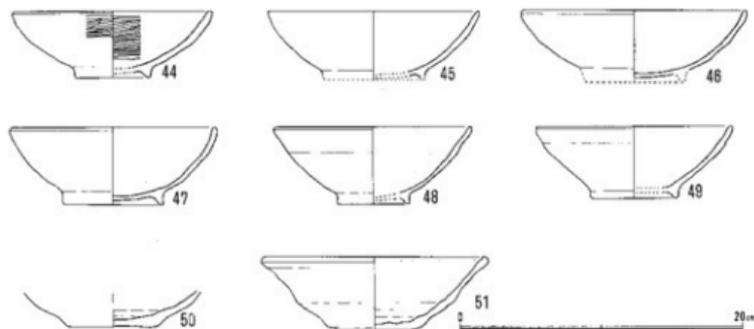
第12図 SD-3出土の小皿

瓦質土器

碗 (50) : わずかに区別がつく底部をもつ。内外面とも黒色であったと思われるが、剥離が著しいため明瞭でなくなっている。

須恵器

碗 (51) : 底部は糸切りで、高台はもたない。口縁部は肥厚し、端部を小さく摘み上げる。



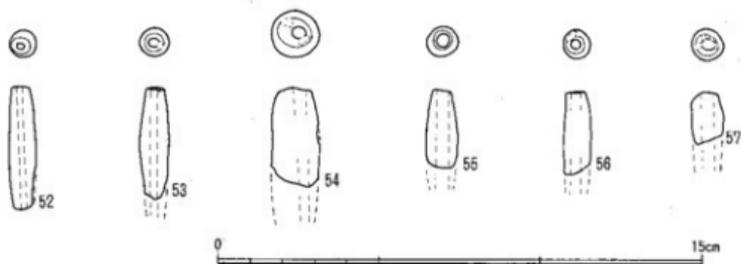
第13図 SD-3出土の土器

土鐘

土師質（52～54）：全て焼成があまく、調整も不明である。52・53は径0.8cm・長さ4cmあまりの中太の円錐形をしている。54は半分を欠損する太目の円錐形であり、穿孔が片寄っている。

瓦質（55～57）：残存状態は非常に悪い。いずれも半分を欠損するが、おそらく土師質の前者と同じような形態になるものと思われる。

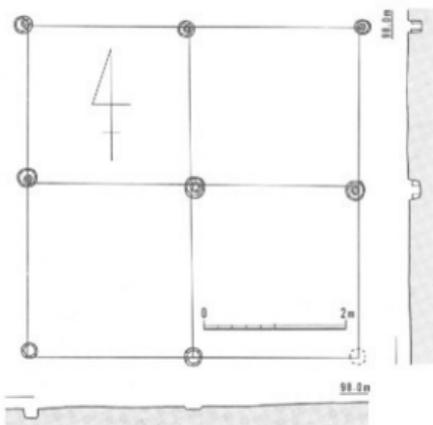
これらの遺物からみて、SD-3は12世紀末から13世紀にかけての遺構と思われるため、SD-3を雨落ち溝としているSB-3もこの時期の建物ということになる。



第14図 SD-3出土の土鐘

SB-4

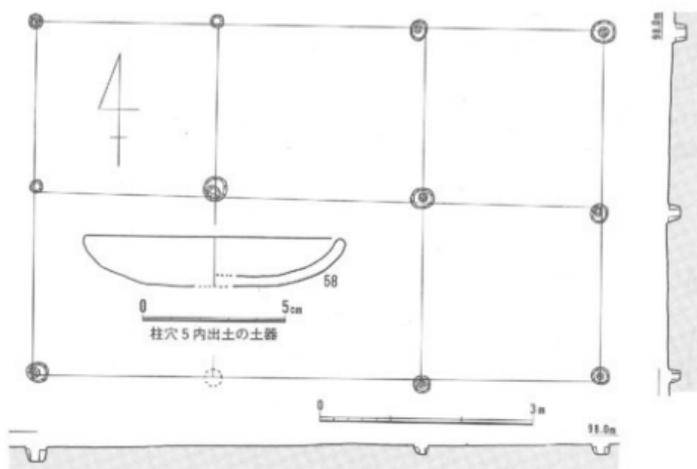
2×2間の総柱建物である。概ね240cm(8尺)に柱間を揃えている。柱穴は削平によって非常に浅くなっており、南東隅の柱穴を消失する。



第15図 掘立柱建物址(SB)-4

SB-5

2×3間の総柱東西棟である。柱間は桁行の両側の間が約260cm 前後(8.5尺)、中央の間が280cm前後(9尺)とやや広くなる。梁行は北側が約240cm(8尺)、南側が約260cm前後(8.5尺)となっている。



第16図 掘立柱建物址(SB)-5

—その遺物— (第16図)

瓦器

小皿 (58) : 図化できるものは58のみである。底部からわずかに内弯しながら大きく開いた体部の口縁部は丸くおさまる。器壁は底部から口縁部までほぼ均一である。

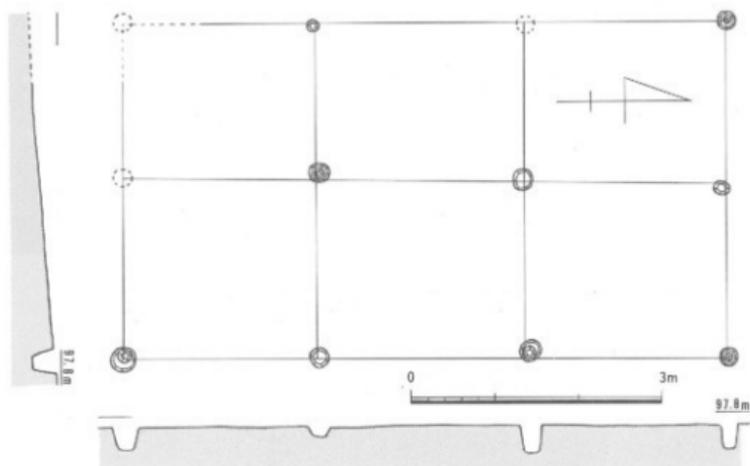
その他に、糸切りでしっかりとした高さを持った底部の破片が出土している。

SB-6

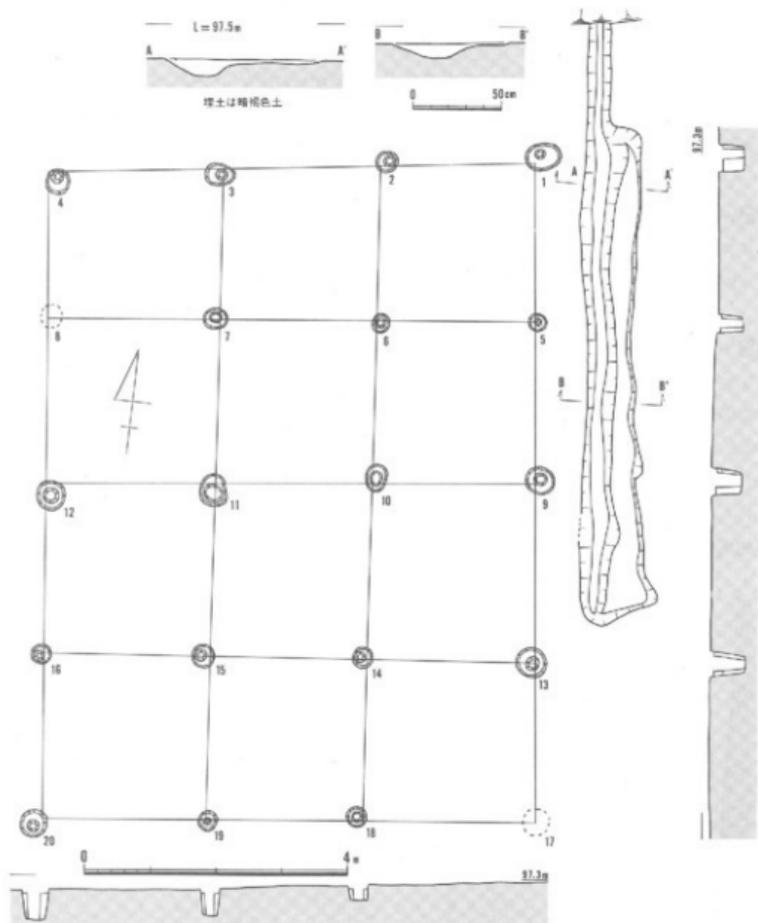
2×3間の総柱の南北棟である。南辺梁筋の中央・西隅と西桁筋の北第二柱を消失している。柱穴内より青磁碗の底部と高台のまったくなくなった段階の瓦質土器の破片が出土している。

SB-7

3×4間の総柱の南北棟建物である。西桁筋の北第二柱と南東隅の柱を消失している。柱間の間隔は等間にはなっておらず、柱筋の歪みがみられる。ただ、大まかには240cm (8尺) から270cm (9尺) 前後の幅のなかでおさまりそうである。柱穴5・6からは瓦器碗が出土しているが、その瓦器碗は柱を抜き取った後に入り込んだとみるより、柱の受けとして入れ込まれたようにも見える(第21図)。同じく、柱穴9で割石が置かれているのは、柱の洗みをおさえるための処置と思われる。また、柱穴10・15には柱根が残存している(第19図)。



第17図 掘立柱建物址(SB)-6



第18図 掘立柱建物址(SB)-7と溝(SD)-4

—その遺物—

土師器

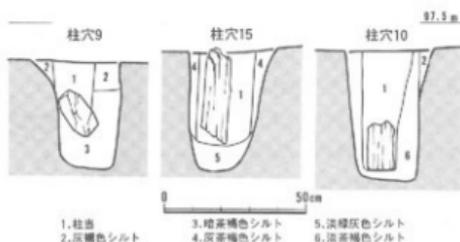
皿 (60) : 底部は大きく、体部は開き器高が非常に低い。体部から口縁部をヨコナデする。

瓦器

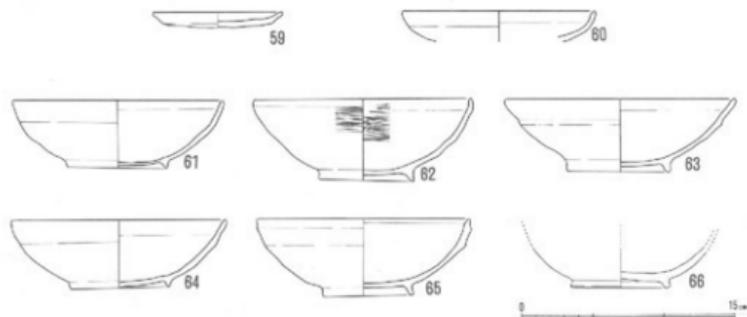
小皿 (59) : 体部は大きく内弯しながら開き、口縁はさらに立ち上がって端部は丸くおさまる。

椀 (61~66) : 65は口縁部をヨコナデし、さらに端部を積み上げているために口縁部の外面には二段の屈曲をもち、内面に段が巡る。高台は細く高い。62は口縁部外面のヨコナデによる屈曲は一段となり、口縁端部が短く立ち上がる。体部内外面には横方向の細かなヘラミガキが施されている。高台は断面三角形であるが、しっかりとしている。64は口縁部の屈曲がほんのわずかとなってしまい、61に至ってはまったくなくなってしまふ。ただ、口縁部はヨコナデし、高台は断面三角形の小さなものとなってしまふ。63は口縁部の屈曲をもち高台もしっかりとしているが、体部がほとんど内弯せず直線的に開いてしまふ。口径も他のものよりわずかに大きい。66のようなかなり深みのある体部になると思われるものも出土している。いずれも外面の剝離が著しく、磨き等調整の確認はできない状態にある。

これらは、13世紀前半代に納めることのできる遺物である。



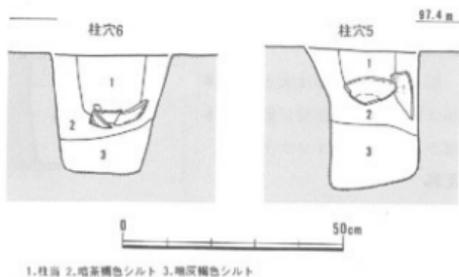
第19図 SB-7 柱穴断面図



第20図 SB-7柱穴内出土の土器

SD-4

SB-7・8の東桁行に伴う雨落ち溝と思われる。ただ、溝は一本しかなく、遺物もほとんど出土していないため、建物のどちらか一方かもしくは両者に伴ったものかの判断はつかない。溝の南側には、SD-2が入り込んできているため、建物の南第二梁筋あたりで終息し、SD-2にもつながらない。土器はまったく出土していない。

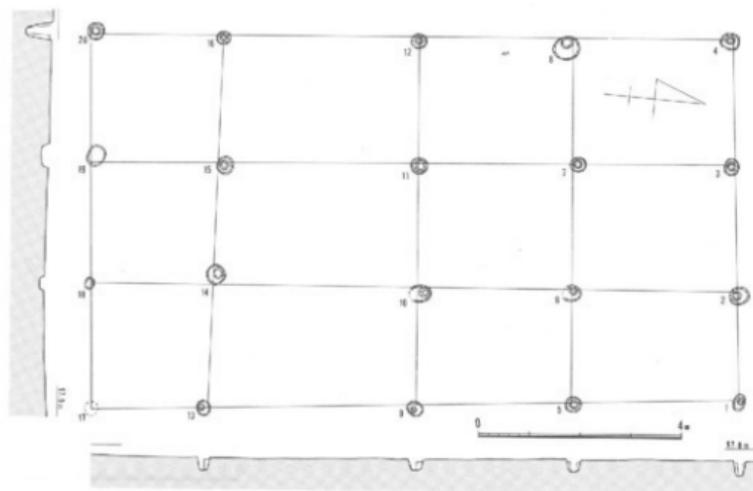


1.柱当り 2.増茶褐色シルト 3.増灰褐色シルト

第21図 SB-7 柱穴内瓦器出土の状況

SB-8

3×4間の南北棟の総柱の建物である。柱間はまったく等間になっておらず、柱並びの重みが大い。梁行きの柱間は近い数値にあるが、桁行のものは南第一間の約240cm（8尺）から南



第22図 掘立柱建物址(SB)-8

第二間の約400cm (13尺) までとかなりのばらつきがみられる。

ここでも、柱穴内から瓦器碗が出土しているが、SB-7のような柱の受けではなく抜き取った後への投棄のようである(第24図)。また、柱穴15では礎石が据えられているが、それは掘り方の墳底に長さ30cm、径10cm程の丸太を横たえ、それを覆う様に2枚の石を合掌に組んで、その上に礎石を置いている(第23図)。

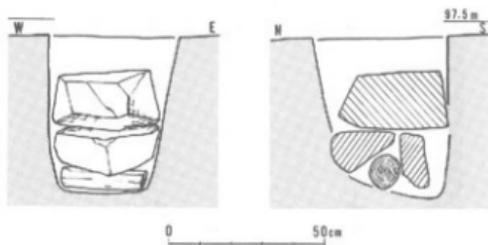
—その遺物—

瓦器

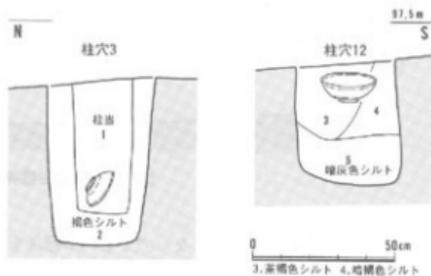
小皿(67)：体部は内弯せずに関き、外面にヨコナデによる段を持ち、口縁部は丸くおわる。

碗(68~72)：72は他のものより口径が若干大きく、口縁外面に二段の屈曲を持っている。口縁内面にも辛うじて段の跡をとどめている。

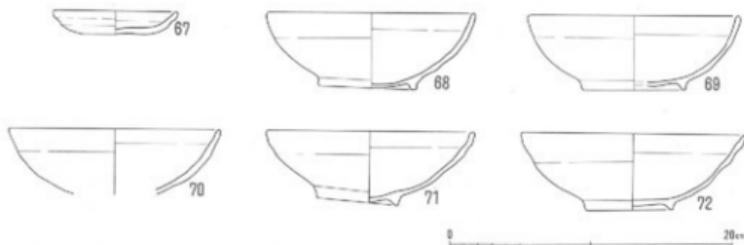
71は口縁部外面の屈曲を辛うじて残すが、内面の段はなくなってしまふ。68・69・70はほぼ同一の型式のものであ



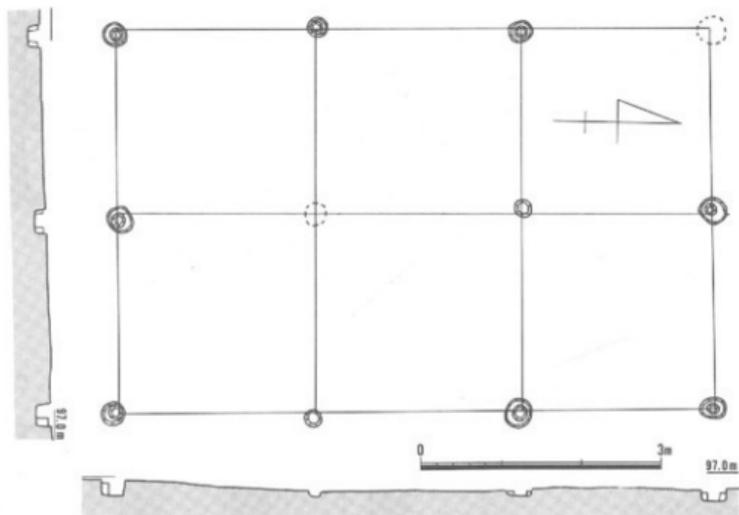
第23図 SB-8 柱穴15内礎石設置の状況



第24図 SB-8 柱穴内瓦器出土の状況



第25図 SB-8 柱穴内出土の瓦器



第26図 掘立柱建物址(SB)-9

り、内外面の屈曲・段はなくなってしまい口縁部を丸くおさめるだけとなる。

また、口縁部を面取りしたのももごくわずかであるがみうけられる。

これらの遺物は12世紀末のものもわずかにみられるが、多くは13世紀の前半それも初期に属するものとする。

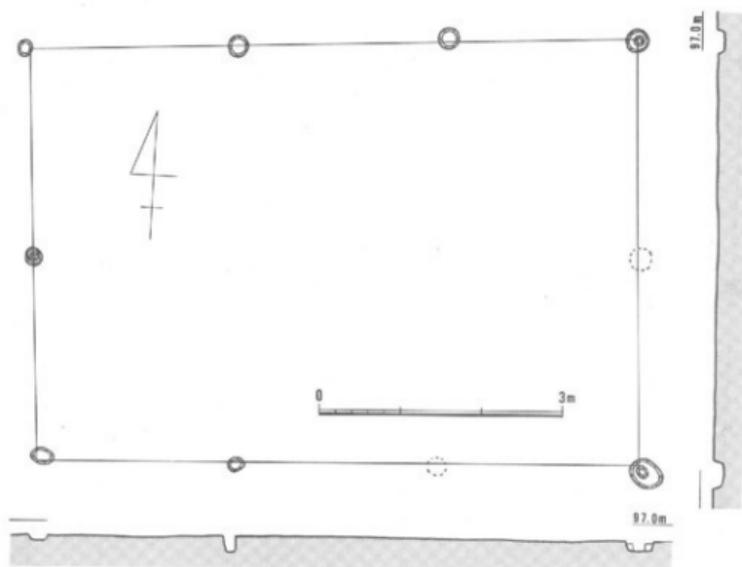
SB-9

2×3間の総柱南北棟である。北西隅と南第二梁筋の中央の柱穴を失う。柱間はほぼ240cm(8尺)前後の等間となっている。柱穴は後世の削平によって非常に浅くなっている。

柱穴内からの遺物の出土がまったくないため、明確な時期は不明である。

SB-10

2×3間の東西棟建物である。SB-3とともに側柱建物址になる。東梁筋の中央と南桁筋の東第二柱を消失しており、残った柱穴も相対的に浅い。桁行・梁間ともに柱間は約250cm(8尺)前後の等間となっている。柱穴内からの遺物の出土がまったくないため、その明確な時期をおさえることはできない。



第27図 掘立柱建物址(SB)-10

SB-11

3×4間の総柱でほぼ方形に近い東西棟の建物であるが、梁行の柱間は約300cm(10尺)とほぼ等間であるが、桁行は両側の柱間が約200cm(6.5尺)でありながら中央の二間は約240cm(8尺)となっている。西と東の柱間の狭くなっている二間は、庇などの施設になっていたことも考えられる。柱は非常に浅く、南桁行の東第一・二柱穴と南第二桁行の東第二柱穴を消失している。また、北東隅の柱穴は調査区の外に出てしまう。

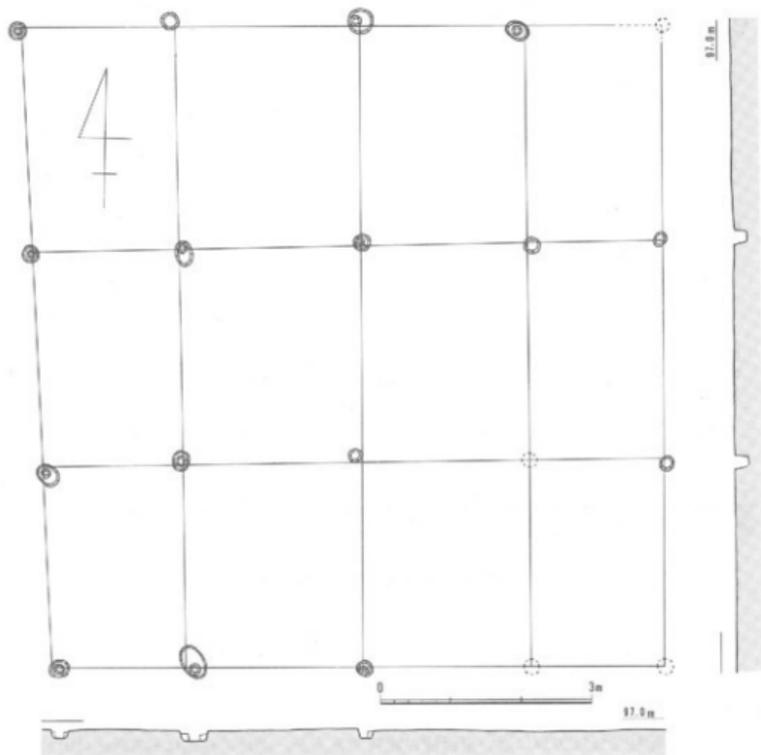
—その遺物—

土師器

小皿(77)：体部は若干内湾しながら開き、口縁部はヨコナデして丸くおさまる。

皿(78)：底部は若干上がっており、内湾気味に開いた体部と口縁部はヨコナデする。口縁端部はわずかに内側に肥厚して丸くおさまる。

いずれも、表面の剥離が著しく、調整は不明確である。



第28図 掘立柱建物址(SB)-11



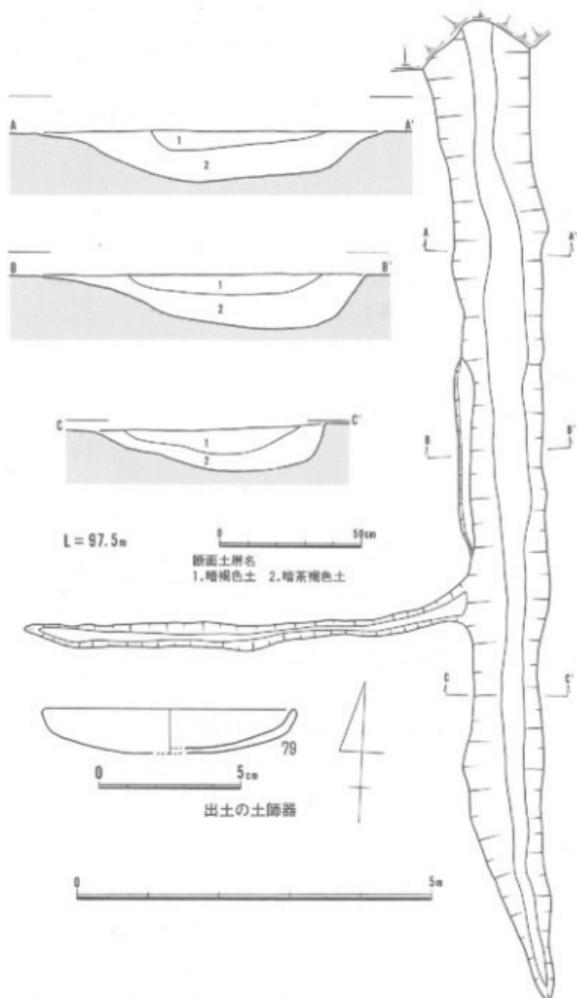
第29図 SB-11柱穴内出土の土師器

SD-1

SD-2を切っている。この溝と関連している建物がないため、雨落ち溝ではないようである。ただ、方向が建物とほぼ同じ方向をとって南北に直線的に伸びており、その東にはほとんど遺構が見られない。東調査区でも遺構がまったく検出されていないため、遺跡の東の境を限る溝ではなかったかと思われる。深さは20cm弱で緩やかな船底になる。中央やや南寄りより、西向きに細い溝が直角にのびる。一その遺物—

(第30図)

遺物があまり出土していないが、図化できたのは79のみである。79は土師器の小皿であるが、表面の剝離が著しく調整は不明である。底部から体部へと大きく緩やかに開きながら移り、口縁が短く立ち上がって丸くおさまる。



第30図 溝(SD-1)

図化できなかったものには、しっかりとした高台をもつ糸切り底部の須惠器碗、高台のなくなった瓦質土器の底部がある。瓦器碗には口縁部の外面に二段の屈曲を持つものと、端部を面取りするものがある。

出土する遺物にはかなりの時期幅があるが、この遺構の時期は13世紀前半代と考えられる瓦器碗に代表される。

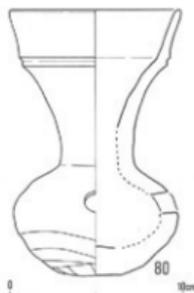
SD-5

いままでの溝とは方位がまったく異なり西にふれ、曲行しながら北へ走る。6世紀後半の遺構であり、建物群とはまったく関係しない。この時期の遺構は、他にはみられない。

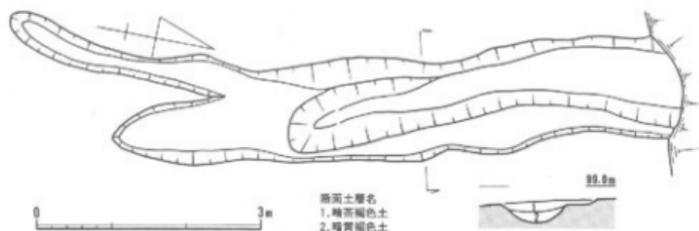
—その遺物—

須惠器

甕(80)：体部は口縁径より若干小さい。頸部は長く、口縁はあまり開かない。



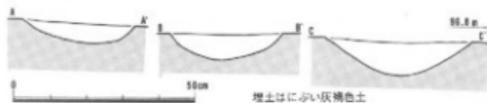
第31図 SD-5出土の土器



第32図 溝(SD)-5

SD-6

土壌墓(SX-1)と建物群を隔てるように走っている。SX-1の南側で大きく南にふくらんでいるため、SX-1に関連した溝のようである。ただ、方向は建物群と大きく異なっており、ど



第33図 SD-6 断面図



第34図 SX-1とSD-6関係図

ちらかといえば、自然地形に則した方向といえる。

SX-1に副葬されている遺物との関係からこの溝は13世紀前半の遺構と思われる。建物群が12世紀後半から13世紀前半までであるため、後の建物群と並存していたことになる。

—その遺物—

ほとんど遺物は出土していないが、1点のみ図示できた。

瓦器

小皿(82)：底部はナデ、体部との境に段を持つ。口縁部はヨコナデする。剝離が著しい。

図化できなかったものには、ほとんど高台を持たない瓦質土器、端部を面取りした瓦器椀などがある。



第35図 SD-6出土の瓦器

B. 土壙 (SK) とその遺物

SK-1

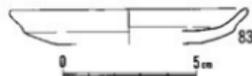
SB-2に取り込まれるようにある。平面形は不定形をし、ごく浅く、窪状になっている。出土土器はごく少量で、細片のみである。

—その遺物—

瓦器

小皿(83)：底部を欠損する。口縁部にはヨコナデによる段をもち、端部が若干肥厚する。

出土している土器が少ないため、時期は限定できないがこの遺構を掘り上げた後にSB-2の柱穴が検出できたため、SB-2よりも下るものである。

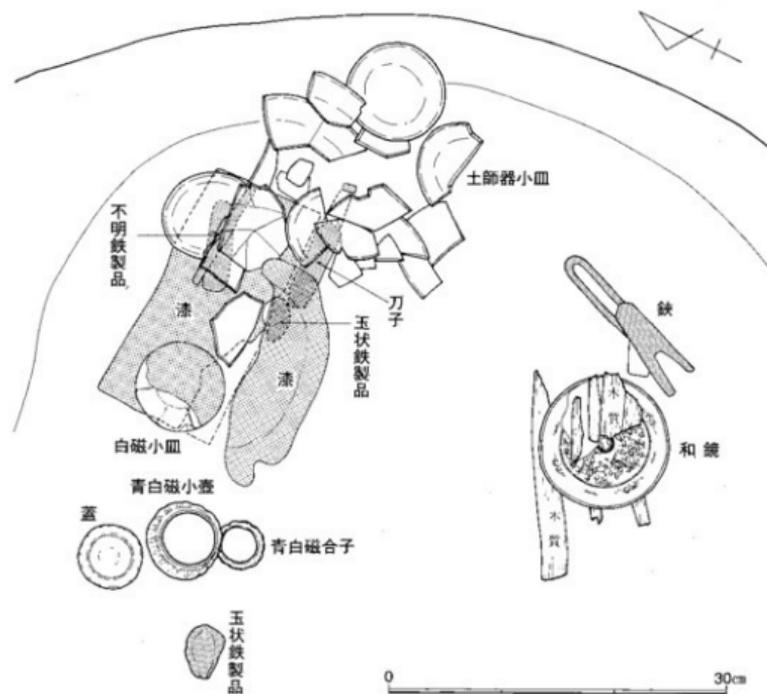


第36図 SK-1出土の瓦器

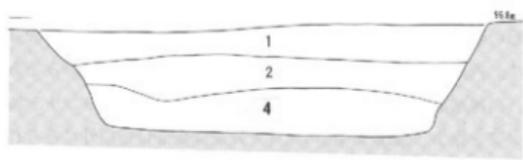
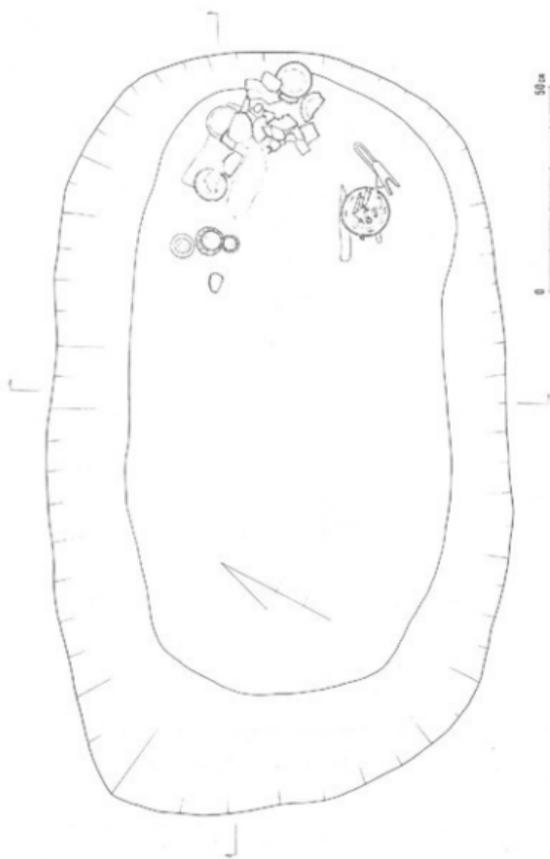
C. 土墳墓 (SX) とその遺物

SX-1

長径 180 cm・短径 110 cm・深さ 25 cm を計り、平面形は小判形を呈する。墳壁は斜めに立ち上がり、墳底はほぼ平坦になる。一応墓址と考えているが、土層断面には木棺などの痕跡はみられないため、墓址であるとするば土塚墓と考えられる。遺物は北東小口部の墳底直上に半円を描いて配されているため、中央の空白部に頭部があったものとする。



第37図 SX-1遺物出土の状況



第38圖 SX-1

頭部推定箇所北側には青白磁の小壺が蓋を開けた状態であり、すぐ横に同じく青白磁の合子を伴う。この合子は身部のみであり、蓋部は出土していない。その西には一塊となった鉄製品があり、東には白磁の小皿と白磁皿の破片がある。周囲には黒漆の膜があるため、これらの遺物は漆塗りの箱の中に納められていたものと思われる。この漆膜の下からも、一塊となった金属製品が出土している。頭頂部にあたる部分には、城壁に接して土師器の皿が折り重なってあった。本来は積み重ねられていたと推定できるような状況で出土している。

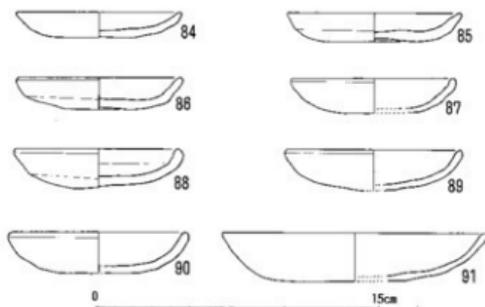
南側では和鏡と和鉢が出土している。和鏡は鏡面が下を向き、ほぼ城底直上に置かれていた。また、鏡面などに残っている痕跡から、布に包まれた後木箱に入れられていたことがわかる。和鉢は和鏡のすぐ西の城底に直接置かれており、その下に白磁皿の破片がはいり込んでいた。この部分以外にはまったく遺物はみられない。墓址としての確証はないものの墓址以外の推定はさらに困難なため、一応土城墓として取り扱っておきたい。

一その遺物一

(第39・40・41・42図)

土師器

小皿(84~90)：84~86は器高の低いものである。84は底部から緩やかに体部が開き、口縁部のヨコナデによって外面に段が付く。85は底部がごくわずかに上がり、口縁端部をさらに強くヨコナデする。86は口縁を丸くおさめる。87~90は器高が深く、口縁は緩やかに開く。88は口縁端部が若干肥厚する。全て表面の剝離が著しい。

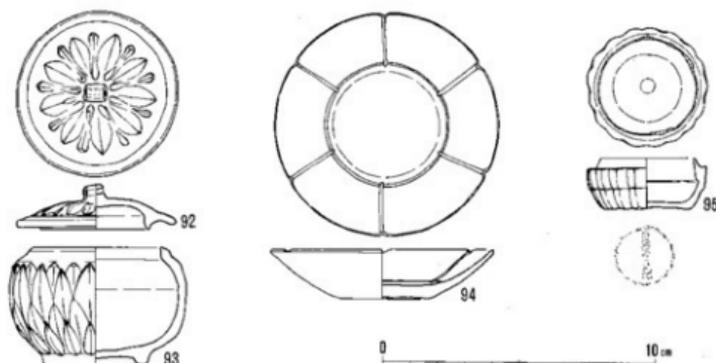


第39図 SX-1 出土の土師器

皿(91)：明瞭な底部から深く開いた体部はヨコナデされ、口縁部がわずかに肥厚して丸くおさまる。

青白磁

蓋付き小壺(92・93)：笠形の蓋(92)は天頂部に中央穿孔の円柱形の摘みを持ち、天井部の内区には淺きの蓮弁文を施す。内面には返りが付き、ヨコナデする。施軸は外面のみである。壺(93)は胴部が大きく張り、口縁端部が小さく立ち上がる。底部に高台を付けヨコナデ調整した後、外面に四段の淺き蓮弁文を施す。施軸は内面の全体と外面は底部付近以外にみられる。口縁端部は内外面とも釉が削り取られている。



第40図 SX-1出土の輸入磁器

合子 (95) : わずかに開きながら立ち上がった体部は、内側に立ち上がりを貼り付け、上端を削って受部をつくる。体部外面には二段に十七弁の花弁を配する。受部と立ち上がりの外面は軸を削り取る。底部にはケズリの後「呉家合子記」を刻印する。蓋部は出土していない。

白磁

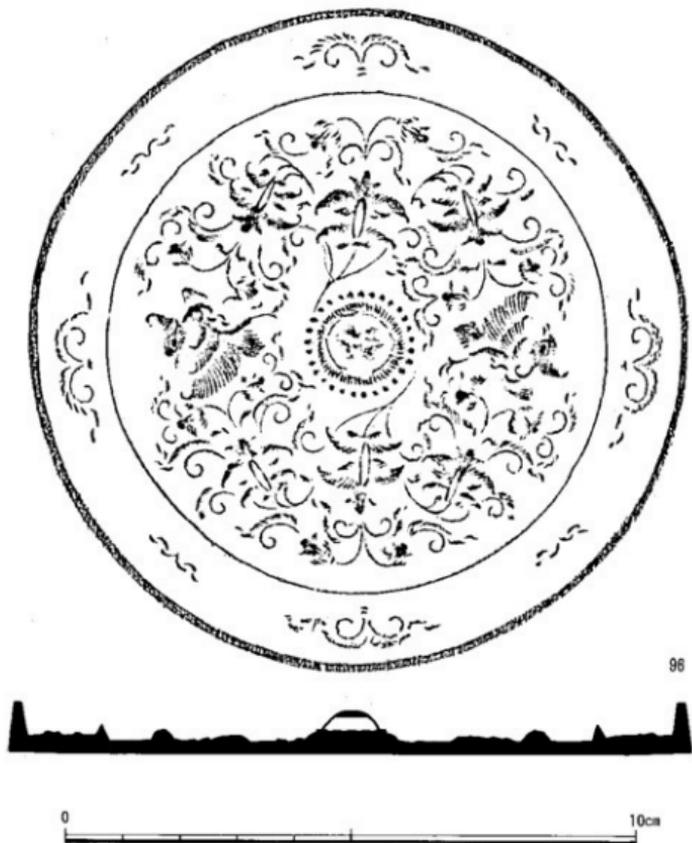
皿 (94) : 底部は非常に短径であり、口縁端部には六箇所に窪が刻まれ、大きく緩やかに開いた体部の内面には六葉の稜花文が描かれている。底部のみ軸が削り取られている。

金属製品

和鏡 (96) : 鏡背に鴛鴦を二羽配した、瓊花鴛鴦鏡である。縁はごく狭い面を持つ平縁であり、外面は内傾しつつも著しく高く、鈕帯とほぼ同じ高さになっている。鈕座は菊座穹窿鈕であり、界圈は急斜「へ」字圏である。内区には両側に鴛鴦をそれぞれ見返るように用い、その間に蔓様の草花を展開させて配する構図となっている。外区には双頭状の蔓様文と捻じりを加えた小型の蔓様文を四個ずつ交互に配してある。鏡面はほぼ水平であり、鏡身断面も十分な厚さを持っている。錆上がりは著しく良く、錆掛けなどの補修の痕跡はほとんどみられない。表面は深い緑色を呈し、光沢を持っている。径11.8cm・外縁は非常に高く1.0cmをはかる。重量は360gである。

和剣 (97) : 握り部分の断面は長方形をしており、頭部は「U」字形に折り返されている。刃部は刃が外弯しており、両刃になっている。鋒部分もこれに沿って若干の外反がみられる。出土時には刃部が握り部に重なるほどに折り曲げられていた。現長13.4cm・刃部の幅約2.5cm。

毛抜き (98) : 幅7mmほどの薄い鉄板を折り曲げており、頭部は円頭になっている。先端は



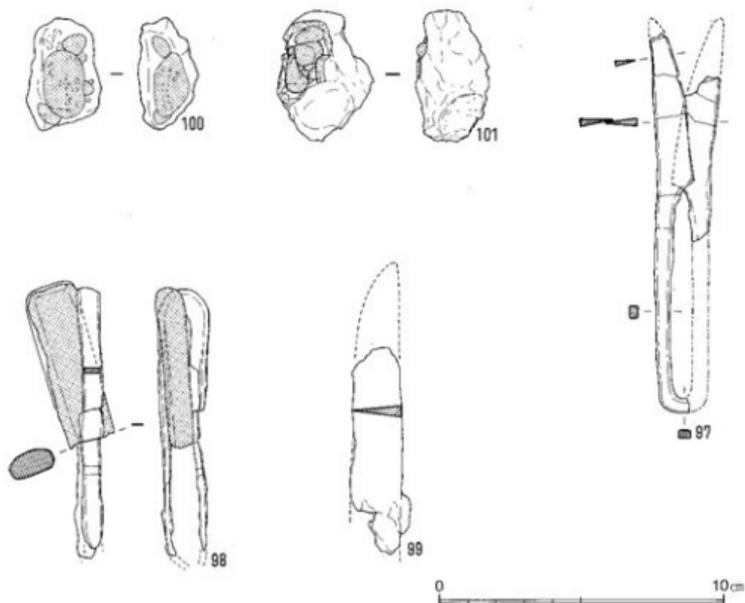
98

第41図 和鏡拓影

両方とも欠損している。握り手部分の内側には、木質様のものがはさまれていた。現長約9.5cmを残す。

刀子(99)：刃部は切っ先を欠損する。峰部分は幅広く作られており、柄口の一部を残す。現長約7.3cm・幅1.6cmをはかる。

不明金属製品(100・101)：二点あるが、いずれも一つの塊となっている。X線写真や断面

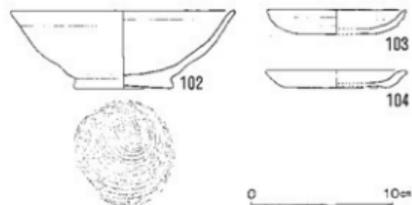


第42図 SX-1出土の鉄製品

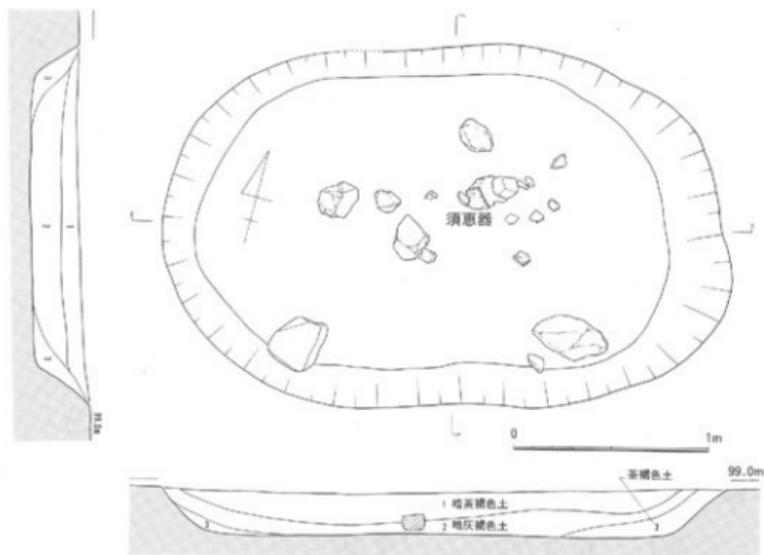
などの観察によると、小さな金属の塊がいくつか中にはいっており、それを薄い金属の膜が取り巻くような状態にある。いずれもその性格は不明である。100は長径約2.6cm短径1.0cmであり、101は長径4.7cm・短径3.5cmである。

SX-2

平面形は小判形をしており、短径1.9m、長径2.9mを計る。深さは25cmあり、壁は緩やかに立ち上がる。壺底には、人頭大から拳大の石が数個と若干の遺物がみられる。墓址かと思われるが木棺の痕跡はなく、土塚墓の可能性が考えられる。



第43図 SX-2出土の土器



第44図 SX-2

SX-1は13世紀前半の、SX-2はそれ以前の時期の遺構と考えている。

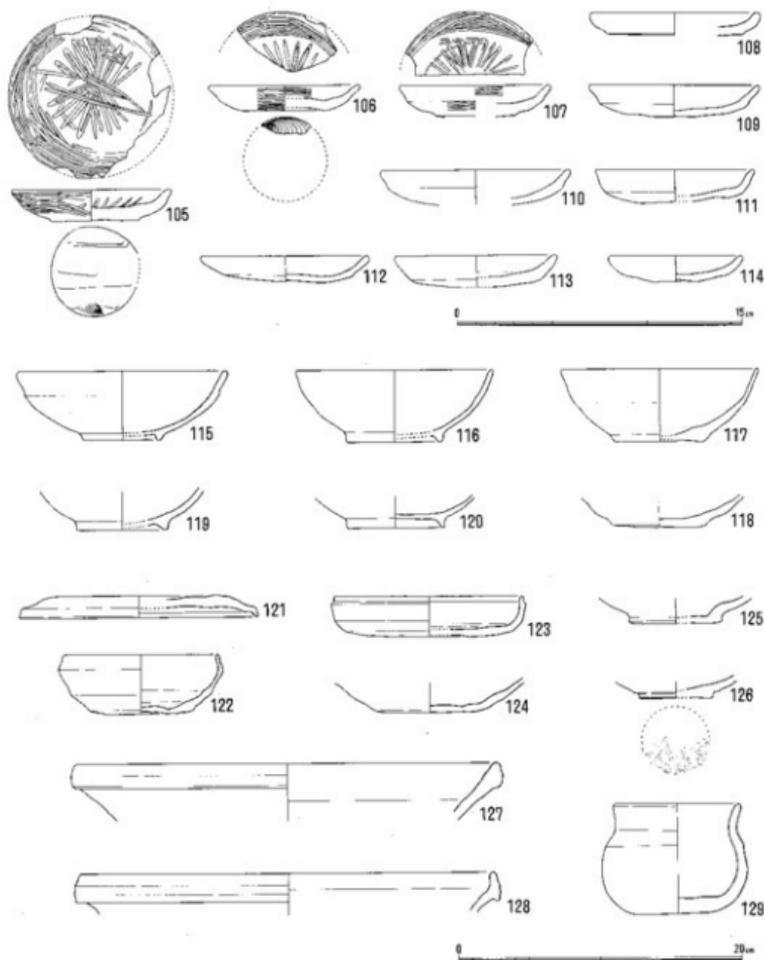
—その遺物—

土師器

小皿 (103・104) : 103は口縁部をヨコナデして外面に二段の段を持ち、口縁端部を細くしておさめる。104は底部が若干上がり、口縁部をわずかに外反させている。いずれも剝離が著しい。

黒色土器

碗 (102) : 底部には高い台形があり、体部は段を持った後ごくわずかに内弯しながら開く。口縁部は少し外反して丸くおさまる。底部には、糸切りの痕跡が残る。



第45図 包含層出土の土器

D. 包含層出土の遺物

奈良時代・平安時代

須恵器

杯 (121・122) : かなり扁平になった杯蓋 (121) と器高がかなり高く、口縁部が「く」の字に内側に屈曲した杯身 (122) がある。

黒色土器

椀 (117・118) : いずれの底部も、わずかに区別のつく高台を持っている。内弯しながら開く117の体部は、上半で外反ぎみとなる。調整は剥離が著しく明確でない。

鎌倉時代以降

須恵器

椀 (125・126) : 高い高台の糸切り底部のもの (125)、ほとんど高台の無くなった糸切り底部のもの (126) がある。

挾鉢 (127・128) : 口縁部にほぼ垂直な面をもつもの (127)、口縁端部が内傾しながら短く立ち上がり、さらに下方がくり下がるもの (128) がある。

時期は不明であるが、杯身で口縁端部が小さく内側に屈曲するもの (123) もある。

瓦器

小皿 (105~113) : 105~107は、底部を糸切りの後、篋で削り取っている。体部は内弯しながら開き、口縁部はゆるく小さく外側に開く。体部内外面には横方向の細かなヘラミガキがあり、身込みには放射状の暗文を施す。108は底部を篋切りし内弯ぎみに開く体部と明確に分かれ、口縁部は丸くおさまる。109・110は体部のヨコナデによって、底部との境に段をもつ。111・112は同様の段の痕跡をわずかに残すが、113にいたっては外面の段はなくなり、口縁部を丸くおさめている。105・106は炭素の吸着がほとんどなく、焼成の具合も須恵器に非常に近い。

椀 (115・116) : 115は体部外面に段を持つが、器高は相対的に低い。116の器高は115よりも高いが、段はまったく持たず口縁部を丸くおさめる。いずれも断面三角形の、まだしっかりとした高台を付ける。

土師器

小皿 (114) : 底部から緩やかに開いた体部は、底部との境にごくわずかな屈曲を持つ。口縁端部を丸くおさめる。

ピット内出土の土器

建物址にはならないピットからも、わずかに土器が出土している。

土師器

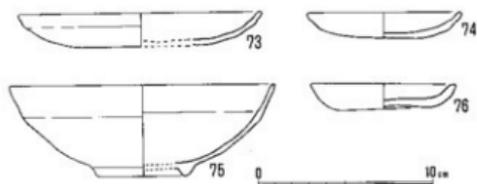
皿 (73) : 器壁は非常に薄く、
体部外面にはヨコナデによる段を
持つ。口縁端部は丸くおさまる。

瓦器

小皿 (74・76) : 体部が内湾ぎ
みに立ち上がり丸くおさまるもの
(74)と立つもの (76)がある。

椀 (75) : 体部をヨコナデし、

外面に一段の屈曲を持つ。口縁端部は丸くおさまり、しっかりとした高台を持つ。



第46図 ピット内出土の土器

E. 東調査区出土の遺物

鎌倉時代の土器

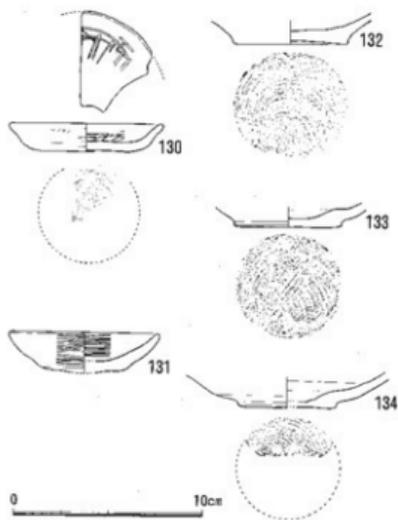
瓦器

小皿 (130・131) : 130は底部を鉋切りし、
口縁端部は小さく外反して丸くおさまる。
体部内外面には横方向の粗いヘラミガキが
施され、身込みには放射状暗文がみられる。
131は底部との境にわずかな屈曲を持ち、体
部はあまり内湾せずに開いて、口縁部は丸
くおさまる。体部の内外面には、横方向の
細かなヘラミガキが施されている。

平安時代の土器

須恵器

椀 (132~134) : 底部は糸切りの高台を
持っている。133・134は体部が大きく横に
張り出すが、132は緩やかに開いている。



第47図 東調査区包含層出土の土器

F. 小 結

多利・前田遺跡については最終章で詳しく述べるため、ここでは簡単にまとめてみる。

ここで検出された11棟の掘立柱建物址は、その配置関係から12世紀後半から13世紀前半までの間に三つの建物配置＝時期を想定することができる。その各時期とも建物はある基準によって配置されている。整然と建てられていた建物群は、SX-1が築かれて後の13世紀の後半頃に廃絶されてしまってその後には続かない。その配置に計画性のある建物群の突然ともいえる出現や廃絶の影には、ある種の政治的な「力」の存在があったように思える。さらには、周辺地域と比較してもその内容において類稀な副葬品を持ったSX-1の存在からも、それを類推することができると思われる。具体的にその政治的な「力」を、ここでは一応鎌倉幕府開府に伴う新興勢力の台頭という現象に求めたいと考えている。

表 1 各掘立柱建物址一覧表

掘立柱建物址(SB)	規模(間)	方位	桁m : (尺)	梁行m : (尺)	備 考
12世紀後半					
SB-8	4×3	南北	12.32(41)	7.04(23)	柱穴15内に礎石有り
SB-4	2×3		4.56(15)	4.50(15)	
SB-9	3×2		7.38(25)	4.61(15)	
SB-10	3×2	東西	7.36(25)	5.12(17)	側柱
12世紀末から13世紀初頭					
SB-1	4×4	東西	9.42(31)	9.51(32)	SD-2を北に持つため
SB-2	3×3	南北	7.60(25)	7.25(24)	南北方向が若干長い
SB-3	6×4	東西	14.58(49)	9.60(32)	北桁行に礎石有り
SB-7	4×3	南北	9.42(31)	7.20(24)	SD-4を伴うか
SB-5	3×2	東西	7.76(26)	4.80(16)	
SB-11	4×3		9.18(30)	8.32(28)	梁行の方が長い
13世紀前半					
SB-1		前期に同じ			SD-2が消失する
SB-3		前期に同じ			SD-3を北側に持つ
SB-6	3×2	南北	7.20(24)	4.03(13)	

— 多利・岡中遺跡 —

A. 遺構(柱穴・ピット)

主な遺構は、柱穴とピットのみである。これらが関連して、掘立柱建物址等の地上構造物が存在したことを思わせるものはまったくみられない。ただ、直線に並ぶものをわずかに拾い出すことはできる。検出した柱穴が非常に浅いことから考えて、本来あった掘立柱建物址等は他の浅い遺構と共に、後世の削平などによって削り取られたものと思われる。このため、現時点ではこれらの柱穴・ピット群が、元来どのような遺構であったのか推測することさえできない。

B. 包含層出土の遺物

遺構に伴う遺物は非常に少なく、ほとんどが包含層から出土した遺物ばかりである。多くは細かな破片であるが、6世紀後半から12・13世紀にまたがる長い期間の遺物が出土している。

古墳時代後半の須恵器

杯身(135)：立ち上がりは短く体部は大きく内湾してひろがり、受け部は短い。

奈良時代の須恵器

杯蓋(136・137)：短径で宝珠つまみが乗り、内側に返りの付くもの(136)と、広い笠形をし扁平な擴みを持つもの(137)とがある。

杯身(138～146)：142～146は高台を持つが、138～141は高台がない。138は体部が大きく内湾し、口縁端部は短く外反する。139～141は底部と体部の区別が明確であるが、138ほど外反が大きくない。高台の付くもの内142は高台がしっかりとふんばり、底部が大きく張る。143・144はまだ高台はしっかりとしているが、底部の張りがほとんどない。145・146はさらに高台が小型化してしまう。

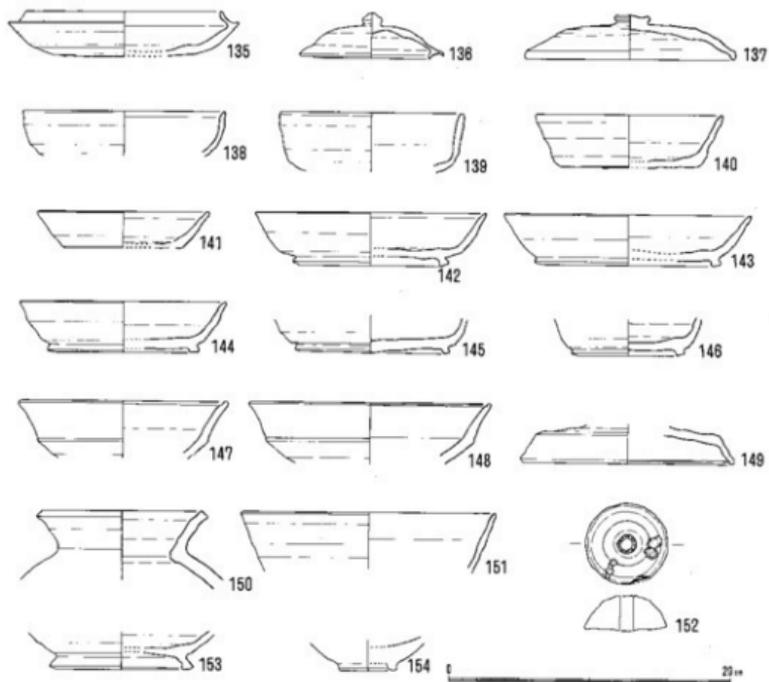
平安時代の須恵器

稜碗(147・148)：いずれも器壁は厚いが、稜部は明確に作り出されている。口縁端部内面には一条の沈線が巡る。

蓋(149)：体部が明確に屈曲し、口縁端部内面に一条の沈線はいる。

壺(150)：頸部は「く」字形に屈曲し、口縁端部は上面が内傾しておさまる。

他に紡錘車(152)があるが、時期がはっきりしない。



第49図 包含層出土の須恵器

まったくみられない。このため、何本かの柱穴の並びはあるものの、これらの遺構がどのような性格の遺構になるのかはまったく不明である。遺構に伴う遺物もほとんどないため、遺構の時期もはっきりと確定することはできなかった。また、土器は包含層に含まれるものがほとんどであり、多くは細片となっている。中世の土器も少量含まれているが、多数は奈良時代～平安時代のもので占められている。このため、時期を確定することのできなかった遺構の多くは、奈良時代～平安時代に属するものではないかと推測できる。

このように考えると、多利・岡中遺跡は、多利・前田遺跡よりも時期的に若干さかのぼる遺跡ということになる。小さな谷をはさむものの距離的にも非常に近い位置にあるが、両者の間に直接的な関連を示すような要因を見いだすことはできない。

— 多利・小向遺跡 —

A. 調査の概要

水田一筆分、約220㎡を調査した。遺跡は、多利・岡中遺跡から続く扇状地の微高地が北側の谷に向かって下がっていく、北東斜面に位置する状態となる。調査区の東側は、水田を造成する際に上方より送り出された整地土によって、高さ2m以上に及ぶ急斜面となっている。さらに、北と西側は確認調査の結果、旧の谷部へと急激に落ち込んでいっていることがわかり、遺跡が南から続く狭いテラス状の平坦面に営まれていることが明らかとなった。

褐色の包含層がかなり厚く堆積しており、その中には9世紀～13・4世紀にまたがる遺物がかなり含まれていたが、確認調査の際に検出した縄文土器は破片さえも発見できなかった。この包含層の中には、外面に叩き目を持った土師器の鍋の破片と、そのすぐそばに鉄斧頭があったことから元来葦骨器をともなった墓址が近くにあったのであろう。ただ、この土器の出土状況から見て、後世の地業によって破壊された状態にある。

B. 遺構

ここでも、多利・岡中遺跡と同様全てが柱穴・ピットばかりで、他に際立った遺構は検出できなかった。検出し得た柱穴も、掘立柱建物址などになるものは現状では見あたらない。ただ中央部を南北に走る、一条の柱の並びを見いだすことはできようかと思われる。この様な状態であるため、これらの遺構についてはその性格を知ることはまったくできないままである。

C. 遺物

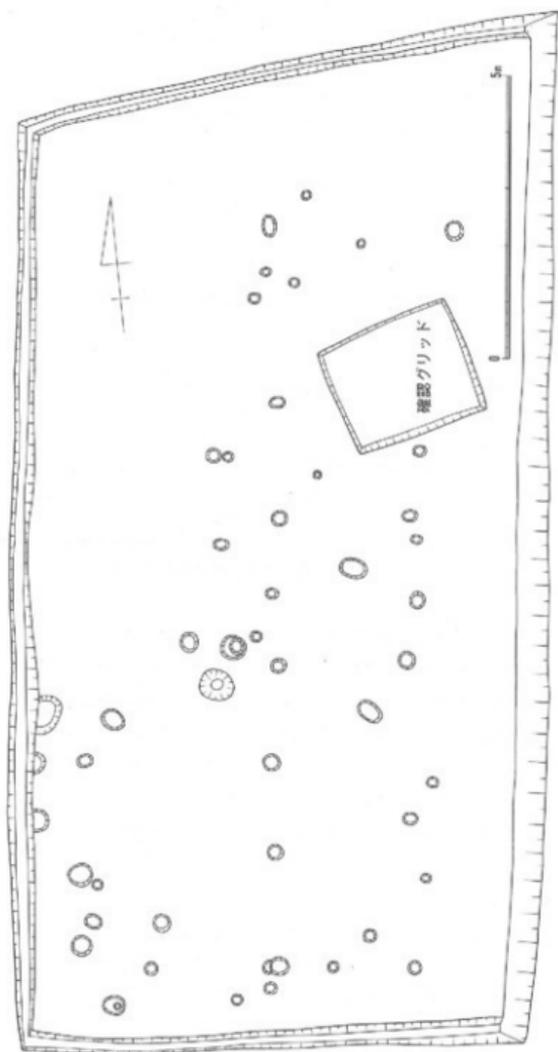
遺構に伴う遺物はほとんどなく、多くが包含層出土のものである。

瓦器

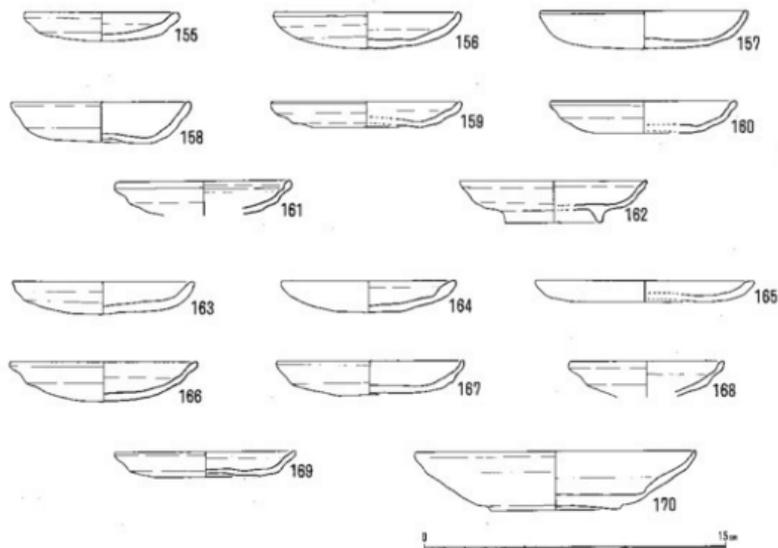
小皿(155～162)：155は体部が浅く開き、11縁部をヨコナデして内外面に屈曲をもつ。156も器高が浅く、体部はヨコナデし、口縁端部を短く立てる。158は底部がわずかに浮き、体部に



腐土層
 1. 腐土 2. 灰土 3. 淡褐色土+層 4. 赤褐色土



第50図 多利・小向遺跡構配図



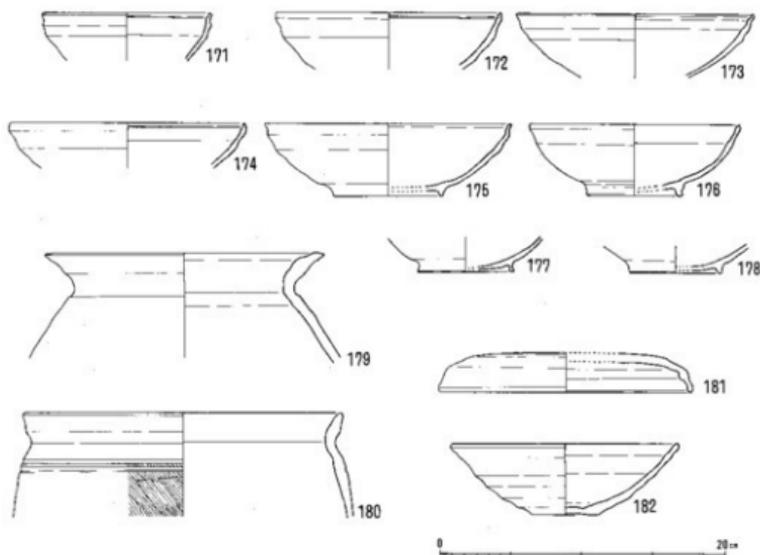
第51図 包含層出土の皿・小皿

はヨコナデによるわずかな屈曲が残る。159・160は底部が若干上がり、体部にはヨコナデによる屈曲が著しく残る。159は口縁端部を短く立て、160は肥厚させる。162はしっかりとした高台が付くものであり、体部はヨコナデによって屈曲し、口縁端部はさらに強く揃んでいる。

碗 (171~176) : 171~174は口縁外面にヨコナデによる二段の屈曲があり、端部内面に一条の段を持つ。175は口縁外面にヨコナデによる二段の屈曲を持つが、内面の段はなく、口縁端部が小さく外反している。176は口縁部の屈曲もなくなり、口縁端部を肥厚させて丸くおさめてしまう。高台はいずれも細いものである。すべて、表面の剥離が著しい。171は口径12cmあまりと極端に小さいものである。

土師器

小皿 (163~169) : 163は体部が大きく開き、口縁部は丸くおさまる。164は体部が緩やかに開き、口縁部の内側が肥厚する。165は器高が低く底部が若干浮き、大きく開いた口縁部の上端は水平になる。166~168は体部外面に二段の屈曲を持つが、口縁部の処理が異なっている。166は小さく外反させ、167は短く立ち上がり、168は肥厚している。166と168は体部が鉢状になっている。167は体部が底部とはっきりと分かれ、外反して丸くおさまる。



第52図 包含層出土の椀・甕等

皿 (170) : ごくわずかな高台を持ち、体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。口縁部はヨコナデし、短く立ち上がる。

甕 (179・180) : 179は口縁が「く」の字に外反し、頸部に小さな段をもつ。180は蔵骨器に利用されていたと思われるものである。頸部は少し窪み、口縁部は短くわずかに外反する。体部外面は刷毛目調整され、肩部にはその上から二段の沈線が走る。

瓦質土器

蓋 (181) : 体部から口縁部をヨコナデする。口縁部はわずかな屈曲を持って丸くおさまる。内面にはカエリのような突帯が走る。天井部は欠損するがヘラケズリされており、宝珠状の摘みが付いていたものと思われる。

須恵器

椀 (182) : 底部は糸切りし、ヨコナデした体部はわずかに内弯しながら大きく開き、口縁部は丸くおさまる。

鉄製品

斧頭 (183) : 全断面は鋭角な三角形をしており、刃部もこれに従う。全長は約10.8cmある。

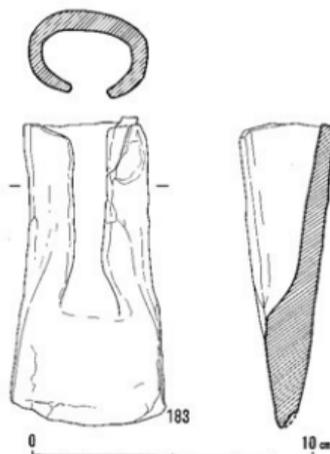
基部幅は約4.4cm・刃部幅約5.5cmを計り、刃部側が若干広くなっている。また、刃部は曲刃となっている。着装部は両側辺を曲げて寄せ、袋状の挿入部を作っている。

D. 小 結

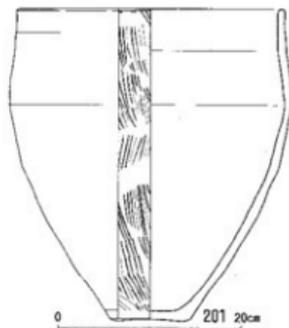
多利・小向遺跡でもやはり検出できた遺構は、柱穴とピットばかりである。中央部をほぼ南北に通る一条の柱穴のならばはみられるものの、他のものはまったく相互に関連せず、その性格を推察することもできない。こうした点では、多利・岡中遺跡と同じような状況であるが、この遺跡の場合多利・岡中遺跡よりも遺構の存在する範囲が狭いため、集落址以外の性格の遺跡を考える必要があると思われる。

特に、一塊の土師器の鍋と鉄斧の出土は、すぐ近くに墓址などがあったことを示しているものと思われる。また、確認調査の節に出土した縄文土器は一切出土していないため、縄文遺跡の存在は周辺の地域に求めるべきであろう。

出土している土器からみて、12世紀末から13世紀前半の遺跡と考える。



第53図 包含層出土の鉄斧



第54図 確認調査No32グリッド出土の縄文土器

— 多利・寺ノ下遺跡 —

A. 各調査区の概要

水田7筆分に当たる調査区であり、多利・小向遺跡のすぐ北東に位置している。遺構は時期的にも一部重複するところがあり、ほとんど同一の遺跡と言っても良いかと思われるが、両者の間には遺構の連続が無く、また両者の間の農道によって小字名が分かれているため、個別の遺跡として取り扱った。

遺跡の東方（山腹）には、多利の集落を見下ろせる場所に蓮華寺があり、小字名の由来もこれに因るものと思われる。遺跡は多利・小向遺跡同様、北西向きの緩やかな斜面に立地している。微高地の南の端に多利・岡中遺跡があり、その北の端に多利・寺ノ下遺跡があるといった位置関係になっている。

調査区は遺跡の高所にあたる南側より第1区とし、北の端まで9地区を設けた。また、第8・9地区の東側（松ノ本古墳の構築されていた山裾）の水田には、トレンチを二本設定した。

B. 調査の結果

明らかに遺構であることがはっきりしているのは、後に述べるわずかのものである。多く検出された土壌状の遺構はいずれからもほとんど遺物が出土せず、平面形も不定形で壁の立ち上がりもおおきく土壌状のくぼみ（仮に「不確定土壌」と称しておく）であるため、明確な遺構ではないように思われる。ただ、調査担当者の独断による誤認を避けるため、一

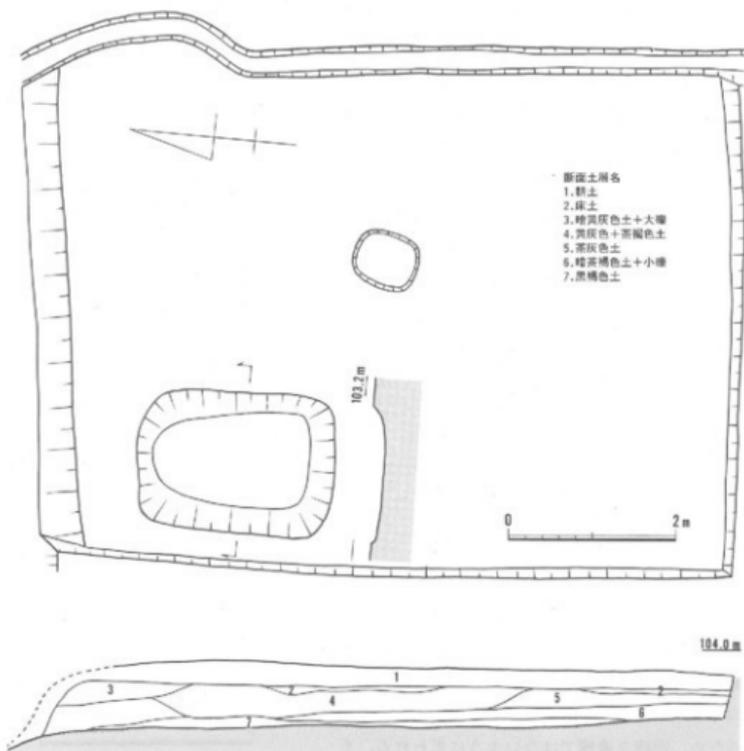


第55図 多利・寺ノ下遺跡地区割図

応検出したと思える遺構は全て図面上に記しておいた。特別に記していない遺構はこうした状態にあったものである。埋土は全て黒褐色土であり、分層することはできなかった。

遺構面は地山の上に堆積した黄灰色土に黒褐色土の混入した土層であり、旧地形に従って山側の東に高く、西側の谷に向かって緩やかに傾斜する状態の地形となっている。

明確な遺構が検出できたのは、次の調査区である。



第56図 第3区遺構図

第3区

遺構

第4区との南北セクションぎわに、ほぼ南北に長辺を向ける2.5m×1.8mの隅丸長方形をした土城を検出した。この土城もごく浅く、わずかにその深さは15cmあまりである。埋土も他の土城と同様の黒褐色土である。ただ他と異なり、城内にはかなり多量の瓦器類が包含されていた。このことから瓦器の焼成城かとも思われたが、城内には火災を受けた痕跡もまた灰・スミの出土もまったく見られないため、土城墓もしくは木棺墓などの墓址になるものと思われる。ただ、どちらの種類の墓址かは、土城自体が非常に浅くまた埋土も分層できないため、一概に決定することは非常に困難である。

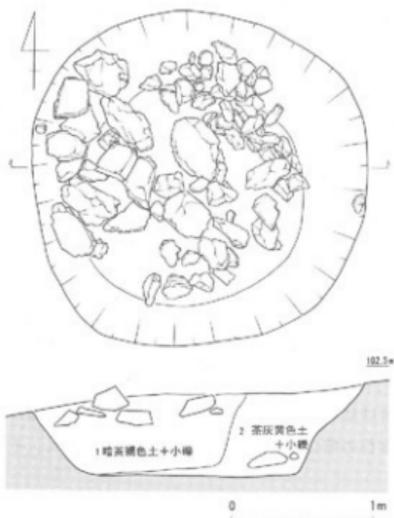
出土した遺物からみて、この土城は13世紀前半頃の遺構と思われる。これ以外には、南辺部に小型の土城をひとつ検出したが、その時期はまったくわからない。他には、遺構はほとんどみあたらない。

第6区

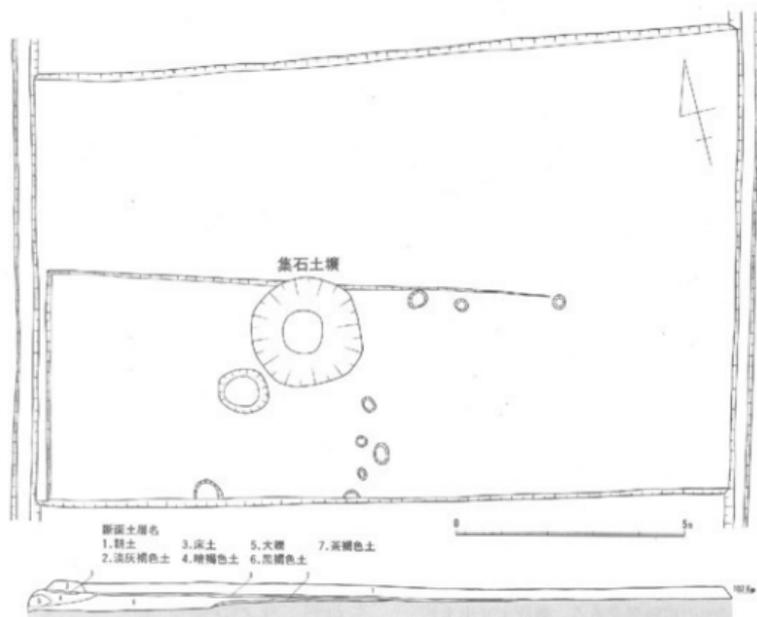
当初の区割りの南側のみを調査の対象地区とした。

遺構

中央より若干西側に、集石土城を検出した。平面形は径2.4m程の正円をしており、深さ55cmの楕鉢形である。城底より出土した楕鉢から、江戸時代の遺構と思われる。城内の集石には積上げたような状況はみられないが、大きな石でもかなり浮き上がっており、かつてあった空間がなくなり上にあつた石が落ち込んだ状態のようにもみうけられる。これらの集石は、東側の一部が埋められて土城が一回り小さくなった後入ったものであり、この東側のみ拳大の角礫が、茶灰黄十小礫の埋土にそって積上げられたように置かれている。墓址かと思われる。遺構の状態からみて、座棺が納められていたのであろうが、集石のために断面等が乱されており、その痕跡を確認することができなかった。そのためそれをはつき



第57図 集石土城



第58図 第6区遺構図

りと座棺とは断定できなかった。この集石土壇の西側に、径1mほどの土壇とその東側に数個のピットを確認した。これらの遺構は関連して地上の構築物の痕跡にもなるようすはなく、どのような性格の遺構なのかは不明である。これらの遺構からの遺物の出土はまったくないため、その時期も不明である。

—その遺物—

第6区集石土壇出土の土器

土壇内からは丹波焼系の擂鉢(184)が1点のみ出土している。底部外面はヘラケズリし、体部はほぼ直線的に開く。口縁部は大きく外側に屈曲し、内傾する平坦面をつくる。内面には6本目の櫛によって一面に下ろし目が施され、その後身込みにも円形に回されている。

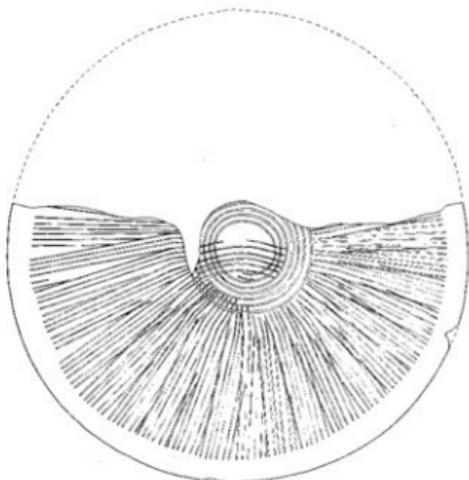
第8区

調査区の中央部の若干西側で、径90cm・深さ約70cmの土壇を検出した。平面形はほぼ正円を

しており、壁はほぼ垂直にたちあがる。埋土はやはり黒褐色をしている。遺物の出土も皆無である。

第1・2・9区においては、不確定土壌とピットのみを確認した。これらの遺構についての性格は不明である。

第4・5・7区では、まったく遺構を検出できなかった。



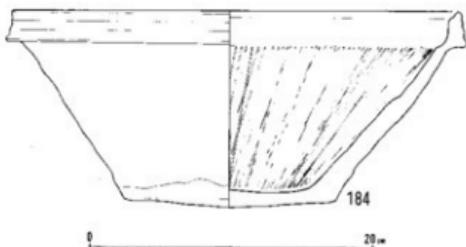
C. 包含層出土の遺物

包含層出土の土器には、奈良時代から近世のものがみられる。

土師器

小皿(185)：体部をヨコナデ調整するが、歪みが大きく表面の剥離も著しい。

甕(186)：体部最大径は口縁より若干張る程度であり、口縁部はわずかに外反しながら開く。口縁端部は外側へ若干肥厚する。



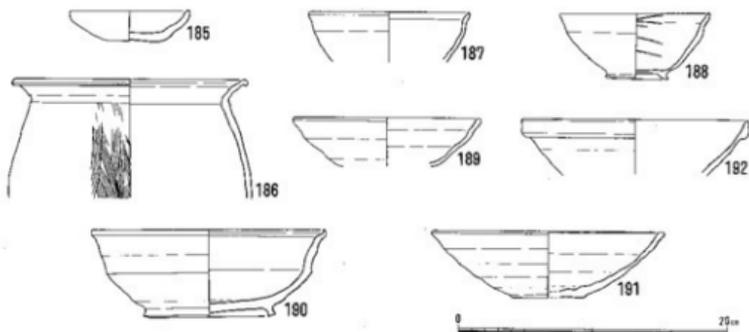
第59図 集石土壌内出土の遺鉢

黒色土器

碗(187)：口縁部はヨコナデによって小さく外反する。器壁は薄く、内外面とも炭素が吸着し鈍い光沢を持つ。

瓦器

椀(188・189)：188は口径が小さく、器高は高い。口縁部は強くヨコナデされ、大きな屈曲を持つ。体部内面にはわずかに横方向の暗文が残る。189は体部外面に二段の屈曲を持ち、口縁端部は丸くおさまる。この体部の屈曲はヨコナデによって形成されたもののようにも見られるため、黒色土器の底部である可能性も考えられる。



第60図 包含層出土の土器

須恵器

稜碗 (190) : 器壁は全体的にかなり厚く、鈍重な感じを受ける。稜はしっかりとし、器高のほぼ中央に巡る。口縁端部は短く立ち上がる。

碗 (191) : 底部は糸切りし、高台をほとんど持たない。体部はわずかに内弯しながら開き、口縁端部はわずかに張り出しておさまる。

白磁

碗 (192) : 大きく張り出した玉縁の口縁を持つ。施釉は白色に近い。

D. トレンチ調査について

第一トレンチ

遺構

幅約2.0m・長さ約8.0mの、東西方向のトレンチである。遺構面はかなりフラットになっている。検出できた遺構は、径20cm前後の非常に浅い往穴・ピット群のみであるが、掘立柱建物址などになるものはみられない。

—その遺物—

遺構内からは細片がわずかに出土しただけで、多くの遺物は黒褐色の包含層から出土したものである。

土師器

小皿 (193~195) : 193は体部が大きく屈曲した後、わずかに外反しながら開く。194・195は器が高く、いずれも口縁部はヨコナデによって若干の屈曲を持つ。

瓦器

椀 (196) : 断面三角のわずかな高台がつき、体部はほぼ直線的に開き、口縁部をヨコナデする。口径は約10.4cmとかなり小さい。



第61図 第1トレンチ
出土の土器

第二トレンチ

北面の谷部に向かって緩やかに傾斜しており、遺構はまったく検出できなかった。黒褐色の包含層もみられたが、第一トレンチの遺構面から続くと思われる面には、土師器の皿が数枚重ねて置かれていたような状態で出土している。

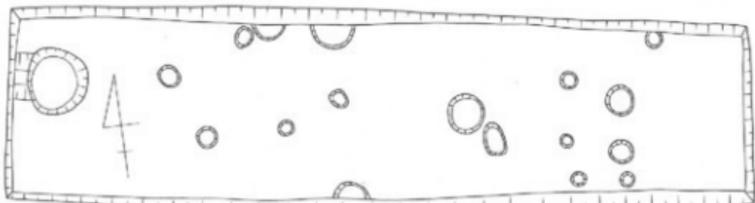
一その遺物一

土師器

小皿 (197~199) : 198・199は体部をヨコナデすることによって屈曲させ、口縁部は丸くおさめている。197は底部が若干上がる。197は体部を二段にヨコナデして大きく屈曲させている。198・199の底部は薄く、ナデで仕上げている。



1. 表土 2. 床土 3. P付埋土



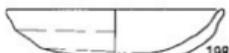
第62図 第1トレンチ遺構図

第一トレンチで検出した遺構の広がりを確認するため、池の北側にグリッドをひとつ設定した。しかし、このグリッドでは、遺構をまったく検出できなかった。

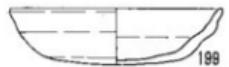
この結果から、この地区の西側は第8・9区によって、北側は第二トレンチにより、東側はグリッドと池によって、第一トレンチ周辺のごく狭い範囲のみに遺構が存在していることが判明したため、このトレンチのみで調査を終えた。



197



198



199

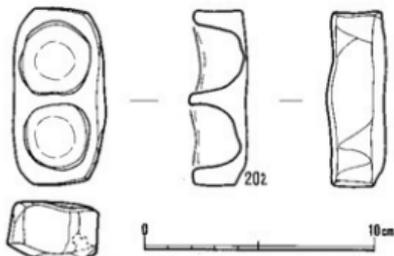


第63図 第2トレンチ出土の土器

E. 小 結

調査区の旧地形は、北西に傾斜する緩やかな斜面をしており、遺構が築かれることも可能な地形条件にあったが、結果的にはごくわずかの遺構が存在していただけであった。そのわずかに検出できた遺構は、第3区でみた墓址と思われる隅丸長方形の浅い土壇と第6区の集石土壇の他は、二・三の小型の土壇のみであった。第3区の墓址は13世紀代の、第6区の集石土壇は江戸時代の遺構であることははっきりしたが、他の遺構については遺物の出土がないため、はっきりとした時期は明言できない。特に第1・2区で多く検出した不定形の土壇は、塙壁の立ち上がりもはっきりしていない上、遺物もまったく出土しておらず、これを遺構とみなすことは困難なように思われる。

こうしてみると、包含層内の土器は奈良時代から中世にかけてのものがみられるが、遺構に関しては、中世と江戸時代の土壇がそれぞれ1基確認できたのみであり、これだけではこの遺跡の性格を明らかにするには非常に不十分であると言うより他ない。ただ、いずれの遺構も墓址であると思われ、他の生活の痕跡がまったくみられないため、この付近一円が長年にわたって、断続的に墓域として利用されていたのではなからうかと推測できるのみである。



第64図 確認調査No.39グリッド出土の瓦質製品

第3章 まとめ

1. 多利・前田遺跡の掘立柱建物址について

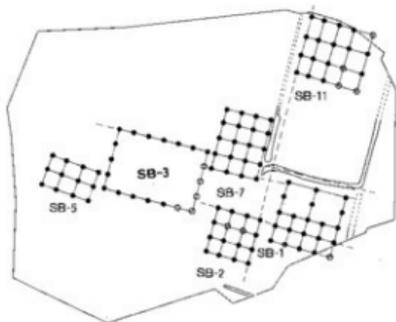
今回の多利・前田遺跡の調査により、11棟の掘立柱建物址(SB)とそれぞれの建物址に関連すると思われる溝(SD)、さらには墓址の可能性のある土壇(SX)を二基確認した。建物址・溝にはそれぞれの重複が見られるため、複時期の遺構を同一面で検出することとなった。ただ掘立柱建物址などは重複しているとはいえ、柱穴同士の直接の切合い関係から遺構の前後関係を確認することはできなかった。加えて遺構内出土の遺物も非常に乏しく、出土遺物から時期を決めることのできる遺構もごく限られてしまった。

以上のように、遺構の前後関係を考えるには不十分な状態にあるが、各建物址の柱穴・その建物址に伴う溝から出土したわずかな遺物と建物址自体の配置関係によって、各時期の遺構の配置の状況を考えてみた。

12世紀末～13世紀初頭の遺構

建物址の中で時期をある程度限定できるものは、SB-7と8である。この二つの建物址の柱穴からはかなり良好な瓦器碗が出土しており、その遺物からSB-8が12世紀後半、SB-7が13世紀初頭頃に当たるため、まずこの二つの建物址の前後関係が明らかとなる。

次に着目したのが、SD-2の東西方向に走る溝の部分とSB-7の南第二梁行、さらにSB-3の北側桁行が一直線上に並んでいることである。これは明らかに意識して配された結果であり、この三つの遺構が同一時期に存在していたことを示すものと考えられる。SD-2とSB-7の関係では、SD-2の西端がSB-7を避けるように南へわずかに下がっていることから、この両遺構が同時にあったことがわ



第65図 12世紀末～13世紀初頭の遺構

かる。そうすると、SD-2がその雨を受けていたと思われるSB-1も、当然これらの遺構と同一の時期に建っていたこととなる。また、SB-7に伴うであろうSD-4もSD-2と切り合っていないため、この一連の遺構と同一時期に設けられたものであろう。

これらの事を基準にして他の遺構をみてみると、SB-2の北桁行がSB-1の南第二桁行の延長線上にある。そしてこの二つの建物の間隔は240cmあり、SB-1の西側梁行の南第一柱間と同じ一間分=240cm(8尺)前後を置いて建てられている。また、SB-7とSB-1の間も約480cm(16尺)あり、柱間二間分と一致する。北側のSB-11はSB-7の南梁行から750cm(25尺)前後隔たり、さらにその西梁行がSB-1とSB-7との中間=SB-2の東梁行の延長線上に設定されている。

こうした相互関係(計画性)を持った遺構=SB-1・2・3・7・11・SD-2・4は同一時期の遺構とみなし、SD-2及びSB-7柱穴より出土した土器からその時期は、13世紀の初頭頃と推定する。

ただ、問題となるのはSD-3である。SD-3をSB-3に伴う雨落ちの溝と考えると、SD-3とSB-7が重複してしまうこととなる。しかし、SD-3から出土する土器が一段階新しい時期のものであるため、SD-3はSB-7が廃絶された後に設けられたものと理解したい。また、SB-4からSB-6に関してはこの計画性にあてはまらず、若干その方向も異なるものの、SB-5の北桁行がSB-3の南第二桁行にほぼ一致すること、SB-6が南北の建物になるためSB-6とは共存しないものと考えたい。SB-5はSB-3を基準としているが、SB-3が二時期にまたがる遺構であるため、SB-5の属する時期を柱穴より出土した土器でこの時期に決定した。

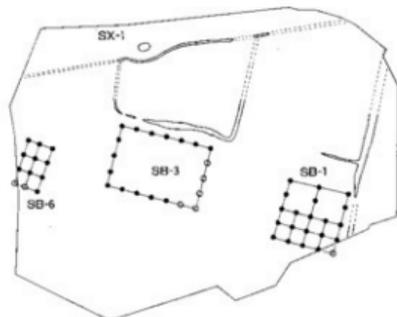
13世紀前半の遺構

SD-1はその切合い関係からSD-2を切っているため、13世紀初頭よりも後出であることがわかる。これに従ってSD-2は消失してしまうこととなるが、新たに設けられたSD-1の南端がSB-1を避けるようにわずかに東にふれており、その延長の溝の痕跡が調査区の上段にみることができるため、SB-1はSD-1と同時にあったこととなる。

SB-5が初頭の建物のため、方向を同じくするSB-6をこの時期の遺構とした。

また、SB-7が消失してしまい、これに伴ってSB-3に伴うSD-3が設けられる。SD-3は北へ下がつて、おそらくSD-6に合流してしまうものと思われる。

SD-6は建物群とSX-1を隔てるための溝である。SD-6はSX-1の南側で張り出



第66図 13世紀前半の遺構

していることから、SX-1は本来地上に塚などの構築物を伴っていたものと思われる。確認調査ではこれより北には遺構が確認されていないため、SD-6はSX-1を限るとともに遺跡の北側を限っていたものと思われる。そのために、SD-6は建物群などとは大きく方向を異にし、南側から合流してきたSD-3を受けながらも自然地形に沿った方向に流れて、さらに南から流れてきたSD-1に合流して北に流れていたとも推察できる。

これらの遺構の時期は、SD-3及びSX-1より出土した遺物から、13世紀の前半（前葉から中葉）頃とみている。

12世紀後半の遺構

SB-8はSB-7と桁行をほぼ同じ方向にとり、北第一梁行をSB-7のそれよりも南に約50cmずらした位置にとり、SB-7とほぼ重複するように建っている。

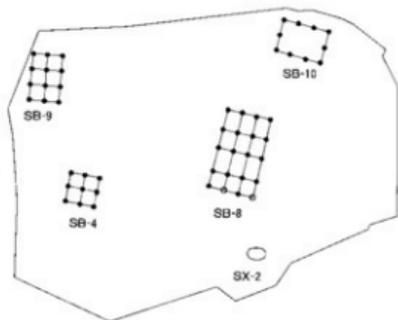
SB-11は西の梁行をSB-8の東第二桁行の延長上に設定しており、両者の間は1,060cm（35尺）前後離れるように設けられている。

SB-4・9については、SB-8・10とその方向が一致しない。さらに、SX-2はSB-8・10よりさらに古い段階の遺構であるため、SB-4・9もSX-2に伴う時期の建物になることも十分に考えられる。

SB-7がその後の遺構配置の基準の一つになっており、そのSB-7がSB-8を基にして建てられていることは、つまりSB-8がこの遺跡（調査区）の建物配置を行う際の配置の基準になっていたことを示すものである。

SB-8を中心とするこれらの遺構の時期は、SB-8の柱穴より出土した瓦器などからみて、12世紀の後半を考えることができる。ただ、SX-2については11世紀後半から12世紀前半代を考えた方が妥当かもしれない。

以上のように、今回の調査で確認できた遺構は12世紀から13世紀前半のものであるが、掘立柱建物址群は明らかな一定の計画性に則って配置されており、その計画性は遺跡の開始から廃絶まで一貫して守られている。こうした計画性（建物群）を保持できるのは、経済的・社会的権力を把握することのできた支配者層（領主層）などであったと思われる。



第67図 12世紀後半の遺構

2. 多利遺跡群出土の瓦器について

今回の調査によって、多利遺跡群からかなりの量にのぼる瓦器が出土した。しかしほとんどが細片であり、表面の剥離も著しい状態の資料ばかりである。さらには、遺構からの一括性を持った出土や、層位的に前後関係をおさえることのできる状態での出土資料はほとんどないため、あくまでも机上での操作が中心となるが、本資料の特徴について簡単にふれてみたい。

A. 段階の設定

本遺跡出土瓦器、特に碗についての型式分類を試みたのが図68である。

ここで、最も古い型式にはいるのが1である。形態的な特徴としては、高台が高くしっかりとしており、器高も深く、体部は大きく内湾しながら開いていく。口縁部の外面にはヨコナデによる段が二つあり、その端部は短く揃みあげている。そのため、口縁端部の内面には一条の段が巡る型式のものである。

2は1と同じように、口縁部外面に屈曲を二段持ち、その端部内面には一条の段がある。ただ口縁部外面の屈曲は1よりも緩やかになり、口縁端部内面の段も浅くなってしまふ。高台は断面台形に近いが低くなり、体部の内湾も小さく、口径もやや広がった感じとなる。

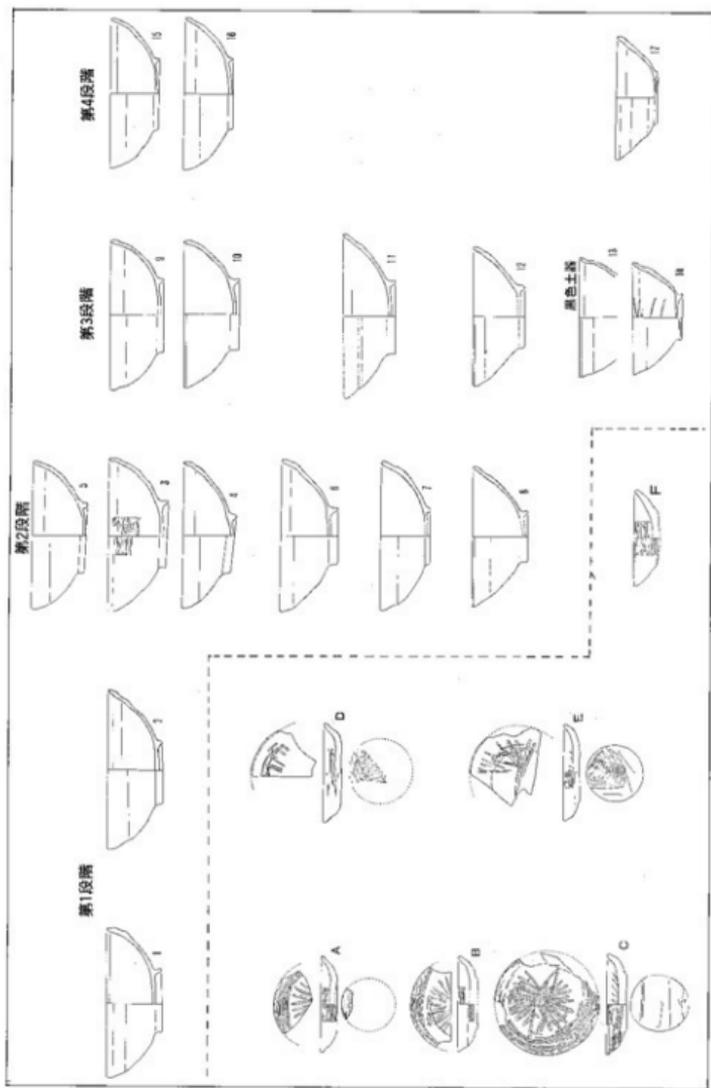
ここまでを、多利遺跡群における第一段階としたい。

次の段階になると、口縁端部が内傾するように短く立ってしまい、これに伴って口径も小さくなる。体部の形状には二種類あり、3は前代の2からの系列につながるものであり、体部は内湾し、その内外面に横方向の細かなヘラミガキが残る。これに対し4・6は体部があまり内湾せず、直線状に開いてしまふ。両型式ともほぼ口径は等しいが、器高は後者のほうが低くなっている。高台は高くしっかりとしている。また、両者とも口縁部の外面は一ないし二段に屈曲している。5に関しては口縁部外面の屈曲などは見られないが、口縁端部内面に段を持っているため、一応ここに置いてみた。

7は体部が内湾しながら開くが口縁部の処置が4・6に近く、外面に明瞭な一段の屈曲を持つため、3と4・6型式の中間の型式にはいるものといえよう。

さらに、この段階で口径の中型のものが現れる。体部はほぼ直線状に開き、器高の割合も深くなる。口縁部の仕上げ方は次段階のものに近い。

第3の段階では、8・9が3からの形態を受ける。口縁端部の内側への巻き込みは無くなり、外面の屈曲もごくわずかなものとなってしまふ。口径はさらに小さくなるが、高台は断面三角のものがしっかりと付けられている。10は7の影響を受けながらも、4・6につながる。体部はより直線的になり、一層扁平な感じを持つ。口縁部外面の屈曲は「稜」化してしまふ。8より続く12も体部の開きが直線状になり、高台径も大きくなる。



第68圖 瓦器繪圖年試案

ここで新たに、小型の椀が誕生する。体部は直線状であり、口縁部が大きく屈曲する。口縁径に対して器高が高くなる。高台は外向きにしっかりとふんばる。体部内面には、ごく粗い横方向のヘラミガキが施されている。

多利遺跡の最終段階は、資料が少なくなつてしまい、実情は把握し難い。ただ、1から続いできた形態の15・16は、口径はほぼ同じものの器高が低くなり、高台も断面三角のごく小さなものとなつてしまう。小型の17は形態的には12からつながるものであるが、器高は前代の13・14よりも低くなり、高台も小型化してしまう。

これ以降の型式の資料は、出土していない。

B. その年代

京都府亀岡盆地周辺の編年では、口縁端部の内面に段を持つ型式のものは、12世紀の前葉あたりに置かれているように思われる。ただ本遺跡の場合には、1はともかくとして2になるとこの段はかなり退化しているため、12世紀の中葉の時期を考えるのが妥当なようである。

第2段階は、3にみられるように体部の内外面に横方向のヘラミガキが施されており、口縁端部の巻き込みの現象や体部の直線状に開くものが現れることなどから、12世紀の後半（むしろ後葉）におさまる型式であろう。

第3段階では体部のヘラミガキが内面だけとなつてしまい、外面にはまったく施されなくなる。この磨き手法の特徴から、13世紀前葉あたりにおさまりたい資料である。

そうすると、第3段階よりも簡略化の傾向にある第4段階の資料は、13世紀中葉前後の時期の中でとらえられるのではないかと考える。

以上の時期推定の基準は、形態的な特徴の変化と磨きの施行状態の違いによるものであるが、こうした時代ごとの形態的变化は、基本的には亀岡盆地周辺の瓦器椀に見られる変化と同じ展開を示すものであり、瓦器制作技法の上で京都丹波との強い関連性をみることができると推定される。

C. 丹波の中における多利遺跡群の瓦器

上記したように、形態的・技術的には京都丹波の瓦器とほぼ同じ変化を遂げてきているが、細部においては大きく異なっているため、その中に多利遺跡群の瓦器の特徴を見出してみたい。

まず、表面に施されるヘラミガキについては、本資料の剥離が著しいため十分な比較はできないが、第2段階のものには体部の内外面に細かな横方向のヘラミガキが施され、第3段階では身込みに粗いジグザグの暗文があり、体部には内面のみに横方向のヘラミガキが施されていることが、その痕跡から確認できる。

第1段階では、ここにおさまると思われる小皿から推定して、体部の内外面には細かな横方向のヘラミガキがあり、身込みにはおそらく螺旋状の暗文が描き込まれていたと推定できる。

暗文・ヘラミガキの施行に関しては、亀岡周辺と同じような変遷を遂げてやがては消失していったと考えてもよいようである。

暗文・ヘラミガキに関しては残存の状況も良くないので、かなりの推測を加えて述べてきたが、椀自体の形状については、京都丹波のものとは大きな違いを指摘することができるようである。この違いは各段階を通してみられるものであり、京都丹波の瓦器との根本的な違いを示すものである。

その違いの第1は、器壁が薄いことである。1などは口縁部がかなり厚くなっているが、他のものは第4段階に至るまで底部から口縁部までの器壁が薄いま均一になっている。そのため、瓦器一点あたりの重量が非常に軽く仕上がっている。

その2は、口縁部外面に屈曲を持つことである。これは、口縁部のヨコナデによって生じたものである。第1段階では口縁端部の積み上げにより、二段の屈曲がつけられる。第2段階では新たに一段のものもみられるが、口縁端部巻き込みによる二段屈曲のものが主体となる。ただ、この段階での屈曲は第1段階のものに比べるとかなり緩やかなものとなっている。

その3は、京都丹波のものより全体的に扁平な形態となることである。器高指数でみて、12世紀中葉で亀岡*38.0前後：多利*34.8~36.0、12世紀後葉で亀岡*37.1~40.6：多利*34.2~38.7、13世紀前葉で亀岡*35.9~39.8：多利*32.5~38.9、13世紀中葉で亀岡*38.6~38.9：多利*32.0といった結果になる。多利遺跡群の瓦器椀の器高指数は、亀岡の指数の範囲を大きく下回るか、その範囲の中に入っているが必ず最低指数のぎりぎりにとどまっている。このことから、多利遺跡群の瓦器椀が京都・亀岡盆地周辺のものに比べても、著しく器高の低い形態をした椀であることがわかる。

以上のように、暗文・磨きの施行、口縁端部の処置などの基本的な整形技法に関しては、京都丹波のものとはほぼ同じ手法を用いていることが知られる。ところが器自体の形態では、口縁部外面に屈曲を付加したり、器高がきわめて低くなっていることが多利遺跡群出土の瓦器椀にみられる独特な特徴といえる。このような特徴を持つ瓦器椀は、同町国領所在の国領遺跡でも出土している。そのためこうした瓦器椀が兵庫丹波の特色かという点、これが一概にはそうともいえないようである。隣の多紀郡の初田館跡の堀内から出土した瓦器椀は器壁も厚く、器高も高くまさに京都丹波の型式をしたものが出土している。かと思えば、同じ多紀郡でもすぐ西の大山荘荘園内の遺跡では、多利遺跡群の瓦器椀により近いものがごくわずかの京都丹波系のものを伴う状態にある。

同じ兵庫丹波の中にあっても、水上郡と多紀郡とでは瓦器椀の形態も異なり、さらには同じ多紀郡の中でも遺跡ごとに二つの形態が入り組んで並存している。この二つの形態はすでに“もうひとつの「丹波型」”として報じられているものであり、京都府の福知山市を中心に丹後地

方でも出土しているものである。多利達跡群の瓦器もおそらくこの“もうひとつの「丹波型」と呼ばれる型式と同じ系列に入るものと思われる。丹後地方に多く分布していると考えられているこの型式の瓦器碗が、兵庫丹波においてもかなりの比率で存在することが判明した今、兵庫丹波から丹後地方を中心に分布する形式の瓦器群として認識する必要があるように思われる。

従来瓦器の生産に関しては、一国一生産地から一荘園一生産地などの考えが出されていたが、上記のような状況ははっきりしてくると、その流通経路は一国・一荘園を越えてかなり複雑に入り組んで広がる可能性も生じてきた。

また、かつて柏原町の東奥第1号墳で出土した底部糸切りの瓦器碗は、今回の調査では確認できなかった。この瓦器碗は体部から口縁部の形状などはSX-2で出土している黒色土器に近いものであり、底部糸切りの手法は包含層出土の最古式（第1段階）の小皿の底部にも見られる（ただ、糸切りの後で削り取っているため、底部寛切りのものの中にも糸切り手法が隠されている可能性がある）ため、底部糸切りの瓦器が第1段階の時期まで存続していたことは事実と思われる。ところが、第2段階になると瓦器碗もすべて輪高台となるため、底部糸切りの手法は、ごく早い時期に消滅してしまう傾向にあるようである。

表2 瓦器碗器高指数表

土器番号	$\frac{\text{器高}}{\text{口径}} \times 100$	器高指数	土器番号	$\frac{\text{器高}}{\text{口径}} \times 100$	器高指数
1	$\frac{5.6}{14.8}$	37.8	10	$\frac{5.5}{14.3}$	38.5
2	$\frac{5.4}{15.5}$	34.8	11	$\frac{5.1}{16.1}$	31.7
3	$\frac{5.7}{15.1}$	37.7	★12	$\frac{5.1}{13.7}$	37.2
4	$\frac{5.1}{14.5}$	35.2	13		
5	$\frac{5.3}{14.5}$	36.6	★14	$\frac{4.8}{11.1}$	43.2
6	$\frac{5.7}{14.9}$	38.3	15	$\frac{5.0}{14.7}$	34.0
7	$\frac{4.9}{14.5}$	33.8	16	$\frac{4.9}{15.0}$	32.7
★8	$\frac{5.5}{13.7}$	40.1	★17	$\frac{4.1}{12.1}$	33.9
9	$\frac{5.1}{16.1}$	31.7			

★は中型・小型の碗であり、参考の資料

3. SX-1 出土双鳥鏡について

土壙墓と思われるSX-1出土の遺物は非常に豊富で、和鏡1・毛抜き状鉄製品1・刀子片1・性格不明の玉状金属製品2・青白磁蓋付き小壺1・青白磁合子1・白磁皿1・土師器皿8数点・漆箱1が、被葬者の頭部付近と思われる場所に副葬されていた。鏡上がりの良好な特注品と思われる和鏡や、輸入陶磁器、中世の遺物としては経塚埋納遺物や仏社寺の伝世品以外には数少ない握り鉞がみられたり、漆箱が埋納されるなど、被葬者が丹波地方の単なる一家族ではないことをうかがわせる。

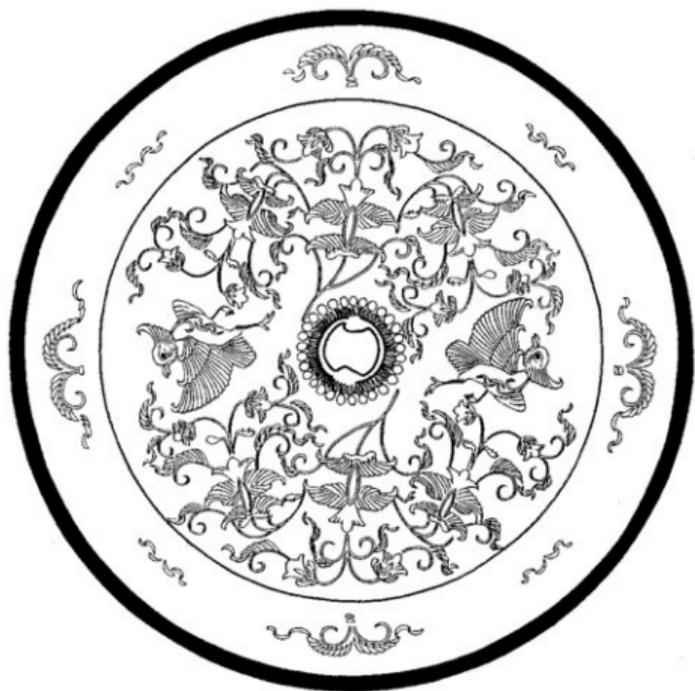
古墳時代出土の銅鏡については、同范鏡・舶載鏡論など、文様や分析値からさまざまな検討がされてきたにもかかわらず、奈良時代に唐鏡から変化してわが国独自で発達した和鏡についてはまだ確立した編年体系はなされていないのが現状である。古代・中世・近世、各時代を通じて何千、何万枚と製作された和鏡が後世の鏡物の素材として鑄つぶされてしまい、現在なお土中や水中に埋納されているものがあるにしても、当初製作された数からすれば現存するものはその何割にも満たないものと思われる。多くの和鏡が製作されたにもかかわらず、鏡が当初は信仰の対象で神聖化されていたため、製作した鏡工の名すらとどめず、鑄造技術もわずかな文献からしか求めるしかないのは残念である。

多利・前田遺跡SX-1出土の和鏡には木質部の残存があり、樹種鑑定ではヒノキであった。漆の残存はなく、蒔絵が施されたような豪華なものではなかったと思われるが、鏡を収納した鏡箱であったとして差しかえないものと思われる。出土当初から鏡に錆化はみられず逸品の鏡と思われた。材質の分析鑑定の機会を得たところ、錫の含有量が40%以上認められ、予想以外の結果があった。このため、わが国でも数少ない和鏡の復元製作者である角谷一圭氏、山本鳳龍氏から和鏡の製作技法について御教示いただいた。以下、和鏡の伝統的な文様である双鳥文を構図としたSX-1出土の瑞花双鳥文鏡について検討を加えてみた。

双鳥文鏡の文様構図および鏡胎の形態について

鏡背の文様は、舶載唐鏡の唐花双鳳文から変化した瑞花^{じんか}鴛鴦鏡である。(双鳥については、「双鸞」の呼称もあるが特に規定はなくここでは「鴛鴦」としておく。)双鳥は交互相対で鏡を隔てて相対して向きあい、鎌倉期といわれるものに多い構図である。双鳥は一般にみられるように両翼を広げて飛んでおらず、片翼のみで片脚を立てて見返っている。瑞花は唐草からかなり変化して華麗濃麗され、円心より外方に向かう放射的に描写されている。

手法は蠟型手法や踏み返し手法でなく、平安後期以降の製作鏡にみられる1面ずつ鑄型(真土型)を製作する摺押し手法であるが、初期のものに比べるとやや種類の多い型を使用して立体感を表わしている。急斜へ字圏で鏡胎は厚く、界圏を意識して内区の間空すべてに文様を描



和鏡の下絵復原図

写している。鑄上がりの状態でやや不鮮明な部分もあるが、製作時の鏡の下絵を復原してみたのが上図である。実際には墨でこれを描き、黒の濃淡で立体感を表現して窺押しを目安にしたようである。構図的にも形態的にも鎌倉期にはいるものと思われる。

和鏡の鑄造技術について

和鏡の分析例は非常に少なく、白銅質で錆化がほとんどみられないものが、どれだけの錫を含んでいるのかは定かではなく、比較対照できるものがない。古墳出土の舶載鏡といわれる良質の白銅鏡の分析例をみても、錫の含有率が40%以上あるものは皆無に等しく、ほとんどが15~25%くらいで、海獣葡萄鏡でも30%程度である。SX-1出土の和鏡の鑄造が偶然の所産によるものか疑問を感じたが、和鏡製作者である角谷氏・山本氏ともに、当時の鏡の鑄造技術は現在

なお不明点が多いが、優秀な鏡工^{註8)}であれば製作は可能であろうとのことであった。ただ両氏とも、白銅鏡は25%ぐらいまでのものが製作的には失敗も少なく作りやすいため、このような錫分の多い鏡が作られたのは、当時何面も製作されたとは思えず、おそらく特注品か、鏡工が自分の技術を駆使して製作した可能性が強いと述べられている。錫が30%以上にもなると非常に硬くなり、山本氏所有のヤスリや鑿^{註9)}ではとても刃がたたず、ダイヤモンドの刃で研磨しなくてはとても出きないとのことで、硬くてしかもネバリがなく割れやすいため、当時かなり慎重に日数をかけて砥石で研磨したと思われる^{註9)}。銅の融点は1083℃で、不純物を取り除くためにも^{註9)} 鑄込みの温度は1000℃以上ないと無理であるが、荒炭だけで一定の温度を保たせるにはかなり困難な労力を費したと思われる。錫の融点は231℃で、鉛ともに酸化しやすく溶解のタイミングが非常にむずかしいようである。鑄込みの温度と鑄型の温度の調整もむずかしく、水蒸気で文様がなまって不鮮明になる場合もあるようである。酸化するため、含有率の比は鑄上がり後はかなり変化する。鑄物に要する材量は、湯口や湯道のものもいるため鏡に要する量のほぼ2倍で、鑄造時に使用する銅は、純銅でなく古い青銅器を混ぜないと良好に仕上がらないようで、文献にも、「熟銅」「銅」の区別はあるようである。SX-1出土の和鏡には銀も含まれていたが製作時になめらかに仕上げる作用があるようである。SX-1出土のものは、湯口が荒れておらず、^{註10)} 判別することが出きない。文様の間隙も鏡で平滑に仕上げた痕跡も認められず、かなりの優秀品であったようだ。

和鏡は鑄造されてから、数十年、数百年伝世されたと思われ、埋納時期から鑄造された時期を比定するにはかなり困難である。SX-1出土の和鏡が、従来の研究成果から鎌倉期に比定できるとしても、平安後期に鑄造され伝世された可能性も捨てきれない。山本風龍氏の協力を得て、錫40%以上を含有するSX-1出土の和鏡を製作復元する計画を進めていたが、今回の報告には間に合わなかった。いずれ何かに報告する機会を得たいと思う。

参考文献

- ① 広瀬郁興 「和鏡聚英」 上・中・下巻 大正8年
 ＊ 「扶桑紀年銘鏡圖説」 大阪市立美術館学報第1 昭和13年
 ＊ 「和鏡の研究」 昭和49年
- ② 中野政樹 「和鏡」 (『日本の美術』No.42) 昭和44年
- ③ 中村鉄青 「和鏡の研究」 昭和36年
- ④ 中口 裕 「銅の考古学」 考古学選書4 昭和47年
- ⑤ 石野 享 「鑄造 技術の源流と歴史」 昭和52年
- ⑥ 森 浩一 「鏡」 (『日本古代文化の探究』) 昭和53年
- ⑦ 前田洋子 「大阪市立博物館所蔵 和鏡について」 (『大阪市立博物館紀要』第1冊) 昭和44年
 ＊ 「和鏡の用途の展開について 一出土鏡・水中検出鏡を中心として」 (『北山茂夫追悼 日本史学論集』) 昭和61年
- ⑧ 山崎一雄 「田辺義一著『A Study on the Chemical Compositions of Ancient Bronze Artifacts Excavated in Japan』の概要」 (『考古学と自然科学』第13号) 昭和55年

- ⑨ 山崎一雄 「ガラス・釉薬・青銅器等の化学分析」 (『埋蔵文化財の材質・構造・保存環境に関する研究』) 奈良国立文化財研究所 昭和61年
- ⑩ 関 秀夫 「経塚地名総覧」 考古学ライブラリー24 ニュー・サイエンス社 昭和59年
- ⑪ 『東京国立博物館図版目録 和鏡篇』 東京国立博物館 昭和44年
- ⑫ 『経塚遺宝』 奈良国立博物館 昭和52年
- ⑬ 『特別展図録 日本の鏡 隋唐鏡から和鏡へ』 大阪市立博物館 昭和52年
- ⑭ 『特別展図録 日本の古鏡 一女装美のプロデューサー』 大阪市立博物館 昭和60年

註

- (1) 和鏡を墓に埋納した例は、福岡県・門田遺跡、鳥取県・長瀬高浜遺跡、大坂府・岡本山古墳群など15例を数えるが、和鏡と輸入陶磁器を埋納した例は、多利・前田遺跡以外に福岡県・博多遺跡群、山口県・鏡鏡司大蔵遺跡、兵庫県・福田天神遺跡、京都府・前野遺跡など5例のみである。
- (2) 和歌山県・熊野速玉大社の神宝の1つに銀鏡がある。福井県・深山経塚、三重県・朝熊山経塚、京都府・鞍馬寺経塚など経塚遺物として類別がある。福岡県・剣塚遺跡からは中世の木棺墓より出土している。
- (3) 福岡県・観世音寺側で発掘された木棺墓からは縦35cm・横25cm、高さ約8cmの両側に金具がつけられた漆塗りの木製手箱が検出されている。土壌墓や木棺墓から漆製品が出土することはあるが、はっきりと手箱とわかるものは少ない。多利・前田遺跡のものはX線透過撮影を行ったが、金具は見当らなかった。
- (4) 『大安寺御霊縁起并流記資料帳』(747年)には同寺に1275面の鏡が所蔵されていたとの記載がある。
- (5) 栃木県・日光男体山山頂遺跡からは162面が出し、聖化双鳥文系鏡・花鏡が130面余をしめる。奈良県・大塚山系山上ヶ岳山頂遺跡からは総数300面余が出土している。山形県・羽黒山山頂遺跡からは600面余におよぶ銅鏡が御手洗池から出土している。
- (6) 大阪市在住。釜師として国の重要無形文化財に認定されており、伊勢神宮の神宝鏡を製作された。
- (7) 京都市在住。無形文化財に認定されており、真鏡を複製製作されたことで著名である。
- (8) 『正倉院文書』によれば1日の功銭は仏工が六十文で最高で、次に鏡作工が五十文支給されていた。
- (9) 「かつて真澄鏡を作る。……中略……さて鑄出したる鏡に鏡をかけ試むるに、更に粘気なく硬きこと石の如し。……中略……ここに於て鏡を以て削ることを止め砥石を用いて試みるに鏡を用ふるよりも容易に磨き得べきを知りぬ。かくて磨くこと数日を費せども未だ全く鏡面の筋鏡を去ること能わず、式に磨十八人とはるは誠に故あるなり。……中略……二旬を費して漸く真澄鏡一面を得たり。」(参考文献③より)
- ⑩ 「東大寺

応鐘 御鏡四面各様一尺 厚五分
 合応用熟銅七十斤大 種八斤見所用 廿二斤備料
 白鏡六斤大 銅幣一斤大 鉄精四兩大 鉄二廷堅 帛繩一丈 生繩二尺
 調錫二屯 調布一丈 砥二課 青砥二村 胡麻油四合 荒炭十二石
 和炭六合 石灰一斤大 築甘根
 応奉仕職工一十人
 単功一百廿四人
 鑄工五人^{兼六十四人} 八人鑄功 五十六人鑄作功 細工一人^{兼十五人} 權職工一人^{兼二人}
 右二人鑄功 鉄工一人^{兼二人} 共作大二人^{兼八人} 十二人自奈良京運士六 二人權職工
 共作 三人鉄工共作 廿三人鑄使
 以前 …………… (以下略) 正倉院文書「東大寺鑄鏡用度文案」

4. 結 語

多利遺跡群には前田・岡中・小向・寺ノ下の四遺跡があり、それぞれの調査結果については上記したとおりである。ここでは、再度その結果を確認するとともに、それぞれの遺跡の意義について簡単に触れてみたいと思う。

まず、多利・岡中遺跡は他の三遺跡が中世（13世紀前後）を中心とした遺跡であるのに対し、奈良時代から平安時代にかけての遺跡であり、時期的には画絶して存在していたこととなる。土器片を多く出土しているが、それに伴う遺構は、後世の削平によってかなり消失しているようで、検出された柱穴・ピット群は掘立柱建物址などになるものはみられない。そのため、検出された遺構（柱穴・ピット群）の性格を解明するまでには至っていない。

多利・小向、多利・寺ノ下の両遺跡については、本来一つの遺跡として考えても良いものと思う。多利・小向遺跡も検出できたのは柱穴・ピットばかりであったが、元来そこには掘立柱建物址などの遺構があったと思われる。また、包含層の中には蔵骨器の破片と鉄斧が一塊となって出土しており、多利・寺ノ下遺跡でもこれと同時代の墓址が検出されていることから、この両遺跡の周囲には13世紀を中心とする墓址群が広がっていたのかもしれない。現在東側の山腹に蓮華寺が建立されているのも、中世からのこうした民衆の信仰に帰するところであるのであろう。

やはり、この遺跡群の中で最も注目すべきは多利・前田遺跡である。ここで検出された12世紀後半から13世紀前半にまたがる11棟の掘立柱建物址と、土壌墓としては近隣の周辺地域においても稀にみる豊かな副葬品を伴った墓址は、この遺跡の性格を如実に示しているものと言えよう。掘立柱建物址は12世紀中葉から後半、12世紀末から13世紀初頭、13世紀前半の3ステージを考えることができる。建物群は12世紀中葉から後半の出現時においてすでにある一定の配置基準と約30cmを一尺とする尺度を基準に、著しい計画性に基づいて配されている。そしてその建物群は、その計画性をくずすことなく12世紀末から13世紀初頭の時期にはさらに拡大・整備され、13世紀前半へと受け継がれていく。

こうした基準を保持するためには、それを支えるだけの政治的・経済的な「力」が無くてはできないことである。残念ながら、春日町に関する中世初頭の文献史料はほとんど残されていないため、当時この地域がどのような政治情勢下に置かれていたのかは、まったく知る術もな

い。ただ、当時の歴史の流れから推察すれば、12世紀後半の1192年に鎌倉幕府が開府され、武士による地域支配の矛つとして新たな地頭が各地に置かれるという事実と時期的に対応してくるため、新たにこの地に任地された（在地の有力者をこれにあてたのかもしれない）新興の地頭らの職務遂行の拠点であったと考えれば非常に面白くなる。12世紀末から13世紀後半代に突然として計画性を持つ建物群が設けられる意味も、十分解釈できそうである。

ところが、13世紀の第2四半紀あたりに卓越した副葬品を持つ土壙墓が築かれて後、建物群は急激に衰えて消失してしまい、その後再び建物が築かれたようすがない。このことは、土壙墓の主が非常に政治的な立場にある人物（地頭など）であり、この遺跡の次の主が「地頭」の職務を保持することができなかったためにその政治性をも失い、建物群を維持できなくなった結果によるものとも想像できる。さらにその推測が許されるならばその原因は、1219年の北条氏による執権政治の開始と関連して起きた、幕府の地域支配の再編成によるものとも考えられる。

いずれにせよ多利・前田遺跡の調査結果は、丹波における中世の成立を考える際に欠かすことのできない重要な史料を提示したことになる。

（現在この多利遺跡群と同様、近畿自動車道・舞鶴線の建設に先がけて兵庫県教育委員会が発掘調査を行った、同町内国領所在の国領遺跡の整理作業が進みつつあるが、ここでも多利遺跡群とほぼ同時期のかかなり大型の掘立柱建物址などが確認されており、地理的な関係からも両遺跡の関係は非常に興味深いものである。整理作業の終了を待って、多利・前田遺跡との検討遺跡としておきたい。）

表3 多利・前田遺跡出土土器一覧表

遺構	土器No.	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
SB-1	1	土師器	小皿	8.5	1.7	体部ヨコナデ、底部指押え。
SB-3	12	瓦質土器	椀	(15.8)	5.3	内外面剥離、調整不明。
"	13	"	椀	—	2.8+ α	" " 底部ヘラキリか?
SB-5	58	瓦 器	小皿	(8.8)	1.75	内外面剥離、調整不明。
SB-7	59	瓦 器	小皿	(8.95)	1.35	内外面剥離、調整不明。
"	60	土師器	皿	(13.4)	2.15+ α	" "
"	61	瓦 器	椀	15.0	5.05	" 内面は横方向の磨きか?
"	62	"	椀	≒15.2	5.9	" 内面とも横方向の磨き。
"	63	"	椀	16.2	5.2	内外面剥離。
"	64	"	椀	15.2	5.05	" 調整不明(内面に粗い磨きか?)
"	65	"	椀	≒15.2	5.62	" 調整不明。
"	66	"	椀	—	2.9+ α	" "
SB-8	67	瓦 器	小皿	(8.6)	1.65	内外面剥離、調整不明。
"	68	"	椀	14.45	5.5	" (周方共横方向の磨きか?)
"	69	"	椀	(14.6)	5.3	" 調整不明。
"	71	"	椀	14.84	5.42	" "
"	72	"	椀	15.6	5.5	" "
SB-11	77	土師器	小皿	(9.4)	1.75+ α	内外面剥離、調整不明。
"	78	"	皿	(12.9)	1.55	" "
SD-1	79	土師器	小皿	(9.0)	1.58	内外面剥離、調整不明。
SD-2	2	瓦 器	小皿	8.35	2.05	内外面剥離、身込みに窪みあり、底部ヘラキリか?
"	3	土師器	小皿	8.75	2.1	内外面剥離、調整不明。
"	4	"	皿	(13.9)	2.4+ α	" " 内面体部ヘラ当り有。
"	5	瓦 器	椀	(14.0)	4.85	体部外面粗い磨き、内面ヨコナデ。
"	6	"	椀	(15.0)	5.65	外面剥離、内面剥離(ヨコナデか?)
"	7	"	椀	(13.9)	3.85+ α	" 内面I縁部ヨコナデ。
"	8	瓦質土器	椀	—	2.6+ α	内外面剥離、調整不明、底部ヘラキリか?
"	9	土師器	変	(23.6)	3.7+ α	" 調整不明。
"	10	須恵器	椀	—	1.4+ α	体部ヨコナデ、底部糸切り。
"	11	"	椀	—	0.9+ α	" "
SD-3	14	土師器	小皿	7.8	1.55	内外面剥離、調整不明。
"	15	"	小皿	(8.6)	1.95	" "
"	16	"	小皿	(4.50)	1.50	" 体部ヨコナデ、底部ヘラキリ。
"	17	"	小皿	(8.2)	1.5	" 調整不明。

遺構	土器No	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
SD-3	18	土師器	小皿	8.25	1.65	体部ヨコナデ、底部指押え。
"	19	"	小皿	8.7	1.8	内外面割離、調整不明。
"	20	"	皿	(14.7)	2.5+ α	"
"	21	瓦 器	小皿	(7.8)	1.35	体部横方向の磨き、身込みに暗文あり、底部 糸切り後ヘラケズリ。
"	22	"	小皿	(7.8)	1.65	内外面割離、調整不明、底部ヘラキリか？
"	23	"	小皿	(8.50)	1.90	"
"	24	"	小皿	(8.1)	2.0	"
"	25	"	小皿	(8.20)	1.83	" 体部ヨコナデ
"	26	"	小皿	(8.8)	1.94	" 調整不明
"	27	"	小皿	8.6	2.0	" 体部ヨコナデ、底部ヘラキリか？
"	28	"	小皿	(8.7)	1.75	" 調整不明、体部ヨコナデか？
"	29	"	小皿	9.1	1.85	外面割離、体部ヨコナデ。
"	30	"	小皿	(8.3)	1.75	" 底部指押え。
"	31	"	小皿	(8.50)	1.78	内外面割離、調整不明。
"	32	"	小皿	(9.60)	1.7+ α	外面割離、体部ヨコナデ。
"	33	"	小皿	(8.0)	1.8	体部ヨコナデ、底部指押え。
"	34	"	小皿	8.8	1.9	内外面割離、体部ヨコナデ、底部ヘラキリ。
"	35	"	小皿	8.8	1.6	" 底部指押え。
"	37	"	小皿	(8.20)	1.9+ α	"
"	38	"	小皿	(8.8)	1.7	" 底部指押え。
"	39	"	小皿	(8.7)	1.25	身込みナデ、
"	40	"	小皿	(7.60)	1.32	内外面割離、調整不明。
"	41	"	小皿	(7.85)	1.25	" 底部糸切り。
"	42	"	小皿	(7.80)	2.4+ α	外面割離、体部ヨコナデ。
"	43	"	小皿	(8.4)	2.25	内外面割離、調整不明。
"	44	"	碗	(13.7)	4.7	体部内外面横方向の粗い磨き。
"	45	"	碗	(14.8)	(4.65)	内外面割離、調整不明。
"	46	"	碗	15.6	4.8+ α	"
"	47	"	碗	14.35	5.6	" 内面に粗い磨き。
"	48	"	碗	(13.8)	5.45	" 調整不明。
"	49	"	碗	(14.0)	5.1	"
"	50	瓦質土器	碗	—	2.4+ α	" 底部ヘラキリか？
"	51	須恵器	碗	(16.2)	5.2	体部ヨコナデ、底部糸切り。
SD-5	80	須恵器	匙	(9.15)	15.5	体部上半以上がヨコナデ、以下の外面不定方 向のヘラケズリ。
SD-6	82	瓦 器	小皿	(8.4)	1.9	内面割離、体部ヨコナデ、底部ヘラキリ後指 押え。
SK-1	83	瓦 器	小皿	(8.8)	1.3+ α	体部ヨコナデ、底部指押え。
SX-1	84	土師器	小皿	8.6	1.45	体部ヨコナデ、身込みナデ、底部指押え。
"	85	"	小皿	(9.05)	1.55	内外面割離、調整不明。

遺構	土器No	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
SX-1	86	土師器	小皿	8.6	1.7	体部ヨコナデ、身込みナデ、底部指押え。
"	87	"	小皿	8.5	1.85+ α	内外面剥離、調整不明。
"	88	"	小皿	9.0	2.12	体部ヨコナデ、底部指押え。
"	89	"	小皿	(9.1)	2.2+ α	"
"	90	"	小皿	(9.1)	2.2	"
"	91	"	皿	13.75	3.55+ α	内面剥離、体部ヨコナデ。
"	92	青白磁	合子蓋	4.07	1.65	外面のみ施釉、内面ヨコナデ。
"	93	"	合子身	4.75	4.52	底部以外内外面に施釉、口縁部は釉を削る。
"	94	白磁	小皿	8.24	1.84	底部ヘラキリ、底部以外は施釉。
"	95	青白磁	合子身	3.45	1.90	底部以外内外面に施釉、受部から口縁内面まで釉を削る。
SX-2	102	黒色土器	椀	(15.8)	5.55	内外面剥離(ヨコナデか?)、底部糸切り。
"	103	土師器	小皿	(9.8)	1.8	内外面剥離、調整不明。
"	104	"	小皿	(9.7)	1.25	" " 底部ヘラキリか?
ビット	73	土師器	皿	(14.0)	1.95+ α	内外面剥離、調整不明。
"	74	瓦器	小皿	≒8.8	1.65	"
"	75	"	椀	(15.4)	5.4	"
"	76	"	小皿	8.25	1.6	" " 体部ヨコナデか?
包食層	105	瓦 器	小皿	8.2	1.65	体部内外面横方向の磨き、身込みに暗文あり 底部糸切り後ヘラケズリ。
"	106	"	小皿	(7.8)	1.35	体部横方向の磨き、身込みに暗文あり、底部 糸切り。
"	107	"	小皿	(7.8)	1.65+ α	体部横方向の磨き、身込みに暗文あり、底部 糸切り後ヘラケズリか?
"	108	"	小皿	(8.6)	1.2+ α	体部ヨコナデ、底部ヘラキリか?
"	109	"	小皿	(8.8)	1.7	内外面剥離、調整不明。
"	110	"	小皿	(9.8)	1.85+ α	"
"	111	"	小皿	8.4	1.8+ α	"
"	112	"	小皿	≒8.9	1.60	" 底部指押え、体部ヨコナデ。
"	113	"	小皿	(8.3)	1.65+ α	体部ヨコナデ、
"	114	土師器	小皿	(7.1)	1.4	内外面剥離、調整不明。
"	115	瓦 器	椀	(14.5)	4.9	外面剥離、内面ナデ。
"	116	"	椀	(13.8)	5.15	内外面剥離、調整不明。
"	117	黒色土器	椀	(13.8)	5.15	" (ヨコナデか?)
"	118	"	椀	—	2.4+ α	内外面剥離、調整不明、底部ヘラキリか?
"	119	瓦 器	椀	—	3.0+ α	体部外面ナデ、内面に粗い磨き。
"	120	"	椀	—	2.2+ α	内外面剥離、調整不明。
"	121	須恵器	杯蓋	(16.8)	1.55+ α	体部ヨコナデ、天井部ヘラケズリ。
"	122	"	杯身	(10.8)	4.15	" 底部内面ナデ、外面ヘラケズリ。
"	123	"	杯身	(13.3)	2.9	底部ヘラケズリ、以外はヨコナデ。
"	124	"	椀	—	2.3+ α	体部ヨコナデ、底部糸切り。
"	125	"	椀	—	1.9+ α	"

遺構	土器No.	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
包含層	126	須恵器	椀	—	1.5+ α	体部ヨコナデ、底部糸切り。
"	127	"	椀体	(24.6)	4.05+ α	全面ヨコナデ(東播系か?)
"	128	"	短鉢	(28.9)	2.8+ α	全面ヨコナデ。
"	129	土師器	短頸甕	8.6	7.85	内外面割臍、調整不明、底部ヘラケズリ。
"	130	瓦 器	小皿	(7.9)	1.5	体部内外面粗い磨き、底部糸切り。
"	131	"	小皿	(7.8)	2.15+ α	体部横方向の磨き
"	132	須恵器	椀	—	1.6+ α	体部ヨコナデ *
"	133	"	椀	—	1.4+ α	" *
"	134	"	椀	—	2.0+ α	" *

表4 多利・岡中遺跡出土土器一覧表

遺構	土器No.	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
包含層	135	須恵器	杯身	(14.0)	3.2+ α	底部ヘラケズリ、身込みナデ、他はヨコナデ。
"	136	"	杯蓋	8.2	3.2	天井部ヘラケズリ、他はヨコナデ。
"	137	"	杯蓋	14.6	3.15	" * 口縁部内 外面に自然釉。
"	138	"	杯身	(14.3)	3.2+ α	体部ヨコナデ。
"	139	"	杯身	(13.05)	4.2+ α	"
"	140	"	杯身	(13.2)	3.8	底部ヘラケリ、他はヨコナデ。
"	141	"	杯身	(12.2)	2.65	体部ヨコナデ、底部ヘラケリ。
"	142	"	杯身	(16.2)	3.8	" 身込みナデ、底部ヘラケズリ。
"	143	"	杯身	(17.4)	3.65	" * * *
"	144	"	杯身	(14.65)	3.65	" * * *
"	145	"	杯身	—	2.5+ α	体部と身込みヨコナデ、底部ヘラケズリ。
"	146	"	杯身	—	2.8+ α	底部ヘラケズリ、身込みナデ、他はヨコナデ。
"	147	"	稜椀	(14.8)	4.1+ α	外面縁以下ヘラケズリ、他はヨコナデ。
"	148	"	稜椀	(17.1)	4.4+ α	" *
"	149	"	杯蓋	(15.1)	2.7+ α	天井部ヘラケズリ、 *
"	150	"	甕	(12.15)	5.6+ α	内面頸部以下ナデ、 *
"	151	"	杯身	(18.1)	4.3+ α	体部ヨコナデ。
"	152	須恵質	紡錘車	直径5.75	高さ2.55	外面より1cm以下ヘラケズリ、他は指押え、底部ナデ。
"	153	須恵器	壺	—	2.75+ α	底部ヘラケズリ、体部ヨコナデ、身込みナデ。
"	154	白磁	椀	—	2.4+ α	高台から1cmのみヘラケズリ、その上は施釉内面も釉。

表5 多利・小向遺跡出土土器一覧表

遺情	土器No.	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	手 法
ビット	167	土師器	小皿	9.4	1.7	内外面刺雕、調整不明。
"	176	瓦 器	椀	(15.0)	5.1	◇ 口縁部ヨコナデ。
"	177	"	椀	—	2.5+α	◇ 調整不明。
包含層	155	瓦 器	小皿	(7.8)	1.9+α	内外面刺雕、体部ヨコナデか？
"	156	"	小皿	9.4	1.83	◇ 調整不明。
"	157	"	小皿	(10.4)	1.93	◇
"	158	"	小皿	≒9.4	2.1	内面刺雕、口縁部ヨコナデ。
"	159	"	小皿	(9.6)	1.3	内外面刺雕、体部ヨコナデか？
"	160	"	小皿	(9.4)	1.6+α	◇ 調整不明。
"	161	"	小皿	(8.8)	1.7+α	◇
"	162	"	小皿	(9.4)	2.1	内面刺雕、外面は上半ヨコナデ、下半指押え。
"	163	土師器	小皿	9.1	1.65	内外面刺雕、調整不明。
"	164	"	小皿	(8.8)	1.6	◇
"	165	"	小皿	(11.0)	1.1	外面刺雕、体部ヨコナデ、身込みナデ。
"	166	"	小皿	(9.4)	2.0	内外面刺雕、調整不明。
"	168	"	小皿	(7.8)	1.8+α	◇
"	169	"	小皿	(9.0)	1.3	◇
"	170	"	皿	(13.8)	3.0	◇ 底部糸切り。
"	171	瓦 器	椀	(12.0)	3.4+α	◇
"	172	"	椀	(16.0)	4.0+α	◇
"	173	"	椀	(16.7)	4.5+α	内面刺雕、外面口縁部ヨコナデ、体部指押え。
"	174	"	椀	16.8	3.2+α	内外面刺雕、調整不明。
"	175	"	椀	(17.5)	5.2	◇
"	178	"	椀	—	2.0+α	体部外面指押え、内面ナデ。
"	179	土師器	甕	(19.8)	7.3+α	外面全部ヨコナデ、内面は頸部までヨコナデ、以下指押え。
"	180	"	甕 (蔵骨器)	(22.4)	7.35+α	口縁部ヨコナデ、外面頸部以下右下りのタッキ、内面頸部以下ナデ(指押え)。
"	181	瓦質土器	蓋	(18.0)	2.9+α	天井部ヘラケズリ、その他はヨコナデ。
"	182	須恵器	椀	(16.0)	5.1	底部ヘラキリ、他はヨコナデ。

表6 多利・寺ノ下遺跡出土土器一覧表

遺構	土器No.	器種	器形	L径(cm)	器高(cm)	手 法
集石土壇	184	陶器	胴鉢	31.7	14.05	底部ヘラキリ、外面から内面口縁部までヨコナデ、内面オロシ目(櫛掻き)。
包含層	185	土師器	小皿	≒9.0	2.5	内外面剥離、体部指押え、底部ヘラキリ。
	186	〃	甕	(17.6)	9.0+α	内面剥離、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目。
	187	黒色土器	碗	(12.2)	3.8+α	体部ヨコナデ。
	188	瓦器	碗	11.2	5.1	口縁部ヨコナデ、体部外面指押え、内面ナデ。
	189	〃	碗	(14.0)	3.7+α	外面剥離、口縁部ヨコナデ、体部外面指押え、内面ナデ。
	190	須恵器	椀	17.4	6.6	底部と身込みナデ、他はヨコナデ。
	191	〃	碗	(17.5)	5.0	底部糸切り、他はヨコナデ。
	192	白磁	碗	(17.0)	4.3+α	内面全体に施釉、外面玉縁から1cmまで施釉。
	193	土師器	小皿	(9.6)	2.7	内外面剥離、調整不明。
	194	〃	小皿	(11.7)	3.2+α	口縁部ヨコナデ、体部指押え。
	195	〃	小皿	12.0	3.45	〃
	196	瓦器	碗	(10.4)	4.1	内外面剥離、調整不明。
	197	土師器	小皿	(13.0)	2.65	内面剥離、口縁部ヨコナデ、体部指押え。
	198	〃	小皿	13.35	3.1	内外面剥離、口縁部ヨコナデ、体部指押えか？
	199	〃	小皿	13.3	3.6	口縁部ヨコナデ、体部指押え、

註

()……………復原後の寸法

α……………器形の歪みが著しくて不正確なもの。

付載 多利・前田遺跡SX-1 出土遺物

の保存処理と材質分析

1. はじめに

多利・前田遺跡SX-1 出土遺物で保存処理を要するものは、漆箱、和鏡、刀子、鋏、毛抜き状鉄製品や玉状鉄製品があった。出土後、ほとんど手を加えずにシリカゲルで乾燥保管をしたままであったが、昭和61年に加古が奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏、肥塚隆保氏より金属製品の保存方法についての指導をうけて、保存処理を実施した。またその際に、遺物の構造を知るためのX線透過撮影や、蛍光X線による非破壊分析も、奈良国立文化財研究所に依頼して行った。

2. 漆箱の保存処理

出土当初、上面は腐朽して落ち込んでおり、全体の形状からも何の製品であるかは不明であったが、上半分をはずして清掃の結果、底面は長方形を呈していたため、漆箱と推定してほぼ間違いないものと思われる。清掃中漆膜がかなり剥落して、出土当初より漆膜の厚味が薄くなっている。周囲の土ごと切り取って取り上げたのち、冷暗室で1年を要して水分を少しずつ蒸発させて自然乾燥を行って保管していた。取り上げた漆箱上面の周まりの中にも遺物がある可能性があったため、X線透過撮影を行ったところ、玉状鉄製品（第42図）が1個あるのが確認されたため、一部を壊して取り出した。漆箱には、自然乾燥のための亀裂がかなりはいついたため、パラロイドB72とトルエンの混合樹脂溶液5～10%のものを何回も塗布して強化した。X線透過撮影では、漆箱の外枠を固定するような金具は見当たらなかった。

3. 鉄製品の保存処理と材質分析

A. 鋏

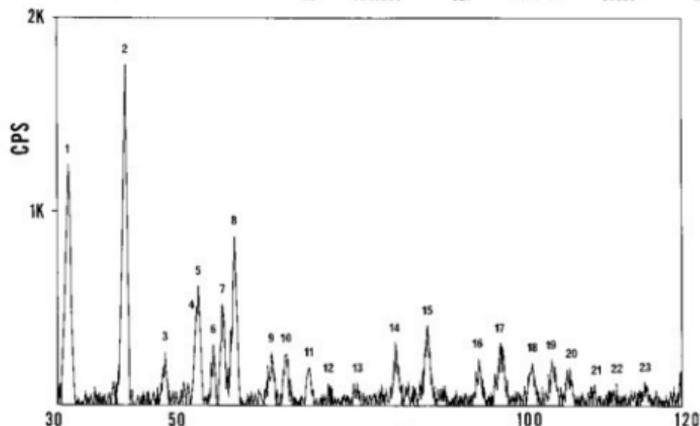
鋏は出土当初刃部が折られて、握り手部分と重なった状態で検出された。かなり水分を含んでおり脆弱で、握り手部分は完存していたが、取り上げ時に破砕してしまった。乾燥後、付着した粘土を丁寧に落して、アルコールで洗浄し、パラロイドB72とトルエン混合樹脂溶液5～10%のものを含浸して仮強化後、接合を行った。粉々に破砕してしまった部分はバンドオールで復原整形を行い、NAD-10で樹脂含浸を行った。

B. 毛抜き状鉄製品

毛抜き状の鉄製品は、漆箱中にあったもので、炭化物をはさみこんで外側からその部分を糸

で巻いて固定していた。そのまま取り上げると形状を壊してしまったり、漆箱にも穴があく恐れがあったため、はずさず漆箱と共に取り上げ、一緒に自然乾燥を行った。そのため、かなり長い期間飽和状態の中で水分を含んだまま置かれていたために、一層脆弱になってしまい、固定のため巻かれていた糸が剥落してしまったりした。漆箱の強化の際に、同様にパラロイド B72 溶液を塗布して取り上げられる状態まで仮強化した。先端部は漆箱からははずす際に若干欠損したためボンドオールで復原整形したが、当初より先端部は錆着し腐蝕の度合いが激しかったため細部の形状は X線透過撮影でも確認できなかった。木質状のものは、当初曇ではないかと推定したが、炭化物である以上の確認は出来なかった。

	No.	2THETA	Peak search result INT.	FWHM	d	I/O
	1	31.740	1246	0.105	4.186	71
	2	39.920	1764	***	3.354	100
	3	45.540	272	***	2.958	16
	4	50.240	606	***	2.697	35
	5	50.400	612	***	2.689	35
	6	52.600	306	***	2.584	18
	7	53.960	529	***	2.523	30
	8	55.600	865	***	2.455	49
	9	60.860	234	0.150	2.260	14
	10	63.160	262	***	2.186	15
	11	66.440	187	***	2.090	11
	12	69.160	112	***	2.017	7
	13	73.380	119	***	1.916	7
	14	78.880	319	***	1.802	18
	15	83.500	402	***	1.719	23
	16	90.840	240	***	1.607	14
	17	93.960	324	***	1.566	19
	18	98.600	223	***	1.510	13
	19	101.440	234	***	1.479	14
	20	103.740	178	0.120	1.455	10
	21	107.660	107	***	1.418	6
	22	110.680	118	***	1.392	7
	23	114.800	127	***	1.350	8

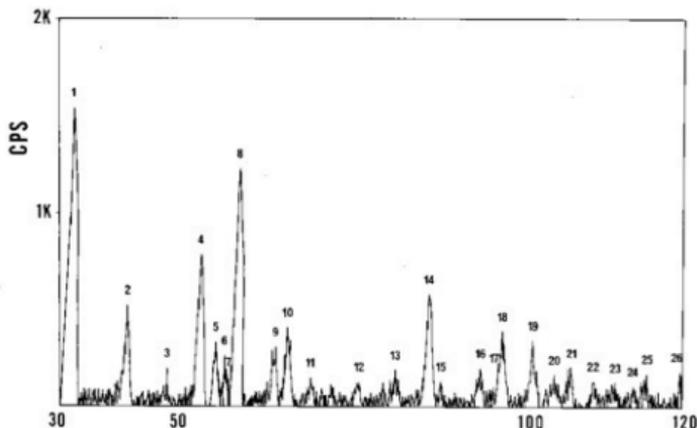


第69図 玉状不明鉄製品の玉の内面サンプルのX線回折チャート

C. 玉状不明鉄製品

玉状の不明鉄製品は、非常に興味深いものである。1つは青白磁小壺のすぐ西側に置かれていた4.7×3.5cmの固まりである。外見上からは鉄滓のようなものに思われていたが、X線透過撮影の結果、不整形な径1×0.8cm程度の小さな固まりが連珠のようにになっているのが確認されたが、すべて透過状態で撮影されていたため金属とは思えなかった。そのため、外側の表面の

	No.	2THETA	Peak search result			d	I/10
			INT	FWHM			
	1	31.740	1535	0.135	4.186	100	
	2	39.880	526	***	3.357	35	
	3	45.600	203	***	2.954	14	
	4	50.340	784	***	2.692	51	
	5	52.640	337	***	2.582	22	
	6	53.980	264	***	2.523	18	
Start angle :	3 0	7	54.220	201	***	2.512	13
Stop angle :	1 2 0	8	55.700	1229	***	2.451	80
Scan speed :	5	9	61.260	310	***	2.247	21
Step/sampling:	.0 2	10	62.960	410	***	2.192	27
Fixed time :	0	11	66.440	150	***	2.090	10
Full scale :	2 0 0 0	12	73.360	130	0.150	1.916	9
Cps/count :	1	13	78.720	169	***	1.805	11
Smoothing :	0	14	83.420	579	***	1.721	38
Slit (DS) :	.3 4	15	85.240	136	***	1.691	9
Slit (RS) :	.3 4	16	90.820	197	***	1.608	13
Slit (SS) :	0	17	91.040	197	***	1.604	13
Voltage (KV) :	3 0	18	94.220	392	***	1.563	26
Current (mA) :	1 0	19	98.560	344	***	1.510	23
		20	101.680	172	***	1.476	12
		21	103.700	201	***	1.456	13
		22	104.000	210	***	1.453	14
		23	107.440	132	***	1.420	9
		24	110.460	133	***	1.394	9
		25	114.940	177	***	1.358	12
		26	119.840	159	0.120	1.323	11



第70図 玉状不明鉄製品の玉の外表面サンプルのX線回折チャート

錆着した錆を少しずつ落していくと、肉眼でも黒灰色の不整形な玉状のものが詰まっているのが確認された。表面は少しざらざらとした感じで、アスファルトが固まったようなものであった。玉状製品を確認するために外側の表面を 3×3 cm程度開けた際に、覆われている表面が何であるかを確認するため、実体顕微鏡で断面観察を行った。それによると、表面は何層にもなる薄い膜状のものであった。外見からの肉眼観察からも、玉状のごつごつした出っ張りがそのまま見られることから、単なる錆ではなく、玉状の製品をくるんだ布が錆着して錆化してしまったものではないかとの推定が得られた。この玉状のものが何であるかを知るために表面とその内部から若干資料を採取して、X線回折を行ったが、鉄の化合物しか検出されず、鉛やガラス等の物質は検出できなかった。漆箱の上部より検出されたもう1つの玉状の製品は 4.0×2.6 cmの少し小形の圓まりである。X線透過撮影にて、前者と同様、透過した不整形な玉状のものが確認された。外側に覆われているものは両者とも布であった可能性が強く、部分的に内部を確認しただけで全体の錆落しは行わなかった。これらの不明な金属製品は一緒に土壌内に埋納されており、1つは漆箱中に納められるなど貴重な物であったと思われるが、不整形で身につける所持品とも考え難く、何に使用されるものか不明である。経塚出土遺物の中にも類例は見当たらなかった。

4. 和鏡の保存処理と材質分析

A. 保存処理

出土した和鏡は瑞花鸞菊鏡1面である。出土当初、鏡背が上面にして置かれ、木質が部分的に残存し、鏡面下にも木質部が見られて箱に納められていたことが推定できた。鏡を取り上げたところ、鏡面側に付着した粘土に布の圧痕（1cm角内に糸32本 \times 32本位か）がみられた。おそらくは、布にくるんだ後鏡箱に納めたものと思われる。鏡箱には残存していた木質部の状態から、八角形や正方形ではなく、長方形の箱であったと思われる。残存していた木質部を奈良国立文化財研究所の光谷拓三氏に樹種鑑定を依頼したところ、ヒノキであった。漆などは検出されなかった。

和鏡は暗緑色を呈し、通常出土青銅製品に必ず見られるような緑青などの錆はまったくみられず、保存状態は非常に良好であった。鏡胎はかなり厚く、X線吸収は大であった。X線透過撮影条件は電圧140KV、電流2mA、焦点距離60cm、照射時間6分で行った。その結果、鑄造の際に出来た小さな空洞状のものが若干認められたのみで、内部に腐蝕はみられず、錆上り等非常に良好な製品であった。

和鏡は、分析調査後、防錆処理としてベンゾトリアゾール3%、メチルアルコール溶液内にて減圧含浸を行い、強化処理としてパラロイドB72溶液5~10%、トルエン溶液内にて減圧含浸を行った。(鏡面に付着している粘土に布の圧痕がみられるため、粘土は除去せず含浸を行った。)

B. 材質分析

a. 定性分析

材質分析は、まず蛍光X線による非破壊的手法による定性分析を行った。鏡面11ヶ所にX線を照射して、それぞれの箇所での銅、錫、鉛のX線ピーク値($\text{CuK}\beta\text{-II}$ 、 $\text{SnK}\alpha\text{-I}$ 、 PbLr-I)を測定し、各測定値から(錫/銅)X線ピーク比をY軸に、(鉛/銅)X線ピーク比をX軸にとり、散布図上にプロットする。次に原点から各プロットした点を通る最適の直線を求め、その傾きをその遺物の錫/鉛の含有量相対値として比較する。その結果、傾きの大きい方がより錫の含有量が多い事を示す。第72図が蛍光X線による定性分析の結果である。錫/鉛の相対的な含有量比を示す直線の傾きは、4.98であった。第73図は鏡面の中心部の蛍光X線チャート図である。和鏡の材質は、銅と錫が主成分で、副成分に銀、鉛、比素、鉄を検出した。

b. 定量分析

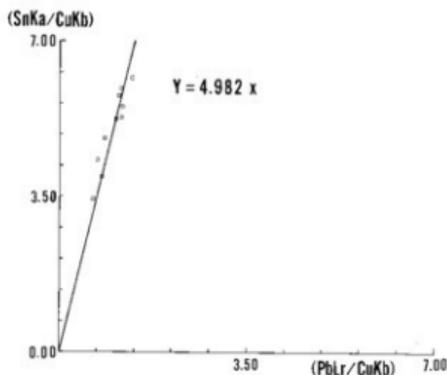
非破壊による定性分析を行ったところ、通常の出土和鏡よりはるかに多い錫の含有量が認められた。これは、古墳時代出土の舶載鏡と思われる白銅質の鏡よりも数値が高いものであった。分析した結果、錫の含有量の値が大きいのは定性分析が非破壊による表面分析のため、和鏡製作仕上げの際の錫アマルガムの痕跡を測定した可能性も考えられたため、鏡面部分を直径3cm程度表面研磨して定量分析を行い、正確な含有量を求めることとした。

照射部分に直径2cmのチタンのマスクをかけ、錫($\text{SnK}\alpha\text{-I}$)と鉛(PbLr-I)と銅($\text{CuK}\alpha\text{-I}$)の値を同一面で5回ずつ測定し、平均値をとって測定値とした。

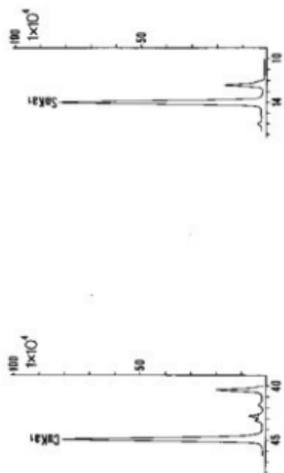
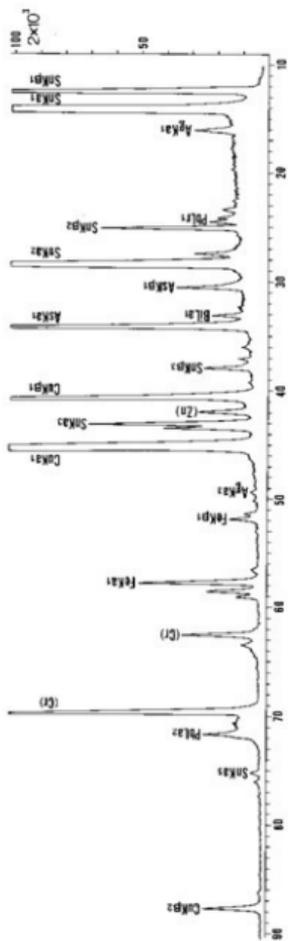
1回目は研磨しない出土当初の面での測定、2回目はその面をサンドペーパーで研磨した後



第71図 和鏡の蛍光X線による非破壊分析測定箇所(鏡面部)



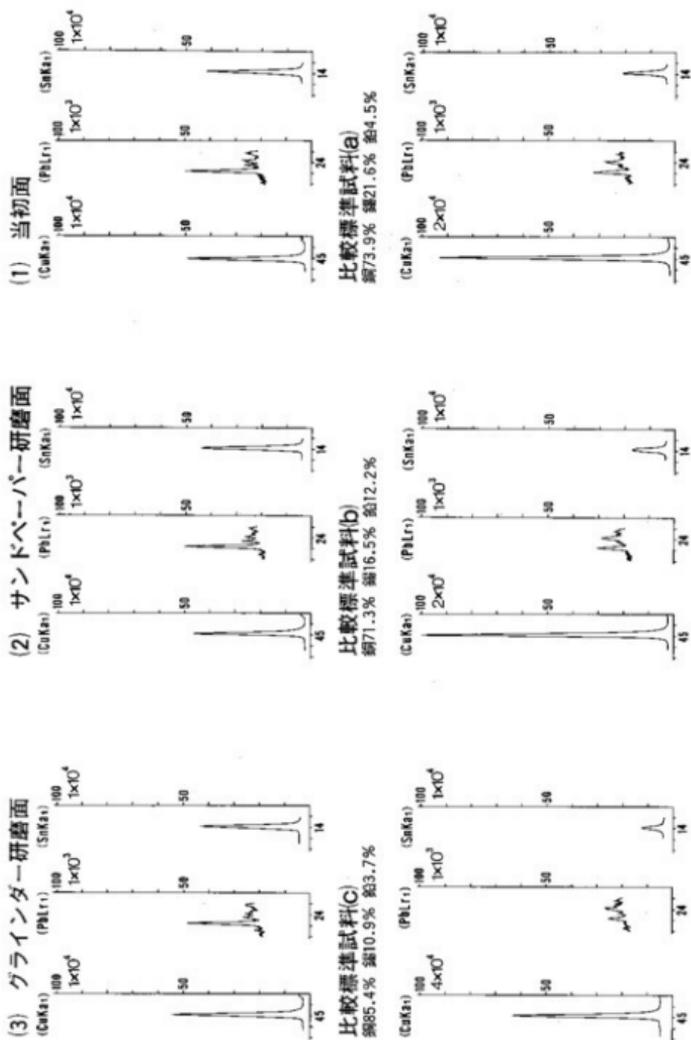
第72図 和鏡の蛍光X線分析による錫/鉛の相対含有量の比較



Scintillation Counter

Target Cr
 Voltage 40 Kvp
 Current 20 mA
 Time constant 2 sec
 Scanning speed 1°/min
 Chart speed 1 cm/min
 Crystal LiF

第73図 和鏡の蛍光X線定性分析チャート図



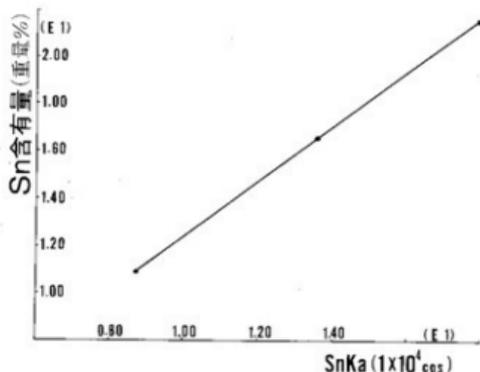
第74図 和鐘と比較標準試料の蛍光X線定量分析チャート図

の測定、3回目はサンドペーパーで研磨後の面をさらに小型グラインダーで研磨した面を測定した。比較試料として、錫、鉛、銅の標準試料3点 (Ⓐ)錫21.6%、鉛4.5%、銅73.9%・(Ⓑ)錫16.5%、鉛12.2%、銅71.3%・(Ⓒ)錫10.9%、鉛3.7%、銅85.4%も同様に測定し(第74図)、検量線を作成した。標準試料に含まれる錫、鉛、銅の含有量とその時のX線ピーク強度値から最小自乗法により検量線を求めた。第75図が錫の検量線である。X線ピーク強度をX軸にとり、錫の含有量をY軸にとっている。この場合、 $Y=1.17x+0.72$ でその時の相関係数 $r=0.999$ であった。測定した錫のSnK α ピーク強度を上記の式にあてはめると、当初の面での錫は45.03%、サンドペーパー研磨面は47.46%、グラインダー研磨面は47.36%であった。

同様に銅について測定を行ったところ、当初面では51.92%、サンドペーパー研磨面51.65%、グラインダー研磨面52.49%であった。鉛に関しては、試料のX線ピーク強度が弱いため(含有量が3%以下と少ないため)、定量値は特に出さなかった。

以上のように、鏡面を研磨した後の定量分析でも、錫47.46%、銅51.65%という錫の高い含有量が確認された。使用した標準試料の中でⒶ以上に錫の含有量が多いものがなく、検量線上で求めた数値であるため錫30%以上のものについては何%かの誤差はあるものと思われる。しかしながら、10%以上もの誤差が出るとは考え難く、多少の誤差を差し引いたとしても錫が40%以上含有していることは、ほぼ間違いないものと思われる。実際、肉眼観察や硬度からも標準資料Ⓐよりはるかに錫の含有量が多いことを示していた。

近年、出土青銅器について自然科学的方法による分析例がかなり増加してきている。鏡の場合は古墳時代の出土鏡の分析例が多く、和鏡の分析例は非常に少ない。多利・前田遺跡出土の和鏡の場合、錫の含有量が40%以上あると思われ、中国製の白銅鏡の分析値が通常20~30%ぐらいであることから比較すると、かなり異常な数値のように思われる。しかし、白銅鏡といわれる和鏡の分析例は少なく、比較断定はできない。当時の鏡の鑄造技術を知るうえで、今後分析例が増加して、新たな検討がなされることを期待したい。



第75図 標準試料より作成した錫の検量線

图 版



SX-1 完掘の状況



SX-1 内副葬遺物出土の状況



SX-1 出土輸入磁器



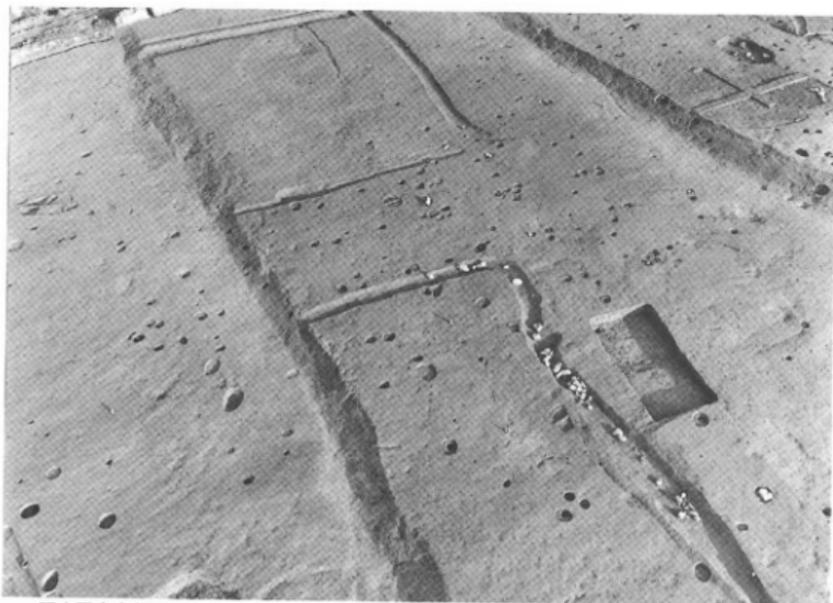
多利・前田遺跡発掘調査区全景



多利遺跡群全景 (南より)



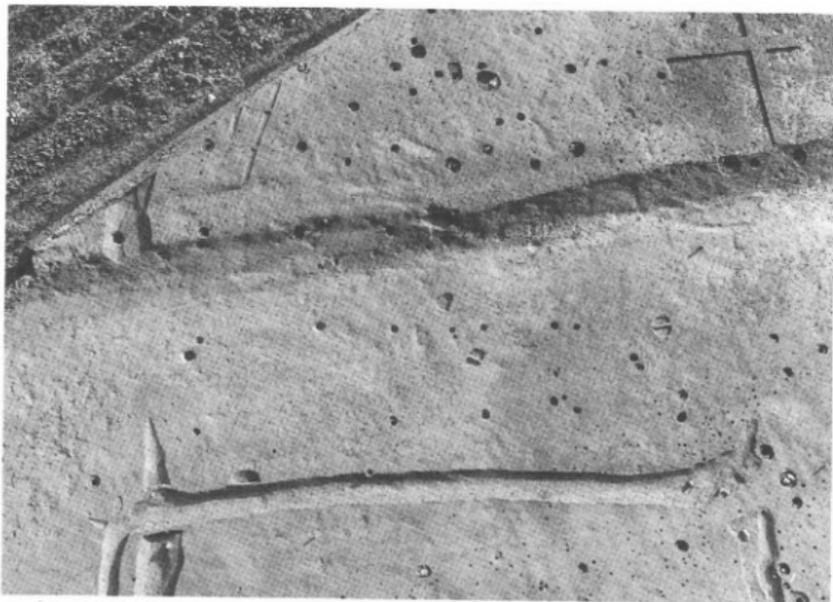
SD-1・2、SB-7・8 検出の状況 (西より)



調査区中央部から南東部（西上方より）



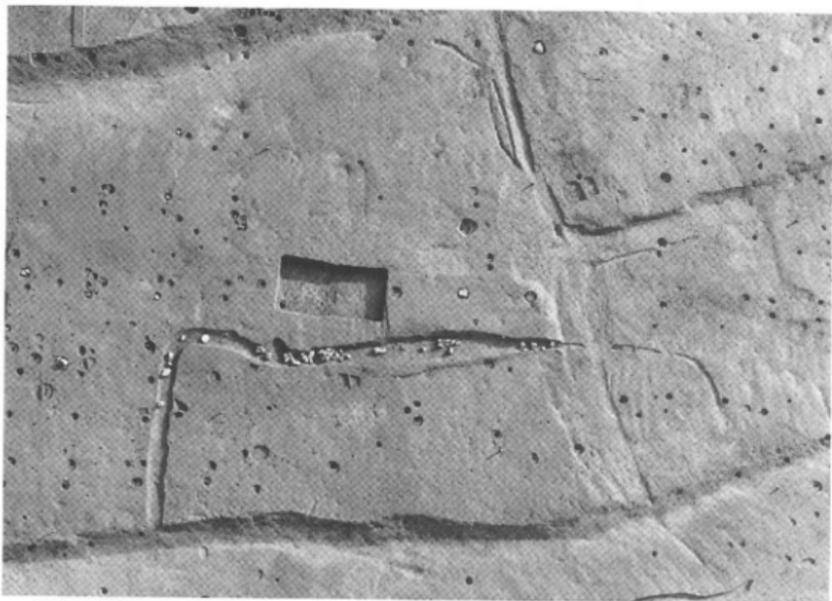
遺跡中央部の各遺構（北より）



SB-1とSD-1・2



SB-2・SK-1 (北より)



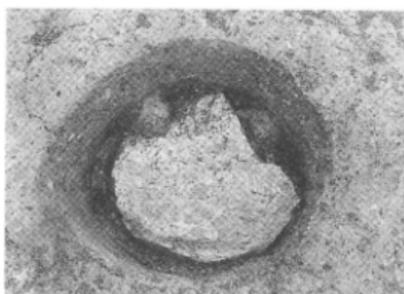
SB-3 とSD-3



SB-3 柱穴3



SB-3 柱穴18



SB-3 柱穴4



SB-3 柱穴5



SB-3 柱穴9



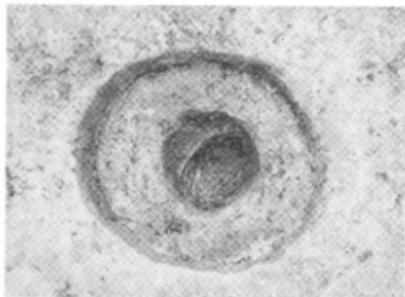
SB-3 柱穴11



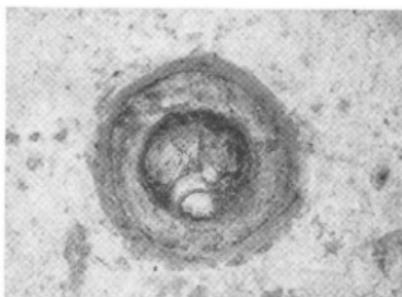
SB-4・5・6・9 (北より)



SB-7・8とSD-3・4 (北より)



SB-7 柱穴5内瓦器椀出土の状況



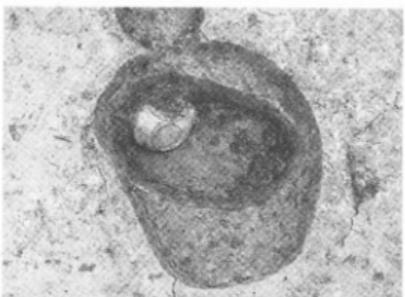
SB-7 柱穴6内瓦器椀出土の状況

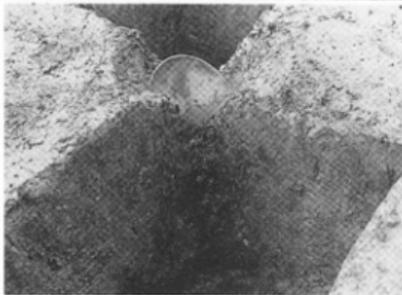
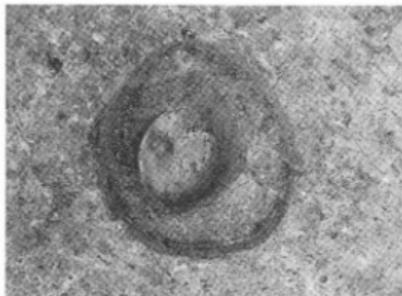


SB-7 柱穴11内瓦器椀出土の状況



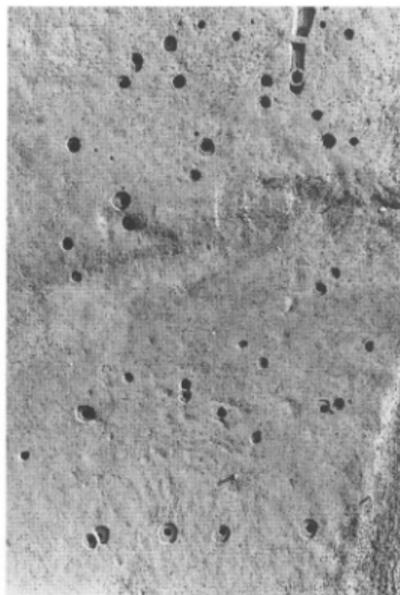
SB-7 柱穴9(上)・SB-7 柱穴15(下)



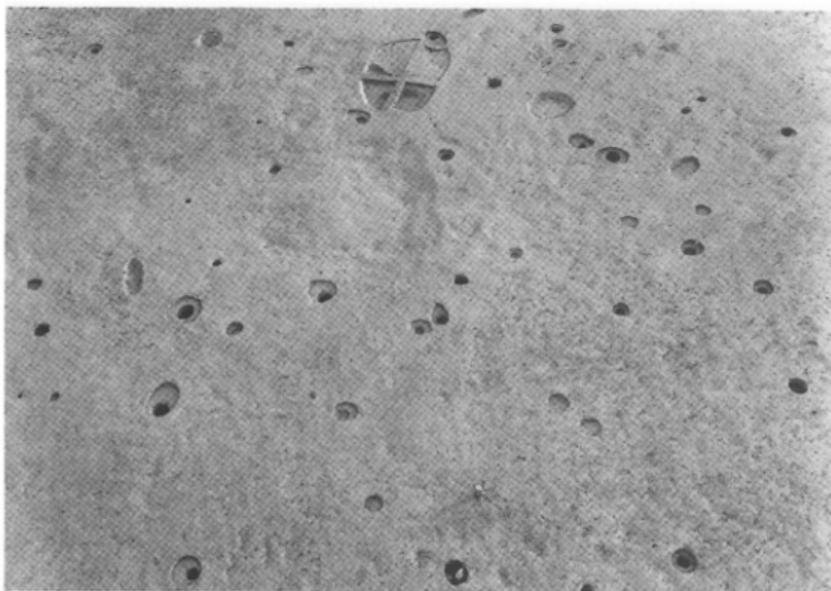


SB-8 柱穴12内瓦器碗出土の状況

SB-8 柱穴15(上)・SB-8 柱穴18(下)



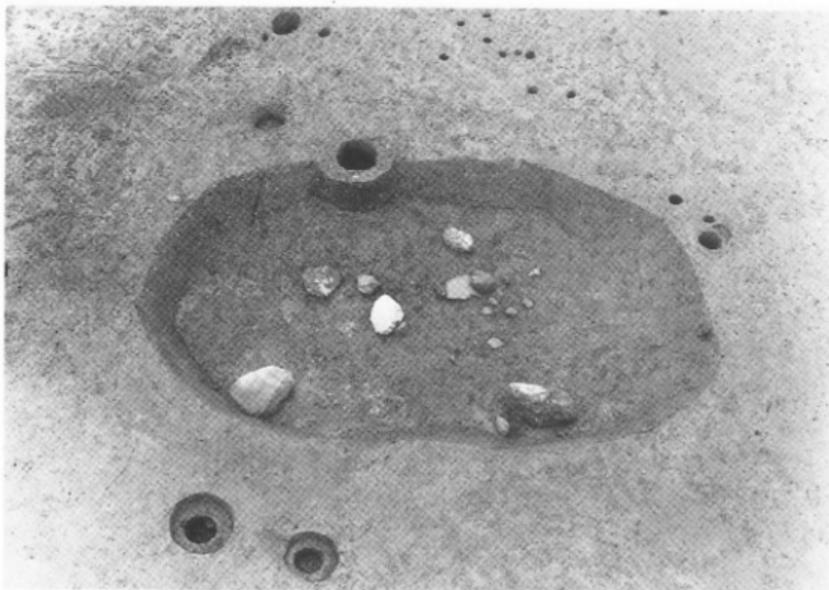
SB-9



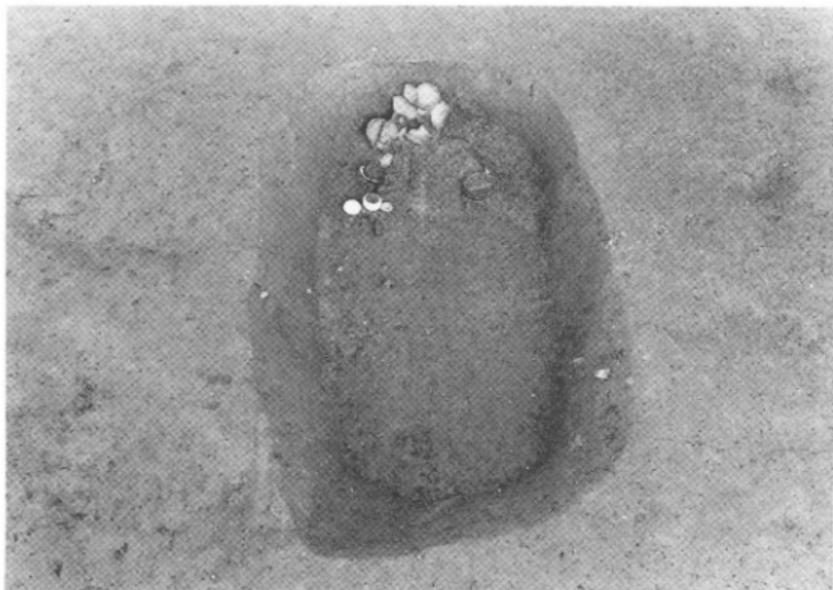
SB-10・11 (北より)



SD-1・2・4 (北より)



SX-2 (東より)



SX-1 完掘の状況 (西より)



SX-1 発掘の状況（北より）



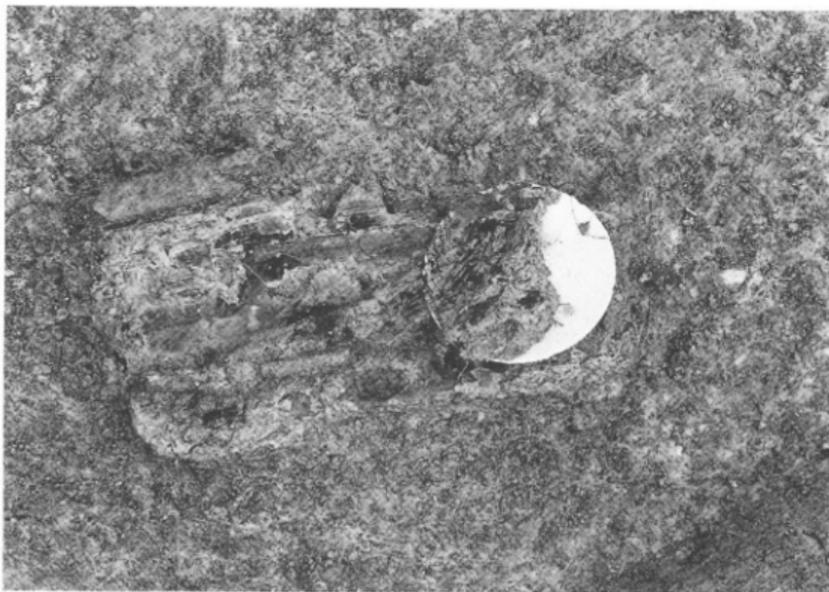
SX-1とSD-6



SX-1 内北東部遺物出土の状況



SX-1 内和鏡・握り鉄出土の状況



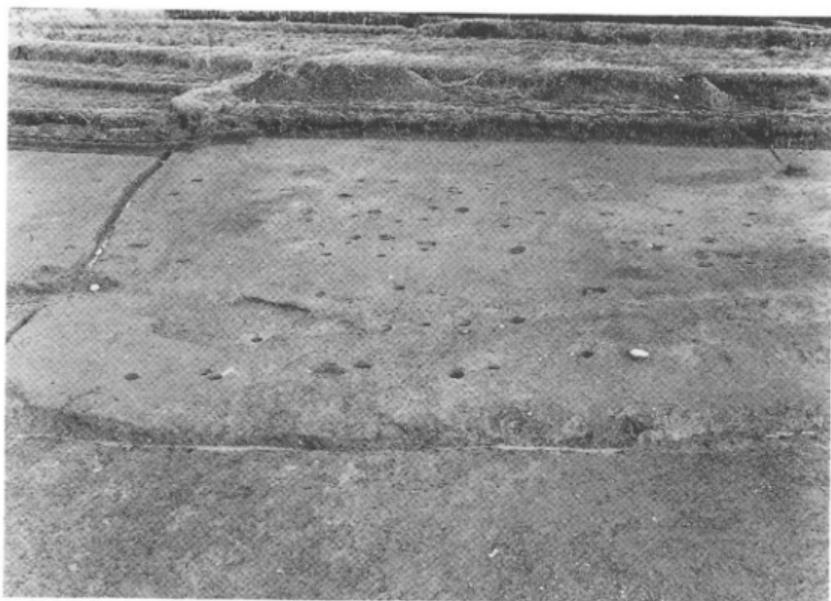
SX-1 内白磁皿・鉄製品・漆膜出土の状況



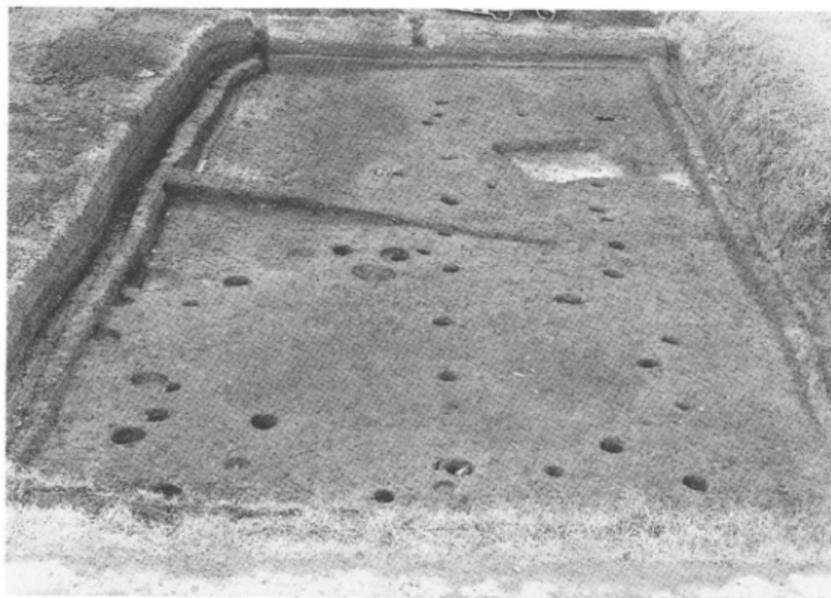
SX-1 遺物取り上げ後の状況



多利・岡中遺跡から小向・寺ノ下の各遺跡を見る



調査区中央部（北より）



多利・小向遺跡調査区全景（南より）



包含層内出土蔵骨器片



多利・寺ノ下遺跡 (松ノ本古墳群より)



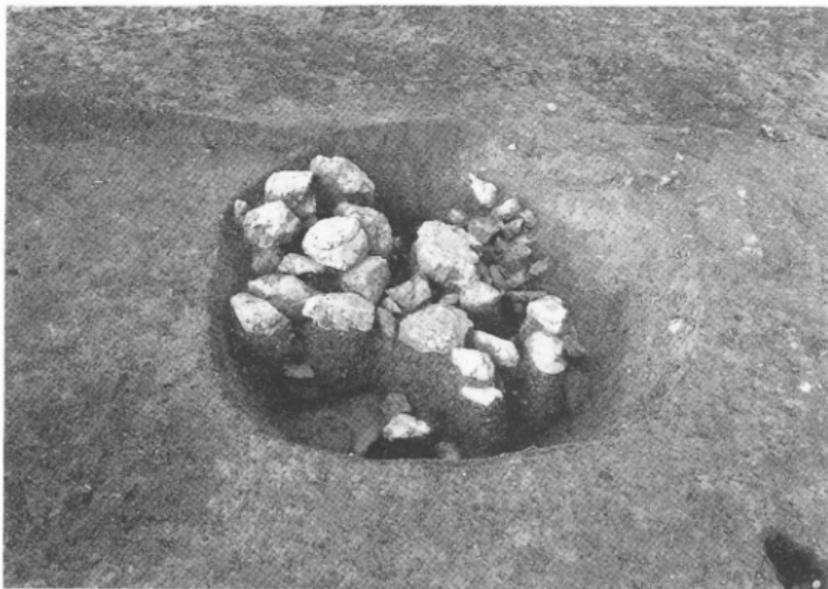
第2区全景 (西より)



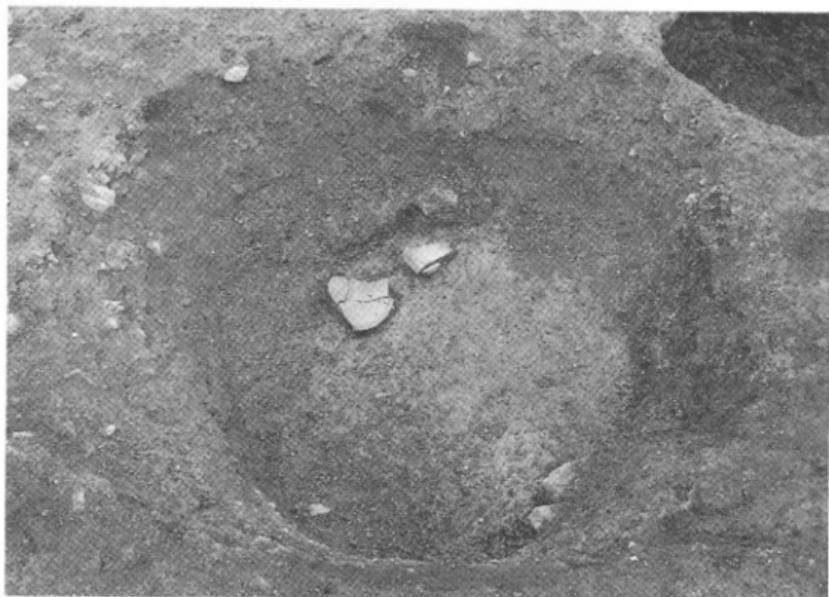
第3区検出の土窟（東より）



第6区全景（西より）



第6区集石土坑



横底部内攪鉢出土の状況



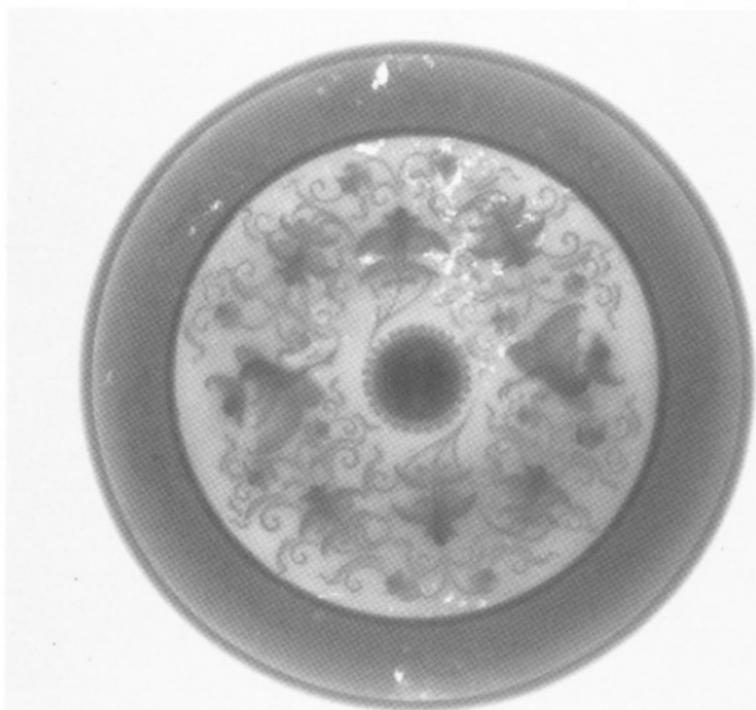
第1トレンチ検出遺構状況（東より）



第2トレンチ 土師器小皿出土状況



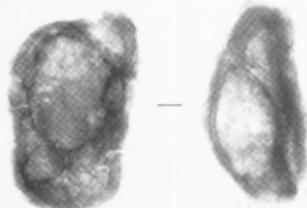
SX-1 出土瑞花鶯鷺鏡



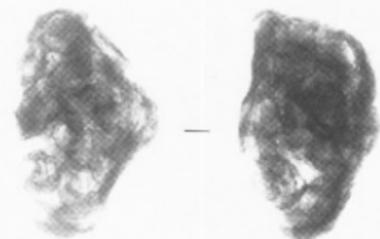
96



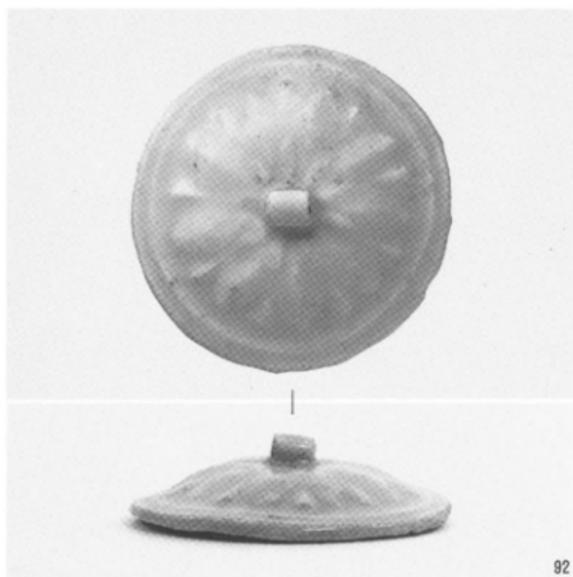
97



100



101

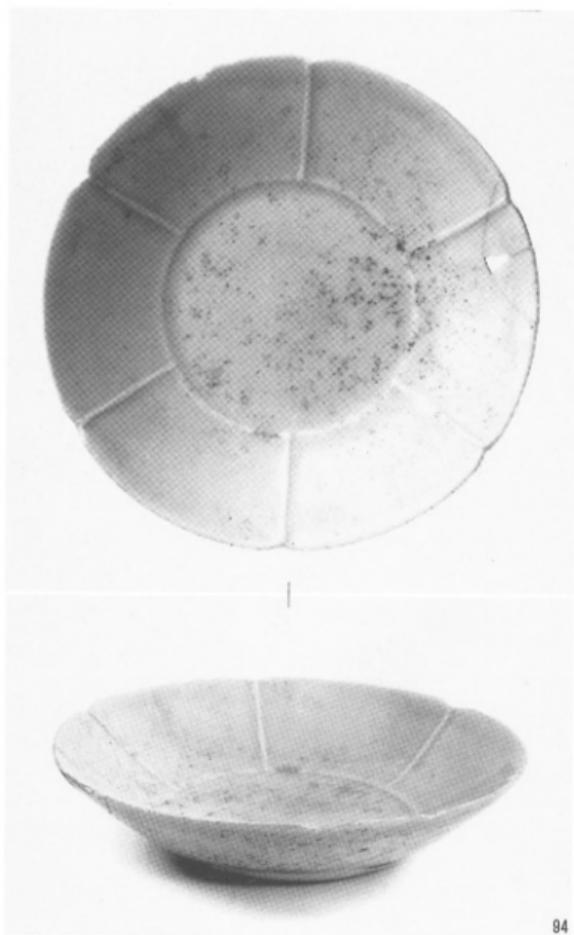


92

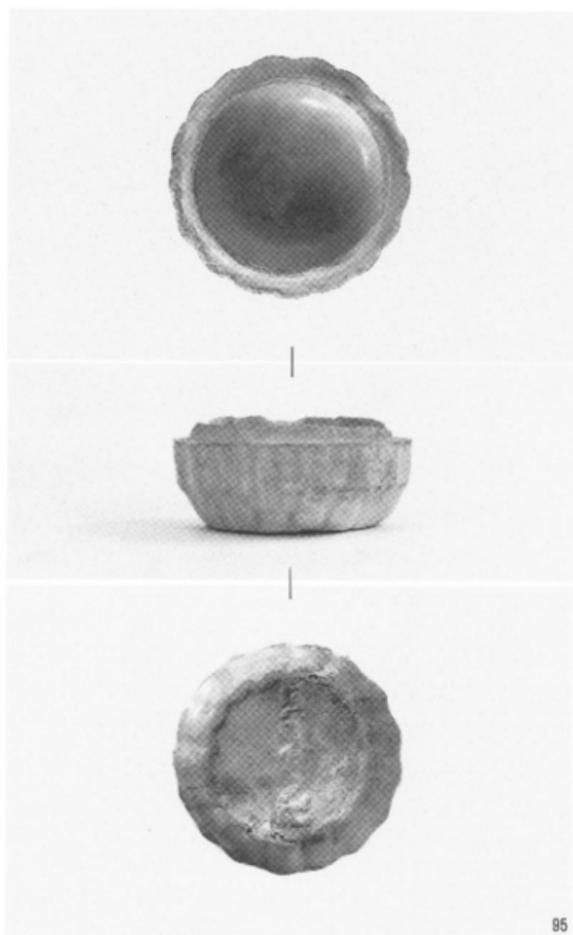


93

SX-1出土青白磁蓋付き小壺



SX-1出土白磁皿



SX-1出土青白磁合子



84



91



85



88



89



86



87



90



104



14



18



19



16



24

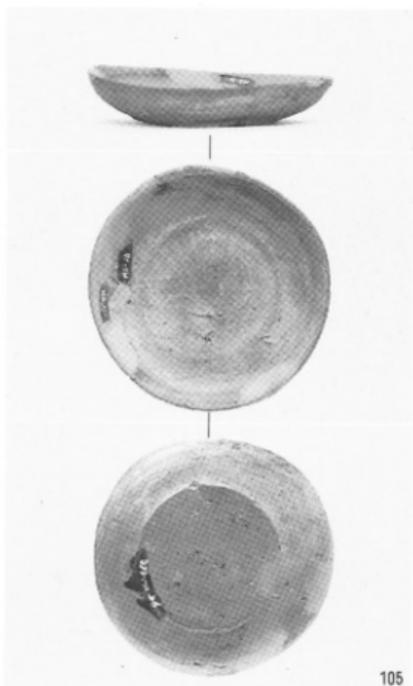
土師器小皿



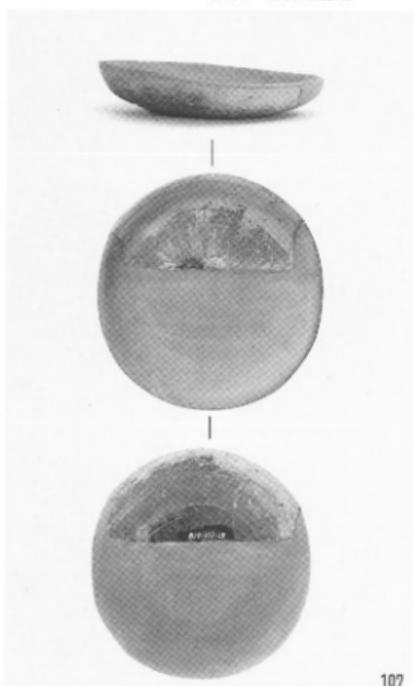
土師器小皿



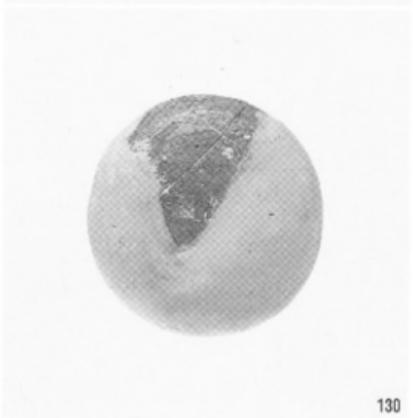
瓦器小皿



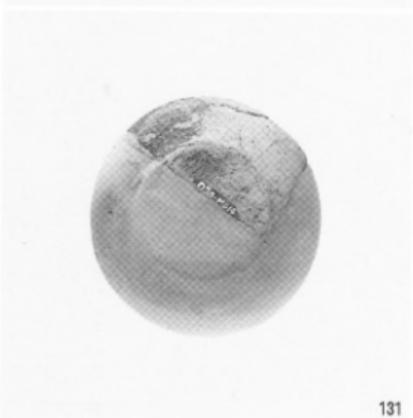
105



107



130



131

瓦器小皿



瓦器小皿



74



76

瓦器小皿



21



65



62



61



64



63



68

瓦器椀



瓦器碗



瓦質土器碗

黒色土器碗



122



123

須恵器



80

須恵器壺



129

土師器短頸壺



207

石器



208



SX-1 内出土鉄製品



SD-3 内出土土錘

須恵器蓋



136



137



152



206

須恵質紡錘車



201

確認調査No32グリッド出土縄文土器

瓦器小皿



158



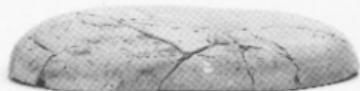
163



167



162



181

瓦質蓋



169



156



157

土師器甕

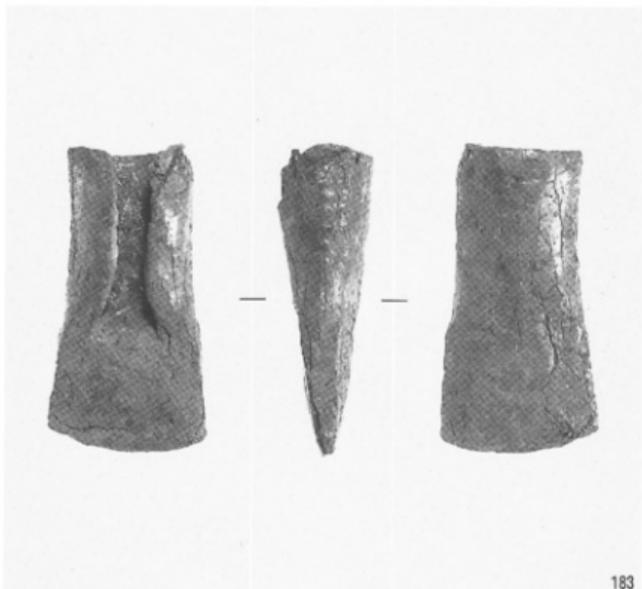


180



170

土師器皿



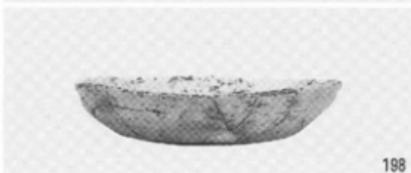
包含層内出土鉄斧

183



確認調査No.39グリッド出土瓦質製品

202



土師器小皿

須恵器稜椀

瓦器椀



兵庫県文化財調査報告書 第46冊

多利遺跡群

近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書(Ⅷ)

昭和62年3月31日 発行

編集発行 兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL 神戸(078) 341-7711

印刷 阪岸本印刷所
高砂市米田町米田400-1
〒676 TEL 高砂(0794) 32-0123代

